

平成21年度 文部科学省 大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム

プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育 ～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～

取組報告書

2012年3月

あいさつ

同志社大学副学長・教育支援機構長・法学部教授 土田 道夫

同志社大学では、平成18年度より「社会の教育力を大学に」をスローガンに掲げた「プロジェクト科目」を全学共通教養教育科目として設置した。本科目は、学生がプロジェクトに基づきチーム単位で能動的な学び合いを行うことを基調とする課題探究型学習 (Project-Based Learning = PBL型学習) によって授業が運営されている。また、広く社会から科目テーマを公募し、社会人の方に科目を担当いただくことで、社会連携・地域連携を重視した教育内容を実現している。毎年、25科目程度の開講クラス、約250名の履修者がある。学期末に行う各種アンケートの結果を見ると、担当者・受講生共に満足度が高い。一例として、学生成果報告書に記載している各クラス代表者による後輩へのメッセージにおいても、それぞれの表現は異なるものの、「思い通りに成果が出ないこともあるが、充実した時間を過ごすことができる」とあり、大学の授業で社会と触れ合った学生たちの本音が語られている。



さて、平成20年12月公表の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」では「一方的に知識・技能を教え込むのではなく、豊かな人間性と課題探究能力の育成に配慮した教育課程を編成・実施する」ことが求められた。同志社大学においては本答申に先んじ、これらを体現化する一つの取り組みとして「プロジェクト科目」を設置し6年が経過した。そして、この間、2度にわたり文部科学省のGood Practiceに採択された。1度目が平成18年度「公募制プログラムによる地域活性化～往還型地域連携活動のモデル作りを目指して」であり、2度目が平成21年度「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～」である。

2度目となる今回のGPにおいては、プロジェクト推進に必要とされる広範囲な知識や技能を総合的・創造的に運用する能力・モラル（良心）を「プロジェクト・リテラシー」として捉え、更なる満足度、更なる学習効果の充実を図るため、プロジェクト・リテラシーを習得するための教育方法とモデルを提示すべく取り組んできた。

これらの能力・モラル（良心）はまさに同志社の創立者である新島襄が大学設立の際にも掲げた「知識あり、品行あり、自ら立ち、自ら治むるの人民」の育成にかなったものであり、言うまでもなく本学の建学の理念（「良心を手腕に運用する人物の育成」）に則ったものである。まさしくこれらを体現することとなった本事業は、本学において非常に意義深いものであった。

本事業において新たに発足した「PBL推進支援センター」については、学内・他大学・各教育研究機関から多数の問合せ・ヒアリングにお越しいただく等、社会的にも評価をいただいている。これら学内外問わず広く社会への貢献も踏まえ、次年度以降についても本学にて「PBL推進支援センター」を維持・継続することとなった。今後も積極的にPBLについての研究・発信を行う所存である。皆様より忌憚のないご意見を頂戴するとともに、今後ともご支援いただければ幸いである。

あ い さ つ

同志社大学全学共通教養教育センター所長・言語文化教育研究センター准教授 西 納 春 雄

同志社大学は他大学に率先してPBL教育に早い時期から取り組んできた。本格的な取り組みは、2003年に京田辺校地に同志社ローム記念館が開設された折に、課外活動の一環として発足させた、「ローム記念館プロジェクト」にさかのぼる。同志社ローム記念館の設計段階において、記念館を少数の研究者や専門家にのみ開かれた研究センターとするのではなく、より多くの学生と教員に開かれた教育の場にしようという趣旨でプロジェクトチームが生まれ、その成果として建物と、それにふさわしい教育方法が設計されたのであった。ここに学生の自主的な計画立案と、企業・自治体・NPOそして教員の参加の下にプロジェクトを募集し実施するというPBL教育の大胆な試みが始まった。



大学を超えた連携の下に、社会性・創造性・協調性を養うこのプロジェクトは、課題を発見し問題解決を図るプロセスにおける実践教育であり、最終結果よりもその到達過程を重視し、総合的な人間力育成を目指すことを特長としていた。これは、2008年12月に中央教育審議会が公表した答申「学士課程教育の構築に向けて」が、「21世紀型市民」の育成にむけ、大学が『何を教えるか』よりも『何ができるようになるか』を模索し、「教育内容以上に、教育方法の改善の重要性」を見据えた大学教育の改革を提唱する遙か以前のことであり、本学のPBL教育の試みが日本の大学教育の方向性を先導してきた感がある。

2004年度には、『プロジェクト主義教育による人材育成「プロデュース・テクノロジー」の創成』が文部科学省の現代GP「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択され、PBL教育の試みの理論を構築し実践に移す試みが開始された。2006年度より、ここで培ったノウハウを、正課の科目「プロジェクト科目」として教養科目の中に位置づけ、一般の学生が履修できる形で全学カリキュラムに導入する試みを行い、これが再び文科省のGPに採択された。「公募制プログラムによる地域活性化～往還型地域連携活動のモデル作りを目指して」がそれである。ここに地域社会や企業・団体・個人の持つ教育力を大学の正課授業に取り入れ、現場で学び、本物に触れることを通して、取り組むべき課題を発見し、解決に向けて協力し努力するというPBL教育が、全学の学生に向かって開かれることになった。さらに、今年度に終了する本事業、「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～」は、これまでの豊かな実践体験に基づき、PBL推進支援センターとPBL推進協議会での教育・研究活動を通して、高等教育におけるPBL教育の発展と普及を推進し、教養教育におけるPBLの汎用性を発信してきた。この試みは今後

も継続し、PBL教育の改善と発展に今後長く貢献するものと信ずる。

このように、同志社大学において発展してきたPBL教育を振り返ると、PBLは3つの時期を経て現在に至っていると思われる。ローム館プロジェクトとして発足した第1期の揺籃期、教養科目として整備された第2期の成長期、そして、2009年度より発足した本プロジェクトによる、PBL教育の方法論的整備とさらなる促進の、第3期の発展期である。現在本学では、プロジェクト科目の他に、専門科目・大学院科目等で約15のプロジェクト型科目が運営されている。今後同志社大学のPBL教育は、学内のより多くの多様な教育の中に波及し、本学における学びに活力を与えると共に、PBL教育のより大きな発展と推進に向けて学外へ積極的に発信していくことを期待する。

目次

CONTENTS

あいさつ	
同志社大学副学長・教育支援機構長・法学部教授 土田道夫	1
同志社大学全学共通教養教育センター所長・言語文化教育研究センター准教授 西納春雄	2
目次	3
プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育 ～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～	
同志社大学PBL推進支援センター長・プロジェクト科目検討部会長・文学部教授 山田和人	4
取組について (目的・概要・組織図・全体スケジュール・会議一覧)	10
PBLにおける学習支援	
年間行事例 教育支援機構 教務部教務課 プロジェクト科目検討部会事務局・ PBL推進支援センター事務局 弘田一恵	23
教員の役割 プロジェクト科目検討部会委員・文学部准教授 伊達立晶	27
職員の役割 国際連携推進機構 国際センター留学生課長・前 教育支援機構 教務部教務課 教務係長 中原伸夫	29
CNS PBL推進支援センター委員・プロジェクト科目検討部会委員・文化情報学部教授 鋤柄俊夫	34
CNSの運用と改善について 株式会社SIGEL	36
PBLにおける教育効果の測定	
プロジェクト科目成果報告会・プロジェクト科目成果報告書 プロジェクト科目検討部会委員・文学部教授 新 茂之	38
授業アンケート・各種アンケート PBL推進支援センター委員・経済学部教授 八木 匡	40
PBLにおける評価	
PBL推進支援センター長・プロジェクト科目検討部会長・文学部教授 山田和人	45
PBLの導入にむけて PBL推進支援センター 副センター長・プロジェクト科目検討部会委員・ 理工学部教授 金田重郎	48
プロジェクト科目 年次別事業報告	
2009年度 (テーマ一覧・登録者数データ・事業報告・アンケート)	54
2010年度 (テーマ一覧・登録者数データ・事業報告・アンケート)	66
2011年度 (テーマ一覧・登録者数データ・事業報告・アンケート・成果報告会相互評価)	79
PBL推進支援センター 事業報告	
PBL推進支援センター内規・委員	98
PBL推進協議会・大学間合同成果報告会・市民公開型教職員協同講習会事業報告	100
シンポジウム式次第・アンケート	108
市民公開型教職員協同講習会アンケート	128
外部評価委員会 (委員会記録)	129
調査訪問・シンポジウム等への参加・学外報告	131
資料 (プロジェクト科目公募パンフレット・シラバス例・登録志願票・ プロジェクト科目/PBL推進支援センターホームページ・刊行物・新聞記事一覧)	137

プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育

～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～

同志社大学 PBL推進支援センター長・プロジェクト科目検討部会長・文学部教授 山田和人

はじめに

同志社大学では、プロジェクト科目を2006年から開講している。本科目の最大の特徴は、テーマの公募制と往還型地域連携モデルの構築にある。教育プログラムとしては、全学共通教養教育科目に設置されている数少ないPBLの試みと言える。PBLは、理工系、医療・看護系、情報系、社会学系の専門科目のなかに導入されることが多かった。教育方法としては、PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）をベースにした学生主体の社会連携型のチームPBLである。2006年度の現代GPにも採択され、昨年度末までPBLをめぐるシンポジウムや報告書、調査訪問、PBL研究会の活動等を行ってきた（『公募制のプロジェクト科目による地域活性化取組報告書—往還型地域連携活動のモデルづくりを目指して—』2009年3月／『PBL研究会 報告書』2009年3月）。その過程において、豊かな沃野としてのPBLの教育力を実感してきた。



その試みは、2009年度「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～」として引き継がれ、続けてGPに採択された。前回は地域連携教育であったのに対して、今回は、教養教育PBL（プロジェクト学習Project-Based Learning、以下PBLと略す）が目指すプロジェクト・リテラシーの育成を掲げ、PBL推進支援センターが2009年11月に発足し、PBLの普及と発展のために活動を開始した。本センターでは、学内のPBLとの連携を図るとともに、PBLの全国的な教育・研究ネットワークを構築しようとしている。そこで、PBL推進支援センターの下にPBL推進協議会を設置し、PBLの教育方法の研究・教育効果の測定・評価指標の策定等を目指している。本協議会は、前回のGPの取組において設置されたPBL研究会をさらに発展させ、PBLの質的な向上を目的とする研究活動の母体として、規模の拡大を図っている。

プロジェクト・リテラシー

PBLは理工系・医療看護系・情報系の科目として設置されることが多かった。近年、その教育効果から文系のPBLも増加する傾向がある。設置形態も、大きく分けて専門科目か教養科目か、必修科目か選択科目か、あるいは正課授業か課外活動か、こうした形態によって、PBLの目的や進め方に微妙な違いが出てくる。本学で開講しているプロジェクト科目は、教養教育科目であり、そのうちのキャリア形成科目群に位置づけられている。もちろん、選択科目である。教養教育科目としてPBLを導入するならば、どのような目的と役割をもつことになるのか。必修科目として設置した場合とは違う問題があるはずである（図1）。

そこで、教養教育のためのPBLに必要な能力をプロジェクト・リテラシーと規定した。

プロジェクト・リテラシーとは、プロジェクト



図1

の特性についての理解と目的に応じた効果的・効率的な推進方法、現場で即時的に対応できる迅速な判断・評価・伝達能力、プロジェクトを推進するための知識や技術に対する理解、プロジェクト推進に関する広範囲な知識や技能を総合的・創造的に運用する能力ととらえる。そうすることによって、課題探究力の育成に不可欠な教育方法や評価のベンチマークを提示しようと試みた。ややもすれば、漠然ととらえられがちなプロジェクト学習の評価指標の明確化とリテラシー教育としての方法的な整備・充実をはかることをめざしている。

別の言い方をすれば、プロジェクトの推進を通して得られる知識・情報を共有し、助言・批判を真摯に受け止め、プロジェクトの推進に必要なものを効果的・効率的に探し出して、課題設定を迅速に行なうリテラシーともいえる。課題に即して蓄積された知識・情報などを活用して、課題解決のための調査・企画・立案・計画・実行・省察のプロセスを通して、プロジェクトを推進するための基礎的な知識や技能を修得することでもある。

そして、それらを創造的、総合的に運用していくための能力とモラル（良心）を涵養していくことの総体をプロジェクト・リテラシーととらえている。

教養教育とプロジェクト・リテラシー

今回の取組では、PBLを取り入れた教養教育のあり方を教育方法論として捉え、すでに開講しているプロジェクト科目の実践を通して、専門教育の前提となる教養としてプロジェクト・リテラシーを位置づけることができると考えた。具体的には、プロジェクトをプロジェクトの遂行過程とチームのコミュニティ形成過程の重層構造としてとらえ、それぞれにプロジェクト・リテラシーが組み合わされ、応用されていくところに、個人のあるいはチームの個性や特徴が出てくることを確認できた（図2）。プロジェクトの遂行過程においては、自己管理能力、企画立案力、スケジュール構築力、情報共有・創造力、実行力、コンプライアンス、プレゼンテーション力等が注視される。さらにプロジェクトを遂行するチームのコミュニティの形成過程においては、リーダーシップ・フォロアシップ・サポーターシップ、自己認識力、自己表現力、他者理解（思いやりと励まし）、ストレスコントロール・忍耐力等が自ずと身についていくようである。両者に共通しているのは、課題探究力やコミュニケーション力である。こうしたプロジェクトに内在する両側面によって、リテラシーを技能・技術的な面にとどまらず、全人教育的なものとしてとらえ返していくことができるのではないかという考えに至った。現場で感じ、考えることを主眼とする社会連携型のプロジェクト活動を通して、学生が身につける現代的な意味における教養としてプロジェクト・リテラシーを位置づけることによって、教養教育から専門教育へのフィードバックが可能になるのではないか。

具体的には、本学において、プロジェクトを推進していくためのコミュニティ形成過程とプロジェクトの遂行過程を支援していくために開発されたCNS (Community Networking Service) を、



図2

プロジェクト学習の評価システムとして、さらなる機能追加を行うとともに、運用面での工夫を加えた。プロジェクト学習では、学習者の自主的な学びをベースに進められるために、活動の実態が担当者にも見えにくい部分がある。そこで、学習者の学習履歴をポートフォリオとして記録し、現在進行形で進むプロジェクトの実態を把握できることとともに、学習者自身がプロジェクトの現状を把握し、自らの学習を振り返り、そこから自分自身の学びを再定義していくプロセスをCNSのジャーナル機能を活用して把握できることを確認できた。同時に、学習者同士がお互いのジャーナルを参照し合うことによって、メンバーのチームへの貢献度や仕事量の負担の偏り等を視覚化し、お互いの活動に対するコメントが相互の活動へのフィードバックにもなることも確認できた。学習者がお互いを励まし、奮起させる効果をも生み出すことができる点も注目すべき点であろう。いわば相互参照型のポートフォリオ・プロセス評価のシステムと言える。

また、アクセスログの解析等を通して、学習者の授業外学習時間のおおよそを測定できるとともに、プロジェクト学習における学習者自身の日常的な自己評価・他者評価の精度を引き上げていくことによって、プロジェクト学習の活動を客観的に把握することができるようになる可能性を確認することもできた。ジャーナル機能だけではなく、CNSにアップロードされたすべての共有されたデータがポートフォリオ・プロセス評価の素材であり、その意味では、ネットワーク型ポートフォリオとしてCNSを活用していくことによって、プロジェクト・リテラシーの向上因子を測定し、正課科目としての質保証を確保できるようになることが位置づけられた。

プロジェクト・リテラシーの向上因子を探るために、前掲図1のような基礎的な能力をプロジェクトの遂行過程において適正に活用して、設定したテーマ及び課題に取り組み、自ら考え、行動できる自己を発見し、実現していくことが教養教育科目のPBLの教育目標である。図に示した能力を開発していくという視点を持って、教育方法や教育効果についても議論を深めていくことができれば、PBLの質的な向上へとつなげていけるのではないかという仮説を得ることができた。

学習目標の再構築

ここでいうプロジェクト・リテラシーの基礎的な能力はあくまで評価指標であって、それを評価尺度としてとらえているわけではない。なぜならば、PBLは実施形態や実施状況、大きく見た教育環境や条件によって、教育目標や学習到達度が異なってくるからである。また、プロジェクト・リテラシーはPBLが学生の一人ひとりの能力の開発と人材育成を課題としており、そこでは、おのおのに適した役割があり、参加の仕方があるので、立場や状況によって、その成長は全方位的なレーダーチャートを満たすことは想定していない。

そこで、あえて21要素から3要素を選択したプロジェクトごとの平均値をレーダーチャート形式で表示してみたのが次の図表である(図3)。授業終了後、自分が身につけたい、あるいは身につくと期待した能力と、実施後身についた、あるいは身についたと実感できる能力を調査してみた。学習者の振り返りを目的としたアンケートであるために、授業の最後に実施前と実施後の推移、変化を尋ねたものである。全体の平均値は一般的な傾向を表しているが、個々のプロジェクトによって、特徴がかなり顕著に表れた結果になっている。最初に期待したのと受講後の到達とが必ずしも一致しているとは言えないケースの方が多い。しかし、その一致が不幸な一致とも限らない。自分が想定した学習の目標が、実際に取り組んでみると、それが思い込みであったり、表面的な理解であったりしたことを自ら学び、自ら修正を加えた結果の反映と考えれば、その不一致は学習者の成長を証明していることにもなる。ただ、最初の授業の教育目標と学習者の履修目的があまりにかけ離れている場合は、逆に問題と言えるだろう。しかし、本学で実施しているプロジェクト科目の場合、授業内容についての詳細な説明と授業計画、現地調査の回数、評価ポイントについてはシラバスやプロジェクト科目のwebサイトで周知しており、最低限に抑えられていると言える。

ただし、実際に始まってプロジェクトがスタートすると、必ずしも授業計画通りには進まないのが、実践型・参加型のPBLのひとつの傾向であり、それはプロジェクトに内在する教育力(流動性・増殖性・越境性)が必然的にもたらす結果とも言える。そのために、当初のプロジェクトの目標を全員の合意の元に修正を加

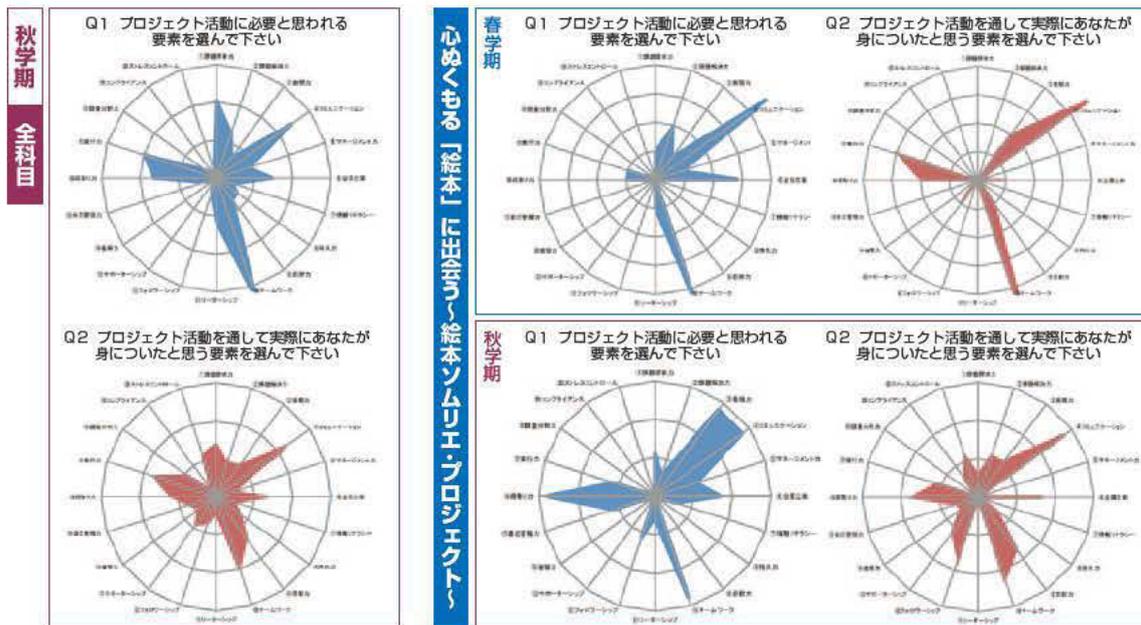


図3

えながら、チーム学習として進めていくことになる。学習者はそのプロセスで、自分たちが授業を主体的に動かしていかなければならないことを学び、授業担当者とも率直な議論を行い、現場との調整もできるようになっていく。いわば学習者自身が学習目標をプロジェクトの実践を通して再構築していくプロセスを評価すべきであることが明らかになってきた。

前述したスタートとゴールでの教育目標や到達目標の不一致は、そうした背景から来るものであり、決して、そのために教育効果が低くなっているとか、教育方法に問題があるというものではない。ただし、プロジェクトの方向性の修正は、参加者全員の合意形成の元に進められなければならない。それがじゅうぶんに行われていない場合には、参加者の個々の履修の意図と齟齬をきたすことになり、プロジェクトの運営がうまくいかなくなる場合も生じてくるので、授業担当者がプロジェクトの方向性をしっかりと見極めるとともに、学習者に適正な合意形成のためのプロセスを説明することが必要である。

プロジェクト・リテラシーの伸張と授業学習外時間

前述した図3にもどると、この結果から伺えるのはプロジェクトを推進していくために主体的に選択した役割をどれほど実行できたか、それによって、今までとは違うどのような能力を自ら発見し、開発できたのかがもっとも重要であり、学習者はそのことに自覚的になっていくことができるはずである。先ほどのアンケートの結果は、かなり大きなばらつきを表している。それはプロジェクトごとに求められる役割が異なっていること、最終アウトプットがそれぞれに異なっているという個別事情が現れているという面もある。

そこに参加する学習者の自己評価とあわせて見てみると、興味深い。基本的に一人ひとりが習得しようとする能力は自分自身に必要と考えられるものであり、プロジェクトを通して必要とする能力が当初のものと変わってくる。それゆえ、学習者自身が必要とする能力とそれに関連する能力とを関係づけていかに自分のものにしたかが問題なのだということがよくわかる。もちろん、21項目の中から3項目を選択するので、全般的な成長ラインが出てくるはずはないのだが、学習者が必要とした能力の変化や推移をとらえることができる。そして、自ら必要とする能力を学習者自身が習得しようとしている学びの態度や姿勢を確認することができる。そこにプロジェクト・リテラシーの伸張を見いだすことができるのではないかと考えた。それは期待に反するという場合もあるだろうが、それは嬉しい誤算になっていると考えて差し支えない結果かと言える。

ここで注意しなければならないのは、プロジェクト・リテラシーと授業外学習時間との相関関係である。

PBLでは、授業内学習よりも授業外学習で学習者が著しく成長していくことが多い。プロジェクトを推進する役割を担った受講生は、その両者がより強く相関する。役割を自ら引き受けた主体的な学習になっている場合に強い相関関係が現れるようだ。逆に、そうではなく、受け身で役割を分担業務として引き受けた場合には、授業外学習時間が総じて短くなる。そうした学生の場合、チーム全体の方向性や動向についての俯瞰的なもの見方もじゅうぶんできず、自分を成長させる機会を失ってしまう場合もある。授業外学習の測定は、デジタル・ポートフォリオを通して行われることが多い。ポートフォリオ・プロセスは、いわばプロジェクトの活動を学習者自身がモニタリングして現状を把握しようとする行動であるとともに、それが評価の重要な素材にもなってくる。おおよそ1人あたり100時間程度が必要な時間数であり、300時間程度になると熱心な取組と言える。ただし、チームの中での役割によって、授業外学習の時間も変わってくる。リーダーの場合には、さらに多くの時間を要することになる場合もある。他の学習活動の障害にならないように配慮することを忘れてはならない。そうした傾向からいえば、アクティブな学習の場合、学ぼうとする意欲と集団的学習に必要な態度や姿勢を持っていることが大切であり、プロジェクトとはどのようなものかというおおよその理解が出発点では必要だということになる。プロジェクト・リテラシーは、プロジェクトの始発においても重要な役割を果たすことになる。

教養教育としてのPBL

他者と協働して学んでいくための方法を学び取っていくことが、教養教育としてPBLを実施する場合に、もっとも大きな教育効果を期待できるところだと言える。試行錯誤を積み重ねることで、自ら成功因子と失敗因子を把握し、課題解決のためのアプローチのしかたを主体的に学習していくための、いわゆるメタ認知を得ることができるようになる。それはいわば学問や研究の初発の動機付けや学ぶ態度・姿勢の獲得にきわめて有効に働いていく。PBLを通して、自分たちの活動を自己満足に終わらせないということを繰り返し、伝えることで、学習者は自ずと、関連書籍や文献を読むようになり、自ら主体的に学ぶようになる。自主的に調べることができる学習者は多くの場合、プロジェクトを推進する中心メンバーであり、そこでの知識をしっかりと共有できる体制を構築できたチームが優れた成果を上げることができる。中心メンバーだけで専有された情報は、プロジェクトに還元されず、プロジェクトを推進するための共有財産にならない。学習者は、個人学習とは異なるチーム学習によって、学習内容を客観的にとらえ、伝えることの重要性に気づくようになる。そこでは、学習者同士が調査結果を共有するための相互批判的な議論を誘発する協調学習が実践されており、学問や研究に対するダイナミックな応用力を身につけるきっかけをつかむことができるという点においても、教養教育としてのPBLの果たす役割は大きい。そうした実践的な学びのあり方に気づかせるために、プロジェクト・リテラシーとして提示されている能力は、自分自身の学び方について振り返るひとつの指標になる。言い換えれば、それは学習者自身の自己評価、学習者同士の相互評価の指標の役割を果たすことにもなる。こうした学びをさらに定着させていくために、PBL推進支援センターの活動の充実を図っていきたい。

最後に本取組の具体的な成果として、PBLの運営のための手引きとしてガイドブックを作成した。ガイドブックは、教育方法・教育効果・評価方法・学習支援・運営体制に及ぶ実践事例に即した記述となっており、PBLの普及と発展を図るPBL推進支援センターの方向性を示すことができたのではないかと位置づけている。本取組期間中に試みたシンポジウムや学生フォーラム、PBL推進協議会での研究活動、講演会等が、そうしたセンターの取組として多くの大学や教育機関に受け入れられつつあり、今後もPBL推進支援センターの活動をなおいっそう充実したものとするとともに、プロジェクト科目の質的な向上につとめていきたい。それぞれの活動の詳細については後掲の資料を参照されたい。

今後の課題

PBLにとって、教育方法・教育効果・評価方法についての検討は、その質的な向上とともに今後も継続さ

れなければならない。本取組を通して、大学教育の変革期にあって、教養教育にとってプロジェクト・リテラシー教育が必要な段階を迎えているという基本的な認識を持つに至った。アクティブな学びにとって、学習者の評価力を無視するわけにはいかず、その学習プロセスをいかに可視化していくかは、今後の大きな問題である。ポートフォリオやコンセプトマップ等を用いて自分たちの活動を常に客観視できるシステムや仕組みを、いかに学習環境の充実の問題として取り組んでいくかということでもある。

また、インプット・プロセス・アウトプットの三段階で学生がどのように成長していくのか、教育方法論として議論を深めていかなければならない。とりわけ、専門科目として実施するのではなく、教養教育として実施していくためには、インプットをいかに進めていくのかは大きな課題である。座学的な学びでは、知識や技能が定着する度合いは低い。PBLでは、自分自身の関心と興味をもってプロジェクトを推進していくこと、対話や議論を繰り返していくことで、知識や技能の定着度が明らかに深まる。つまり、知識や技能の必要性が大きく学習意欲に関わっており、それを学習者がチームのメンバーとともに共有して、プロジェクトを推進していくことができた時にはあきらかにインプット学習が効果をあげる。その効果を最大にするために、何をいかにインプットしていくのか、検討を重ねていく必要がある。そのために、ここで習得した知識や技能をいかに駆使して、プロジェクトを推進していくことができたのか、プロジェクトの始発時点での評価・調査をあわせて行っていく必要があるだろう。

プロセスに関しては前述した、プロジェクト活動の可視化と結びついており、学習者自身がプロジェクトを運営する上でポートフォリオの必要性を感じなければ、ポートフォリオによる活動の可視化は期待できない。ポートフォリオの運用の仕方についての議論をさらに深める必要がある。それは組織的な取組として実践していくためには避けて通ることができない過程である。元来、PBLとポートフォリオは原理的に相性のいい教育評価ツールであることは明らかであり、いかに運用していくかが今後の課題である。同時に、そのプロセスで、どのような能力を獲得していくことができるのか、それを精査する評価の視点を授業担当者とともに学習者も持つべきであり、そうした評価意識をいかに共有できるのか、検討していきたい。

アウトプットに関しては、発表会・報告会等のアウトプットの機会をどのように設定し、学習者その成果を限られた時間の中で適切に発表できるか、また、意欲的にその準備に取りかかることができるようにするためには、発表会やプレゼンテーションの持ち方が大きな意味を持つことも確認できた。アウトプットをいかに評価するのか、プロジェクト学習を自己満足に終わらせないための方策のひとつであるとともに、学習者が自己の活動を自己評価できる場としてとらえるべきであり、学習者の評価力がどれくらい伸びたのかを検証できる機会としてとらえる必要があるだろう。そのために、評価指標をより明確に示す必要がある。これについては、PBL推進協議会の研究課題として引き継いでいくことになる。

こうした過程のなかで、プロジェクト・リテラシーを習得するために、適切な能力の伸張をいかに図っていくのかを再度問い直す段階にあるという認識に至った。今後は、さらにその方略について検討を加えていきたい。

最後に、PBLの授業担当者のポジショニングの問題についても検討を加える必要がある。PBLにおいては担当者は指導者であるとともにアドバイザーの役割を果たすことになる。ただし、そこで取り込まれるプロジェクトは多様であり、それぞれの遂行にふさわしい運営を行っていくことになる。そのために共通したマニュアルを作成することが難しい。しかしながら、正課授業で実施する限り、質保証は必要であり、授業を開始する前と終了後に、ワークショップ形式で研修・学習会を開催して、PBLの目指している教育目標や到達目標について話し合い、そこでの議論によって明らかになった課題を共有して、授業展開に反映していくことができる機会をさらに充実させる必要がある。

同志社大学PBL推進支援センターが、PBL推進拠点校としての役割を果たしていくためには、こうしたPBLの抱える問題について真摯に問いかけながら、教育方法としての質的な向上を目指して、PBLの教育連携ネットワークを充実させていく必要があるだろう。

取組について

(1) 取組の目的

同志社大学では、平成18年度以来、正課の全学共通教養教育科目「キャリア形成支援科目群」の独立科目区分として、プロジェクト型教育（Project-Based Learning、以下PBLと略す）を主眼とする「プロジェクト科目（図1）」を全学共通教養教育科目として設置し、全学部全学年の学生を対象に毎年25科目程度を今出川・京田辺両校地で開講してきた。最大の特徴は、科目担当者の公募制を導入することによって、平成18年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」の支援のもと、大学と社会の双方向型学習の教育方法論的有効性を追求するために、教養教育とキャリア教育の融合も視野に入れながら、幅広い学びの保証を全学的に推進してきた点にある。

平成20年中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」で求める「一方的に知識・技能を教え込むのではなく、豊かな人間性と課題探求能力の育成に配慮した教育課程を編成・実施する」ことは、21世紀のわが国の大学が直面する最大の課題の一つである。本取組の目的は、本学が数年にわたり取り組んできたPBL型教育の実績、成果から考察した「プロジェクトの特性の理解と目的に応じた効果的・効率的な推進方法、プロジェクト推進に必要な広範囲な知識や技能を総合的・創造的に運用する能力・モラル（良心）」を「プロジェクト・リテラシー（図2）」と捉え、本学よりプロジェクト・リテラシー育成方策を新たな教養教育方法論として発信することによって、課題探求能力を備え、専門分野を横断して実社会の様々な領域で活躍できる21世紀型市民を育成することにある。また、PBL型教育を実施する教育機関との研究・調査活動を通して、プロジェクト型教育における多面的な評価指標の明確化とプロジェクト・リテラシー教育としての方法論的な整備・充実を図ることを目指すものである。



2011年度同志社大学全学共通教養教育科目イメージ【図1】



プロジェクト・リテラシー【図2】

(2) 取組の概要

PBLの理論と実践を推進する拠点として、2009年11月「PBL推進支援センター」を本学教育支援機構内に全学共通教養教育センター関連組織として設置し、学内取組体制の充実整備を行った。

2007年よりPBL型教育に関する取組事例の報告と情報を交換し、効果的な授業運営や成績評価のあり方についてPBL型教育の理論と方法の考究を行ってきた「PBL研究会」を前身とし、2009年に「PBL推進協議会」を上記センターの外郭学術関連団体として発足させ、引き続きPBL型教育を実施する全国の教育機関とのネットワークを構築しながら、PBLの事例報告と教育方法の研究・開発を継続的に推進してきた。さらに、地域社会に開かれた学生・教職員協同研究組織「市民公開型教職員協同講習会」を開催することを通して、

教育機関だけでなく、企業、NPO団体との連携を推進しながら、社会と密着した多層的なFD/SDネットワークの構築を目指して活動した。

PBL型教育において、成績評価基準の確立は課題のひとつであるが、本学ではSNS（Social Networking Service）型WEB学修支援システムを基盤とし、PBL型教育推進に特化したCNS（Community Networking Service）を開発した。さらに定期的にCNSの機能強化を図りながら、成績評価基準の測定資料として、「プロジェクト科目」におけるポートフォリオ機能を活用し、個人とチームの学びのプロセスを客観的に分析することを可能にしている。CNSの活用状況により、時間外学習の測定や対面教育の可能性の拡大、卒業生調査が可能となり、PBLがキャリア形成に与える効果について測定されることが期待できる。また、過年度受講生をSA（スチューデント・アシスタント）として任用することにより、双方向型学習理論としてのPBLの教育効果を強化し、SA経験者を中心にした卒業生アドバイザー制度を設けて、相互評価及び外部評価の導入と連動させながら、本取組の質保証システムを充実させた。成績評価基準が明確化されることは、今後本学が取組む教養教育におけるPBL型教育の質的保証方策とカリキュラム設計に、客観的指標の策定の実績となることを期待できる。「PBL推進支援センター」および「プロジェクト科目」の取り組みで得られた知見は、ホームページ、シンポジウム、冊子刊行を通して学内外に積極的に研究成果を発信し、初等教育機関から高等教育機関までを包摂する教育諸機関のPBL型教育のネットワークの構築を目的としている。

（3）取組の具体的内容および実施体制

■「プロジェクト科目」の授業運営について

- 1) プロジェクト科目テーマを地域や社会から公募し、プロジェクト科目検討部会委員、教務主任連絡会議委員、全学共通教養教育センター所長、教育支援機構長・副機構長の審議を経て、教務主任連絡会議においてプロジェクトを採択し開講を決定している。
- 2) 毎年、25クラス前後のプロジェクト科目を開講（平成23年度は22科目開講）し、プロジェクト・リテラシーの向上を目指して、プロジェクト科目検討部会が中心となって授業の円滑な支援を行った。
- 3) 過年度受講生をSAとして採用し、プロジェクト受講生の指導や担当教員と学生の調整役等を担当する。「教えることが学びの最良の方法」という考えに立って、習得したプロジェクト・リテラシーを実際に活用することで、学習成果をさらに高める機会を受講生に与えるための教育的方策としている。
- 4) プロジェクト活動に関する情報や注意事項を記載し、CNSと連動してポートフォリオ機能を補完するプロジェクト手帳を発行し、受講生、担当教員に配付した。
- 5) 年度始めには、プロジェクト・リテラシーを効率的に習得するCNS説明会、会計説明会を実施した。各学期の授業期間中には、受講生及び担当教員を対象としたプロジェクト・リテラシー講習会（ワークショップ、講演会等）を開催した。
- 6) 各学期末に、プロジェクト・リテラシーの向上を検証するために、成果報告会を開催した。教務主任連絡会議委員、プロジェクト科目検討部会委員に加えて、学外委員を招聘し、同僚評価と外部評価による教育の質保証を担保することが目的である。また、各学期末に、担当教員が成果報告書を作成し、提出した。
- 7) 各学期末に受講生、SA/TA、及び担当教員に対してアンケートを実施した。また、受講生懇談会、SA/TA懇談会、科目担当者懇談会を開催し、授業運営や改善点等についての意見の交換、聴取をしてきた。
- 8) PBL型教育を実践する複数大学の代表学生による合同成果報告会を開催し、他大学の教職員、学生の交流を深め、情報交換を行った。
- 9) 地域社会にプロジェクト科目への積極的な関与を促す交流活動に取り組む。

■「PBL推進支援センター」について

- 1) 「PBL推進支援センター」を設置し、「PBL推進支援センター委員会」を定期的に開催した。PBL型教

育を実践する教育機関の実地調査等を通して、PBL型教育に関する情報を収集し、プロジェクト科目を支援する学習・教育環境のあり方を研究し、その整備に努めた。ホームページやブログ等を通じて学内外に本取組に関する情報の発信を行った。本取組に従事する事務員を雇用し、プロジェクト科目検討部会の運営方針に沿ったプロジェクト科目の学習支援にも携わった。

- 2) 「PBL推進支援センター通信」を年間2回刊行し、取組紹介パンフレットも作成して学内外に配布した。
- 3) プロジェクト・リテラシーの養成とFD/SDの推進を目的とする市民公開型教職員協同講習会やシンポジウム、各種講演会等を定期的に開催した。
- 4) 「PBL推進協議会」の研究活動を支援する。PBL推進協議会では、PBL型教育における授業運営方法や多面的な評価等の研究を推進し、PBL型教育に関連する学外ゲストによる事例報告やワークショップ等を中心とした研究会を年間5回程度開催した。年1回、研究成果をまとめたブックレットを刊行し、学内外に配布した。

■CNS (Community Networking Service) について

- 1) プロジェクト・リテラシーを養成するために、ポートフォリオ機能等を充実させ、ログ分析機能等、プロジェクト・リテラシーの向上を測定するための分析ツールを開発し、教室外学習時間の増加方を検討した。多様なコミュニティを提供し、内容の充実を図って幅広い学びの保証に努めた。円滑な授業支援のため、ユーザ数に応じてサーバを増強した。
- 2) PBL型教育におけるチーム学習を支援するSNS型WEB学修支援システムの標準モデルを構築し、情報通信技術の活用を推進した。また、初年次教育やゼミ等、他の科目への応用も検討した。教育効果測定ツールや成績評価基準の指標としての活用方法についても研究するとともに、教育方法・内容に関するナレッジデータベースを構築し、PBL型教育の方法・教材等のナレッジデータベースの蓄積・共有を推進した。
- 3) プロジェクト科目を受講し、SAを経験した学生を「卒業生アドバイザー」として登録し、CNSを通じて定期的にプロジェクト科目に関するアドバイスを得た。

■FD/SDの推進について

- 1) 「PBL推進協議会」を設立し、広く教育機関全般に研究会への参加を促した。市民公開型教職員協同講習会やプロジェクト・リテラシー講習会、シンポジウムへの参加も促進した。学内に向けては、専門科目等でPBL型教育を実施している学部・研究科の取組担当者との懇談の機会を設け、方法論や工夫等の意見交換を行った。
- 2) 学内に向けては、プロジェクト科目の科目代表者の募集、成果報告会への参加等、積極的な関与を呼びかける。「PBL推進支援センター通信」の配布やPBL推進協議会で作成した資料等の資料室での閲覧等、PBL型教育に関する情報の提供を行った。

本取組は、教育支援機構の下に設置される「PBL推進支援センター」が中心となり、事業の運営を行った。「PBL推進支援センター」の下に、センター長、副センター長、学生支援センター所長、キャリアセンター所長など教職員で構成される「PBL推進支援センター委員会」を設置し、センターの運営について審議し、決定を行った。さらに全学共通教養教育科目「プロジェクト科目」の授業運営を行うプロジェクト科目検討部会事務局と、「PBL推進支援センター」の事務局は教育支援機構教務部教務課内に兼任して設置することで、研究・理論の考察と教育現場の実践が相互に反映されながら効果的な授業運営を行うと同時に学内外との連携についても円滑に行われた。「PBL推進支援センター委員会」は、「PBL推進協議会」と連携し、「プロジェクト科目検討部会」の事業に対する評価を行い、プロジェクト科目運営の自己改善を支援した。

(4) 取組の評価体制

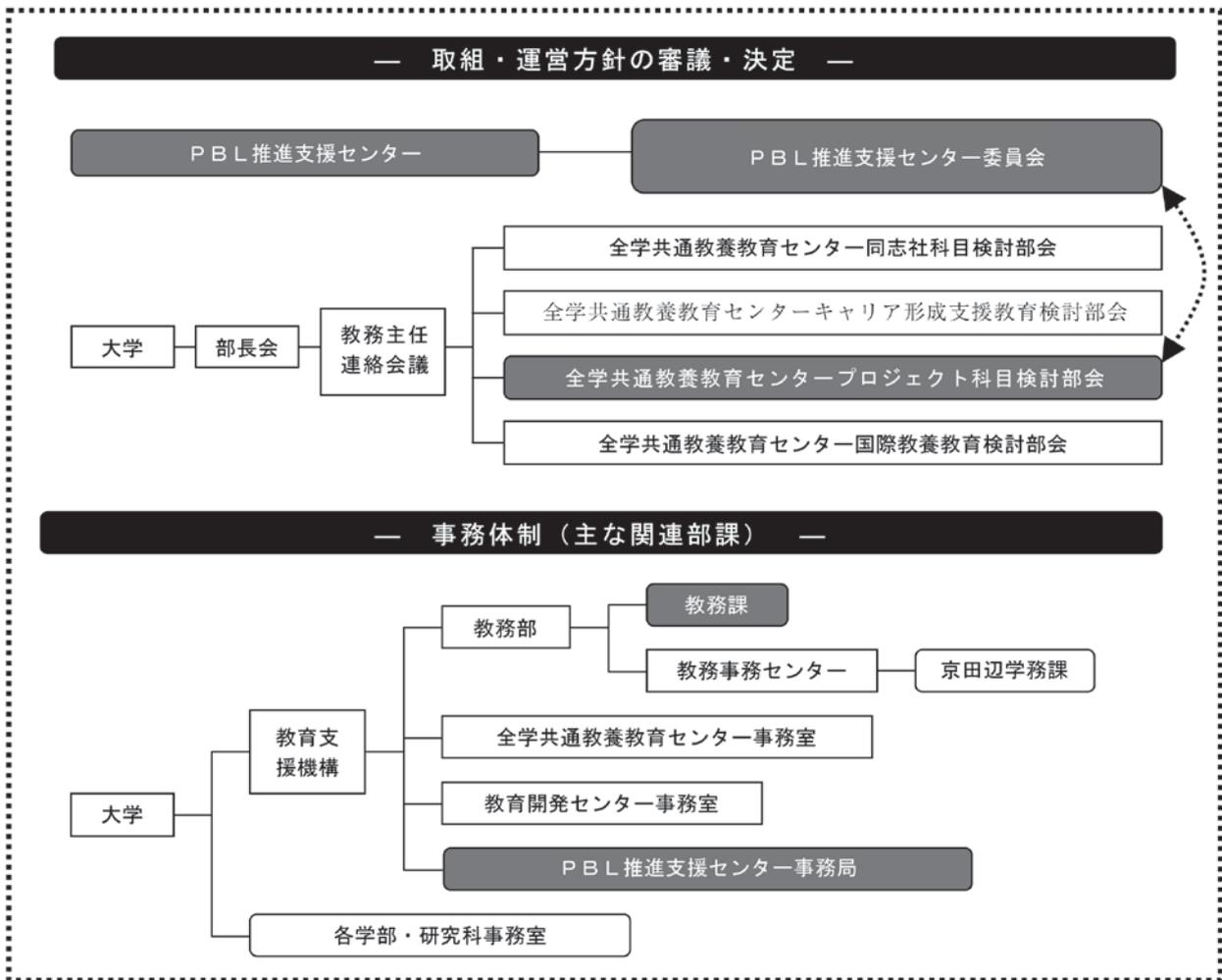
プロジェクト科目を含む本取組の全事業についての自己点検・評価は、上述の「PBL推進支援センター委

員会」で行う。委員会では、自己評価だけでなく、学外の委員による外部評価委員会の意見を尊重し、客観的な評価システムを構築する。

プロジェクト科目の自己点検・評価は、プロジェクト科目検討部会を通じて、教務主任連絡会議によって行う。各学期末に実施されるプロジェクト科目成果報告会では、教育支援機構長、副機構長、教務主任連絡会議委員、全学共通教養教育センター所長、プロジェクト科目検討部会委員による審査・講評を行う。科目担当者が活動の評価を目的として作成する「科目担当者報告書」は学内関係委員会委員に公表される。受講生による「学生成果報告書」は、広く学内外に配布しホームページで公開する。さらに、学期末には、科目担当者懇談会、SA/TA懇談会、受講生懇談会を開催し、加えて独自のアンケートを担当教員と学生に実施することで、双方より運営方法等の改善策を把握し、以降の科目運営に反映するように努める。なお、「PBL推進支援センター」「PBL推進協議会」の活動を通じて得られた知見は、プロジェクト科目の運営にもフィードバックする。



全学共通教養教育科目「プロジェクト科目」および「PBL推進支援センター」のイメージ図



組織図

全体スケジュール

※平成21年度は10月以降のスケジュールを記載

取組内容	平成21年度	平成22年度	平成23年度
プロジェクト科目 授業運営サポート			→
プロジェクト科目 公募（公募説明会、公募締切）	9月説明会, 10月募集締切	9月説明会, 10月募集締切	9月説明会, 10月募集締切
プロジェクト科目 採択（採択決定、担当者説明会開催）	12月決定, 説明会開催	12月決定, 説明会開催	12月決定, 説明会開催
プロジェクト科目 登録説明会の開催	3月	3月	3月
プロジェクト科目 プロジェクト・リテラシー講習会開催	11月	6月,11月	6月,11月
プロジェクト科目 成果報告会の開催	1月	7月,1月	7月,1月
プロジェクト科目 成果報告書の発行	3月	3月	3月
プロジェクト科目 アンケートの実施	1月	7月,1月	7月,1月
プロジェクト科目 受講生懇談会の開催	1月	7月,1月	7月,1月
プロジェクト科目 科目担当者懇談会の開催	3月	9月,3月	9月,3月
他大学合同成果報告会の開催	—	6月	6月
PBLセンターの設置、活動	10月 →		→
PBLセンター 設備・資料の整備	10月 →		→
PBLセンター 契約職員の雇用	10月 →		→
PBLセンター 市民公開型教職員協同講習会の開催	2回	4回	3回
PBLセンター 委員会の開催	2回	2回	2回
PBLセンター通信の発行	1回	2回	2回
PBLセンター シンポジウムの開催	1回	2回	2回
PBL協議会の設置、活動	10月 →		→
PBL協議会の開催	3回	5回	4回
PBL協議会 ブックレット・ガイドブックの発行	3月	3月	3月
CNSの開発			→
取組報告書の発行	—	—	3月

関連会議 一覧

日時	場所	会議等（審議内容）	備考
■2009年度			
2009年4月9日（木）	有終館第一会議室	2009年度第1回教務主任連絡会議 報告：2009年度 全学共通教養教育科目（プロジェクト科目）の先行登録結果について 審議：2009年度全学共通教養教育科目（プロジェクト科目）科目担当者及び科目代表者変更の件 →承認	
5月28日（木）	有終館第一会議室	2009年度第4回教務主任連絡会議 報告：同志社大学版PBL冊子作成について	
6月11日（木）	有終館第一会議室	2009年度第5回教務主任連絡会議 報告：2009年度プロジェクト科目成果報告会について	
6月23日（火）	有終館担当理事室	2009年度第1回プロジェクト科目検討部会 報告：2009年度科目登録結果について 報告：2008年度授業運営費執行率について 報告：2009年度春学期CNS説明会、会計説明会、プロジェクト科目講演会、大学間合同成果報告会の開催結果について 報告：春学期担当者・受講生アンケートの実施、春学期成果報告会の開催について 報告：PBL冊子の作成について 議事：2009年度プロジェクト科目検討部会の事業について →了承 議事：2010年度プロジェクト科目募集要領（案）について →了承 議事：プロジェクト科目 科目採択の選定方法について →了承	
7月9日（木）	有終館第一会議室	2009年度第7回教務主任連絡会議 報告：全学共通教養教育センタープロジェクト科目検討部会2009年度事業計画について 審議：2010年度プロジェクト科目募集要領及び選定方法の件 →承認	
10月15日（木）	有終館第一会議室	2009年度第9回教務主任連絡会議 報告：平成21年度「大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム」採択について 審議：PBL推進支援センター内規制定の件 →承認	
10月22日（木）	有終館第一会議室	2009年度第10回教務主任連絡会議 報告：2010年度 プロジェクト科目テーマ募集結果及び審査要領について	
10月22日（木）	有終館第一会議室	2009年度第10回大学評議会 議事：同志社大学PBL推進支援センター内規制定について →承認、決定	※PBL推進支援センター設置
11月11日（水）	有終館担当理事室	2009年度第2回プロジェクト科目検討部会 報告：大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラムの採択について 報告：秋学期履修登録状況について 報告：同志社大学版PBL冊子作成について 報告：秋学期講演会について 議事：2010年度プロジェクト科目テーマ選定について →了承 議事：2010年度事業案について →了承 議事：秋学期成果報告会について →了承 議事：シンポジウムの開催について →了承 議事：大学間学生交流会について →了承	

日時	場所	会議等（審議内容）	備考
11月19日（木）	有終館第一会議室	2009年度第12回教務主任連絡会議 審議：2010年度 プロジェクト科目 科目採択の件 →承認 審議：嘱託人件 →承認	
12月14日（月）	有終館担当理事室	2009年度第1回PBL推進支援センター委員会 報告：委員会設置の趣旨について 報告：2009年度事業について 議事：PBL推進支援センター委員会内規の規定について →承認 議事：2010年度の事業について →承認	
12月17日（木）	有終館第一会議室	2009年度第14回教務主任連絡会議 報告：「同志社大学版PBL」冊子配布について 審議：2010年度プロジェクト科目 科目代表者変更の件 →承認	
2010年3月18日（木）	有終館担当理事室	2009年度第2回PBL推進支援センター委員会 報告：2009年度の事業報告について 報告：外部評価委員会の結果について 議事：2010年度の事業について →承認	
■2010年度			
2010年4月8日（木）	有終館第一会議室	2010年度第1回教務主任連絡会議 報告：2010年度 全学共通教養教育科目（プロジェクト科目）の先行登録結果について	
5月20日（水）	有終館第一会議室	2010年度第1回プロジェクト科目検討部会 報告：2010年度科目登録結果について 報告：2009年度授業運営費執行率について 報告：2010年度春学期CNS・会計・学生成果報告書担当者説明会の開催結果について 報告：大学間合同成果報告会、シンポジウム、PBL推進協議会の開催について 報告：春学期科目担当者、SA・TA、受講生アンケートの実施について 議事：2010年度プロジェクト科目検討部会の事業について →了承 議事：2010年度プロジェクト科目成果報告会について →了承 議事：2011プロジェクト科目公募について →了承	
6月10日（木）	有終館第一会議室	2010年度第5回教務主任連絡会議 報告：2010年度 プロジェクト科目成果報告会について	
6月17日（水）	有終館担当理事室	2010年度第2回プロジェクト科目検討部会 報告：2010年度合同成果報告会、プロジェクト・リテラシー講習会について 報告：2010年度春学期成果報告会について 報告：シンポジウム、PBL推進協議会、市民公開型教職員協同講習会の開催について 議事：2011年度プロジェクト科目募集要領（案）について →了承 議事：プロジェクト科目 科目採択の選定方法について →了承 議事：秋学期成果報告会について →了承	
7月8日（木）	有終館第一会議室	2010年度第7回教務主任連絡会議 審議：2011年度 プロジェクト科目募集要領及び選定方法の件 →承認	
10月28日（木）	有終館第一会議室	2010年度第10回教務主任連絡会議 報告：2011年度プロジェクト科目テーマ募集結果及び審査要領について	

日時	場所	会議等（審議内容）	備考
11月11日（木）	有終館担当理事室	2010年度第3回プロジェクト科目検討部会 報告：2010年度春学期成果報告会について 報告：秋学期履修登録状況について 報告：秋学期プロジェクト・リテラシー講習会の開催について 報告：学生成果報告書の発行について 報告：PBL推進協議会、シンポジウムの開催について 報告：市民公開型教職員協同講習会の開催について 議事：2011年度プロジェクト科目テーマ選定について →了承 議事：2011年度の事業案について →了承 議事：2010年度秋学期成果報告会について →了承	
11月25日（木）	有終館第一会議室	2010年度第12回教務主任連絡会議 報告：2010年度プロジェクト科目成果報告会について 審議：2011年度プロジェクト科目 科目採択の件 →承認 審議：嘱託人件 →承認	
12月9日（木）	有終館第一会議室	2010年度第13回教務主任連絡会議 審議：2011年度プロジェクト科目 科目代表者変更の件 →承認	
2011年1月17日（月）	有終館担当理事室	2010年度第1回PBL推進支援センター委員会 報告：委員会について 報告：2010年度の事業について 議事：2011年度の事業について →了承	
3月17日（木）	有終館担当理事室	2010年度第2回PBL推進支援センター委員会 報告：2010年度の事業報告について 報告：外部評価委員会の結果について 議事：2011年度の事業について →了承	
■2011年度			
2011年5月26日（木）	有終館第一会議室	2011年度第3回教務主任連絡会議 審議：2011年度 全学共通教養教育科目（プロジェクト科目） 担当者（代表者）変更の件 →承認	
6月1日（水）	有終館担当理事室	2011年度第1回プロジェクト科目検討部会 報告：2011年度科目登録結果について 報告：2010年度授業運営費執行率について 報告：2011年度春学期学生担当者説明会の開催結果について 報告：大学間合同成果報告会、プロジェクト・リテラシー講習会、シンポジウム、懇談会の開催について 報告：春学期科目担当者、SA・TA、受講生アンケートの実施について 議事：2011年度プロジェクト科目検討部会の事業について →了承 議事：2011年度プロジェクト科目成果報告会について →了承 議事：2012プロジェクト科目公募について →了承	
6月8日（水）	有終館担当理事室	2011年度第1回PBL推進支援センター委員会 報告：委員会について 報告：大学間合同成果報告会について 報告：シンポジウムについて 議事：2011年度の事業について →了承 議事：2012年度以降について →了承	
6月9日（木）	有終館第一会議室	2011年度第4回教務主任連絡会議 報告：2011年度 プロジェクト科目成果報告会について	

日時	場所	会議等（審議内容）	備考
6月22日（水）	有終館担当理事室	2011年度第2回プロジェクト科目検討部会 報告：2011年度大学間合同成果報告会、プロジェクト・リテラシー講習会について 報告：2011年度春学期成果報告会について 報告：シンポジウム、PBL推進協議会、市民公開型教職員協同講習会の開催について 議事：2012年度プロジェクト科目採択選定方法について →了承 議事：2011年度秋学期成果報告会について →了承	
7月6日（水）	有終館担当理事室	2011年度第2回PBL推進支援センター委員会 報告：シンポジウムについて 議事：2011年度の事業について →了承 議事：2012年度以降について →了承	
7月14日（木）	有終館第一会議室	2011年度第6回教務主任連絡会議 審議：2012年度 プロジェクト科目募集要領及び選定方法の件 →承認	
10月13日（木）	有終館第一会議室	2011年度第8回教務主任連絡会議 審議：2011年度 全学共通教養教育科目（プロジェクト科目）担当者（代表者）変更の件 →承認	
10月27日（木）	有終館第一会議室	2011年度第9回教務主任連絡会議 報告：2012年度プロジェクト科目テーマ募集結果及び審査要領について	
11月9日（水）	有終館担当理事室	2011年度第3回プロジェクト科目検討部会 報告：2011年度春学期成果報告会について 報告：秋学期履修登録状況について 報告：履修中止による開講中止について 報告：PBL教育フォーラム2011開催について 報告：秋学期プロジェクト・リテラシー講習会の開催について 報告：秋学期学生懇談会、SA・TA懇談会、科目担当者・代表者懇談会の開催について 報告：学生成果報告書の発行について 報告：秋学期授業アンケート、プロジェクト・リテラシーアンケート実施について 報告：PBL推進協議会、シンポジウムの開催について 報告：市民公開型教職員協同講習会の開催について 議事：2012年度プロジェクト科目テーマ選定について →了承 議事：2012年度の事業案について →了承 議事：2011年度秋学期成果報告会について →了承 議事：SA・TAの任用について →了承 議事：PBLガイドブック作成について →了承	
11月10日（木）	有終館第一会議室	2011年度第10回教務主任連絡会議 審議：全学共通教養教育科目（プロジェクト科目）休講の件 →承認	
11月24日（木）	有終館第一会議室	2011年度第11回教務主任連絡会議 報告：2011年度プロジェクト科目秋学期成果報告会について 審議：2012年度プロジェクト科目 科目採択の件 →承認 審議：嘱託人件 →承認	
2012年1月12日（木）	有終館第一会議室	2011年度第13回教務主任連絡会議 審議：2012年度全学共通教養教育科目（プロジェクト科目）担当者（代表者）変更の件 →承認	

日時	場所	会議等（審議内容）	備考
2月23日（木）	有終館第一会議室	2011年度第15回教務主任連絡会議 議事：PBL推進支援センター内規一部改正の件 →承認（大学評議会に上程）	
3月1日（木）	有終館第一会議室	2011年度第18回大学評議会 議事：同志社大学PBL推進支援センター内規一部改正について →承認、決定	

PBLにおける 教育方法論的課題の検証

— PBLにおける学習支援 一年間行事例 —

プログラム支援

教育支援機構 教務部教務課 プロジェクト科目検討部事務局・PBL推進支援センター事務局 弘田 一 恵

PBLの定義

PBL (Project-Based Learning) は、一定期間内に一定の目標を実現するために、学生が自立的・主体的に自ら発見した課題に取り組み、それを探求・追究するためにチームで協働してプロジェクトを遂行する創造的・社会的な学びである。

プログラム支援の必要性

同志社大学プロジェクト科目では科目担当者（学外協力者）と科目代表者（教員）の複数で授業を担当している。PBLでは、授業を担当する科目担当者と、授業に必要なアドバイスを提供する科目代表者、授業に関わる学内環境を整える職員の三者が、学習支援の情報を共有し、その質的向上に努め、学生に提供する事が望ましい。そのためには、授業時間外にも必要に応じてプロジェクトの遂行を効果的に実施するに適した講演会や説明会を開催し、プロジェクト遂行期間を通してカリキュラム上に学習支援の企画を盛り込むことが必須である。

また、そこには、学生の自主性を促す学びの自由度と、適度なタスクを伴う役割によるチーム内での学生の居場所作り、学年・学部・学内外の立場を問わない多様性を認めあうしかけ、学生のモチベーションを高めるための適度な競争意識、プロジェクトの成果の発信と活動の振り返りのための機会の設定など、複数の要素を適切な時期に全体のプロジェクト活動に盛り込む事を忘れてはならない。

PBLでは、学生の学びを最大にするための工夫やプログラムの実施が重要課題であると同時に、それが単なる自己の学びに集結することなく、学生、SA/TA、科目担当者、科目代表者、職員などPBLに関わる全ての人の間で情報を共有し、相互に学び合う機会とすることも心がけるべきである。

年間行事例

■科目担当者・代表者説明会の開催（学外協力者・教員対象）

科目担当者・科目代表者にPBLへの理解を促し、情報を共有するために、開講前に説明会を開催する。PBL型授業の進め方や評価方法、事務の諸手続きや注意事項について解説したPBL型授業科目独自の「授業運営の手引き」を作成することも必要である。

■登録説明会の開催（学生対象）

PBL型授業に対する学生の理解を深め、主体性を持って授業に取り組むために、科目登録と並行して授業内容に関する説明会を開催する。登録を希望するプロジェクトについて、学生に登録志願理由の記載を求める。学生は志願理由を記載した登録志願票を科目担当者に提出、個別面談等を行うことで、学生にPBLで得られる学びの目的を自己認識させる。

■学生担当者説明会の開催（学生対象）

プロジェクトのチーム内で学生にプロジェクトリーダー・会計・CNS (SNS型WEB学修支援システム)・学生成果報告書などの担当役割りを付与し、各役割について全体説明会を実施し、認識を共有する。特に会計担当者を対象に大学会計の仕組みや手続きについて説明することで、授業に関する資金の運用がプロジェクトの成果に関わることを認識させ、プロジェクト遂行に必要な予算管理能力をつけさせる。説明会を開講スタート時に実施することで、複数開講している他プロジェクトの活動を意識し、自己のプロジェクトに対する客観的視点を認識させながらプロジェクトの初動に弾みをつける機会ともなる。

■SA（スチューデント・アシスタント）/TA（ティーチング・アシスタント）制度の活用

各プロジェクトに、SA/TAを配置し、科目担当者、科目代表者、学生とは異なった視点からプロジェクト活動をサポートする体制も必要である。特にSAは科目経験者に限定して任用することで、学生にとってはプロジェクトの進行に適切なアドバイスを与える身近な相談相手となり、SA自身にとっては本人の成長の機会となる事を目的としている。PBL型授業を理解し、サポートするための、SA/TAを対象とした説明会を実施することも効果的であろう。

■SNS型学修支援システム（CNS）の活用（学生、SA/TA、科目担当者、科目代表者対象）

関連資料のデータバンク化、議事録や活動記録などによる情報共有やコミュニケーションを促進するツールとして、SNS型学修支援システム（CNS）の活用を活発に行うことが望まれる。他のプロジェクトコミュニティも閲覧を可能にすることで、相互にプロジェクトの進捗状況がわかるとともに、プロジェクトを超えて素材を共有し、プロジェクト間のコラボレーションの可能性へ繋げることもできる。

■ブログ、大学ホームページからの情報発信

テーマ募集や講習会、シンポジウムなどPBL型授業全体で実施する行事の告知や、個別プロジェクトの活動をブログやホームページで紹介し、学内外に発信する。また、個別のプロジェクトのホームページを大学ホームページからリンクさせ、発信することで、大学の授業活動としての情報リテラシーを習得する重要な機会にもなる。

■貸出機材、資料、図書等の充実、教室スペースの確保（学生対象）

学外での取材や映像・音声の編集、イベント実施のために必要な機器（ビデオカメラ、デジタルカメラ、マイク設備、パソコン、プロジェクター、ネームホルダー、文具等）など、プロジェクト活動に伴う資料の貸出を行う。科目担当者にはPBL関連図書、学生向けには活動に必要な参考資料や図書を充実させ、過年度の成果物、報告書なども保管・閲覧できるスペースの確保も必要である。また、プロジェクト活動に応じた教室やイベント会場が手配できる体制も整えれば活動の範囲も広がるであろう。

■成果報告会の開催

PBLではプロジェクト活動のアウトプットとして、複数回の成果報告会を実施することが必須である。プロジェクト内での発表の機会とは別にプロジェクト全体としての中間報告会、最終報告会を実施することが望ましい。さらに、ポスターセッション形式、プレゼンテーション形式など発表方法に変化をもたせることで複数メンバーが経験を積み、それぞれの形式でのスキルも習得することが可能である。

■大学間合同成果報告会、シンポジウムの開催

PBLに取り組む大学等教育機関間で、学生による大学間合同成果報告会や、PBLが抱えるテーマに即したシンポジウムを開催し、PBLの課題や可能性を共有することは、学生自身のみならず参加者全員の学びの機会となる。

■各種アンケートの実施（授業アンケート、講習会、成果報告会、シンポジウム）

プロジェクト活動全般をとおして、科目担当者・学生・SA/TAなどを対象とした個別授業アンケートを行うことで、それぞれの立場からの意見を収集することが可能である。また、講習会、成果報告会などのイベントについては参加者アンケートとして実施し、講演者や運営側の改善材料とすることが可能となる。各種アンケートや講評は、必ず科目担当者・代表者、プロジェクト科目検討部会、教務主任連絡会議委員等、記載者間で情報が共有できるよう、CNSでの配信や懇談会での関係者間資料として運営側が配慮・準備することで、それぞれの立場での活動のリアルタイムの振り返りやプログラムの改善に役立てることができよう。

■学生懇談会、SA/TA懇談会、担当者懇談会の開催

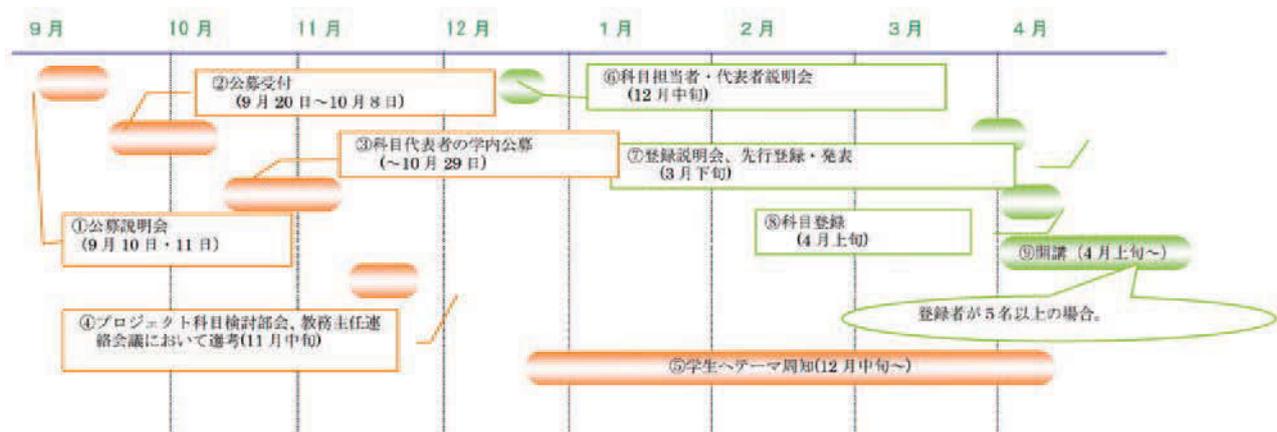
学生懇談会、SA/TA懇談会は、学生が自己のプロジェクト活動を客観的に振り返る機会であるとともに他プロジェクトが抱える問題を共有し、意見交換することによって学びを深める機会である。また、科目担当者懇談会では授業上の工夫や反省点等が話し合われることで、FDの機会ともなる。各懇談会

を対象者別に開催することで、それぞれの立場での意見が述べやすい環境を設定することになり、プロジェクト内での意識の差異を運営側が把握することで、進行中のプロジェクトに対する改善指導や、今後の全体事業プログラムに反映する手がかりともなる。

■成果報告書の作成（科目担当者、学生対象）

プロジェクト活動を文字化することで、さらなる振り返りやフィードバックを推進することが可能である。科目担当者による活動報告書は、プロジェクト活動での課題や評価指標の共有する効果があるとともに、PBLを実施する側の取組み事例でもある。学生による成果報告書は、学生自身にとって活動終了後の振り返りの材料であり、作成過程においてもチームや個人に新たな学びの機会を与えるものである。また、各プロジェクトの活動が完結した状態で活字化された学生報告書は、活動そのものを発信できる記録であるとともに、PBLの活きた資料であるといえよう。

(1) 開講までのスケジュール（2011年度プロジェクト科目実施例）



(2) 2011年度プロジェクト科目開講科目運営スケジュール

年月	2011年度 開講科目について	2012年度 公募に関するスケジュール
3月下旬	学生から登録申請書類提出 3/26 先行登録説明会（学生向けテーマ説明会・面接・選考・発表）	
4月初旬	科目登録 ガイダンス・面接・選考・発表 追加募集受付 保険受付 4/7 春学期科目 授業開始（プロジェクト活動） 4/27・28 学生担当者説明会	
5月中旬	春学期科目 履修中止受付	
6月上旬	6/4 大学間合同成果報告会 6/13 第1回プロジェクト・リテラシー講習会 「伝える技術について～ポスターセッション～」	
7月中旬	春学期 学生・SA/TA・担当者アンケート 7/6 春学期 学生懇談会 7/13 SA/TA懇談会	
7月下旬	7/22 春学期 学生成果報告書提出 7/22 第1回市民公開型教職員協同講習会 「プロジェクトにおけるリーダーシップ」 7/24 春学期 成果報告会 7/30 科目担当者・代表者懇談会	
～8月中旬	春学期科目 成績評価提出 8/26 春学期 科目担当者成果報告書提出	
9月中旬	春学期・秋学期連結科目 登録修正（削除） 秋学期科目 登録修正（削除・追加） ガイダンス・面接・選考・発表	2012年度科目公募説明会 2012年度科目テーマ公募広報（～10月中旬）
9月下旬	9/26 秋学期 授業開始（プロジェクト活動）	
10月中旬	10/14 第2回市民公開型教職員協同講習会「プロジェクトにおけるチームビルディング」	2012年度科目代表者学内公募（～10月末）
10月下旬	秋学期科目 履修中止受付 10/22 PBL教育フォーラム2011「学生のやる気を引き出すPBL～実践的な学習をサポートする支援としかけ～」	
11月下旬		2012年度採択テーマ決定
12月中旬	12/8 第3回市民公開型教職員協同講習会「著作権講座－発信することの責任」 12/20 第2回プロジェクト・リテラシー講習会 「伝える技術について～プレゼンテーション～」	2012年度採択科目担当者・科目代表者説明会 学生へ開講テーマ一覧・学生へのアピール文の掲示・公開
2012年1月中旬	秋学期 学生・SA/TA・担当者アンケート 1/11 秋学期 学生懇談会 1/11 秋学期 学生成果報告書提出 1/18 SA/TA懇談会	
1月下旬	1/22 秋学期 成果報告会 1/31 秋学期 科目担当者成果報告書提出	
～2月中旬	秋学期科目 成績評価提出 2/18 シンポジウム「第3弾学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦！－誰が何をいかに評価するのか？－」 2/18 学生成果報告書配布	
3月上旬	3/3 秋学期 科目担当者・代表者懇談会	

PBLにおける学習支援 —教員の役割—

プロジェクト科目代表者の立場から

プロジェクト科目検討部会委員・文学部准教授 伊達立晶

科目代表者としての教員の主な役割は、科目担当者との連携を密にしながら、学生が能動的に事業を達成していく環境を整えることである。そのために留意すべきことは、授業運営上に生じる問題を教員としての観点から未然に防ぎ、あるいは起こってしまった問題の収束のために尽力することだろう。その問題は、大きく二つに分かれるように思われる。

まず第一の種類の問題は、プロジェクト科目が教育的実践の場から逸脱することである。プロジェクト科目が社会的な活動を組み込む授業である限り、担当者の問題意識に即した方向性をもつことは当然である。しかし担当者が教育の場に不慣れである場合、つい社会活動としての側面を過度に優先させてしまうことがある。たとえば学生が主体的に問題意識を高める過程を経ることなく、担当者側の問題意識を一方的に学生に刷り込み、担当者の意のままに学生に活動させようとしてしまう場合がそうである。特にプロジェクト活動自体が法人などの活動とリンクしている場合、学生が単に下請けの労働者として、あるいは看板として利用されるだけになってしまう危険性がある。このような場合、企画の段階から学生に考える場を与え、プロジェクトが単なる労働力の提供にならないよう科目運営の方向を修正していく必要がある。敷かれたレールの上で学生の背中を押すような単なる体験型学習にならないように、教員も注意しておかねばならない。

プロジェクト活動の外で、担当者が関わる活動に学生がアルバイトで参加する場合もあるようだが、この二つの活動の区別がつかなくなるようでは、本来のプロジェクト活動の趣旨からずれてしまう。たとえばプロジェクト科目における連絡手段であるCNSを、担当者がついうっかりプロジェクト科目以外の連絡に使うということもありうるが、教員は授業としてのプロジェクト科目の分限に目を配り、授業を授業として守る必要があるだろう。

プロジェクトの内容によっても、注意しておくべき点はいくつかあろう。たとえばイベントの企画のプロジェクトでは、打ち上げ花火的なお祭りで自己満足してしまう場合が少なくない。しかしプロジェクト科目は同好会やサークルではない。単なる自己満足に終わらず、社会に対するアウトプットを重視し、学外からの評価を受けるプロジェクトになるよう、教員も目を配っていかなければならない。考え方や価値観の異なる人間どうしでチームを組み、計画を立案し、さまざまな社会人と交渉していくすべてのことを通じて、企画力のみならず実社会のルールや常識を学ぶということにこそ意義があるのである。イベント後の振り返りも含め、学びの場としての性格を確保することは、教員の大切な役割である。

商品開発などのプロジェクトの場合は、商品を実際につくりあげることが成果として求められるが、あくまでも科目の目的は企業に提案できる商品を開発することであって、企業の求める利潤の追求自体ではない。前者と後者とが不可分でもあるため、場合によってはプロジェクトが後者に傾くこともあるだろうが、教員はあくまでも教育の場としての授業の性格を保つよう、心がける必要があろう。

そもそも対外折衝の多いプロジェクトでは、プロジェクト科目の性格を理解していない社会人が数多く関与するため、さまざまな思惑が交錯し、プロジェクトの軸がブレてしまうことが少なくない。たとえば地域活性化のプロジェクトでは、プロジェクト期間が一年間であることを周囲に理解してもらえていないと、一種のボランティアと勘違いされて長期的な活動を求められてしまうことがある。だがその声に応じて一年を超える継続的なプロジェクトを構想し始めると、授業の一環としてのプロジェクトの趣旨とは大きくかけ離れたものになってしまう。学生にとってはどの社会人の言葉ももっともらしく、たとえプロジェクトの方向性と乖離していても、「こうすれば良い」という助言にはいともたやすく流されてしまうものである。そのようなとき、プロジェクト本来の目的に立ち返り、計画性をもって達成へと導くのは、担当者だけでなく教員の役割でもある。

こうした場合とは別に、プロジェクトに関連する領域の専門家を講師として招聘するなどして教育を充実させていくこともあるが、座学的な授業ばかりになってしまったり、単なる自己啓発やスキルアップが目的になってしまったりは、もはやプロジェクト科目とはいえない。学生たちが能動的に一つの事業を達成していく環境になるよう、教員も気を配る必要がある。

授業運営上に生じる第二の種類の問題は、担当者と学生との対人関係に由来するものである。もちろん担当者はそのプロジェクトに関する知見を多くもち、熱意をもってそれを学生に伝えるわけだが、学生の側のキャパシティーや情熱が必ずしも担当者の期待に沿うわけではない。また学生の若い発想力に期待する担当者は多いが、むしろ当初から発想豊かで活動的な学生など、そういるものでもない。この担当者と学生とのズレは、学生（特にプロジェクトのリーダー）への過度な負担として現われることになるが、日頃から学生を見慣れている教員はそこに無理がないのかどうか見守る必要があるし、場合によっては担当者のいない場で学生の相談に乗ることも必要だろう。学生にとっては他の学業も就職活動もきわめて重要であり、バイトやサークルなどさまざまなことに関わっているため、プロジェクト科目だけに専念できるわけではない。対人関係で学生が追いつめられるようなことがないように、あるいは担当者の熱意に押されて学生の他の活動が疎かになってしまうことがないように、教員は配慮していかなくてはならないのである。

担当者の思惑と学生たちの思惑は必ずしも重なるわけではなく、対立することも珍しくはない。もちろん担当者と学生との仲介として、TAやSAも重要な役割をはたしてはくれるが、こうした立場の者もまた対立の狭間に立たされて多くの気苦労を味わうことになる。場合によってはTAやSAが担当者の側に立つことで、かえって学生との対立が深まってしまうこともある。TAやSAもまた院生や学生であり、弱い立場であるし、また社会性が十分でない場合も多いのである。だがそのような場にもう一人年長者がいるならば、それだけでも人間関係の閉鎖性は解消されるし、それが今の学生の能力や考え方、モチベーションなどを知っている教員であることの意味は、きわめて大きいと思われる。プロジェクト自体の責任の多くは担当者にあるとしても、健全な学生生活を送らせる責任は教員にこそ多く求められているはずである。

逆にあまりにも学生への負担が軽すぎたり、学生を放任してしまっても、プロジェクトは未熟なものになってしまう。先述したように敷かれたレールの上で学生の背中を押すようなプロジェクトには問題があるが、逆に何の方向性も示唆せず自由な活動を認めてしまったり、迷走や暴走、あるいは沈滞を助長することになってしまい、学びも少なくなってしまう。そのようなことにならぬよう、教員は担当者と十分に話し合い、プロジェクト活動を活性化していくことが求められるだろう。おおよその方向性を絶えず示唆しつつ、学生自身の主体的な活動を促し、一つの事業を成立させるのは難しいことではあるが、それを模索していくことがプロジェクト科目というものだろう。

もちろんこれらの問題対策以外にも、プロジェクトの方向性や計画性について、授業の中で教員の側から助言すべきことはいくらかもある。その際の注意点について、最後に付け加えておこう。

教員は日頃からゼミにおいて学生の自発的な学習を指導してはいるが、プロジェクト科目ではよりいっそうの自発性が学生に求められることになる。実際、教員には答えが見えていることになかなか学生が気づかないということはいくらでもあるのだが、チーム内での話し合いの中で答えが出るように導くことこそ、担当者と教員の役割である。何を教え何を教えないかの線引きが難しいところであるが、教えた気もちをがまんすることも大切なのである。

また教員の考える方向性と担当者の考える方向性とに齟齬がある場合、それはそれで学生に考える機会を提供することにはなるかもしれないが、混乱や不信感を生じさせてしまうことになるので、あまり望ましいことではあるまい。担当者やプロジェクトの種類にもよるのであろうが、担当者とよく話し合いながらもできるだけ教員は後方支援に徹するという姿勢も必要なのではないだろうか。

プロジェクト科目という大学の授業のなかで、大学関係者としてその現場に立ち会い、授業を見守ることができるのは科目代表者だけである。教員の役割は不可欠であるのみならず、きわめて責任の重いものであるといえよう。

— PBLにおける学習支援 — 職員の役割 —

職員に求められる資質とは？

国際連携推進機構 国際センター 留学生課長
前 教育支援機構 教務部 教務課 教務係長

中原 伸 夫

1. プロジェクト科目とともに成長した6年

プロジェクト科目には、設置前の2005年から現職への人事異動が発令される2011年までの約6年間に渡って担当させていただいた。この間、プロジェクト科目の取り組みについては2度の文部科学省のGP (Good Practice) の支援を受け、金銭面での支援に加え、学内においても全学的な協力・支援体制を得ることができ、未知の領域であったPBLに時間をかけてじっくりと向き合い、プロジェクト科目の誕生から成長に至る、濃密で充実した6年間を一緒に過ごすことができたのは、職員冥利に尽きる。

もっとも、当時は、PBLについての情報が乏しく、どうすればPBLらしき科目になるのか、どうすれば学生の力を伸ばしてやれるのか、悩み、もがき苦しむ日々であった。開設してからも、小さな工夫や仕掛けを随時、盛り込みながら、慎重に歩みを進めてきた。知識やスキルをあっという間に吸収していく学生に無限の可能性を感じながら、そうした学生を大学教育が持て余すようなことがあってはいけない、と責任の重さを痛感した。

ただ、この6年間の苦難も、この科目を成功させようという、PBLを全面的に支持して下さる学内の先生方をはじめ、科目関係者・他大学の先生方、企業の方々、OB・OG、他、たくさんの方々の暖かいご支援やご協力、励ましがあったからこそ、何とか乗り越えられたように思う。そして、何よりも、学生自身がこの科目を支持し、この科目をもっと良くするために、情熱を込めて要望や希望を伝えてくれたことが、大きな原動力になった。

プロジェクト科目を通じて学生の著しい成長を間近で見ることができたのは、職員にとっても大きな喜びであった。この科目を受講した経験が、卒業後、社会で出てから役に立ったという声もたくさん聞く。私にとっては、プロジェクト科目を成功させることが大プロジェクトであり、このプロジェクトに携わることで、自身を大きく成長させることができた。

今、担当を離れて、PBLを少しだけ客観的に見られる立場になったところに、今回の寄稿のお話を頂いた。ご恩返しと、今後の更なるPBLの発展の一助となればとの想いを込めて、『職員の立場』から6年間のPBLの取り組みについて、整理し、振り返ってみたい。

2. プロジェクト科目における職員のポジションとは？

職員のメインの業務は、『学びの環境整備』である。授業を担当するのは教員であり、職員ではない。教員は直接的に教育支援を行い、職員は間接的な教育支援を行う。

しかしながら、本学で取り組んでいるプロジェクト科目では、職員も多少なり、直接的な教育支援に関わらざるを得ない。一般的な座学の授業であれば、教員に任せきりで、授業活動に職員が介入することは無い。教員が求める学修の環境を、教員の求めに応じてサプライしていけば十分である。ところが、プロジェクト科目では、学生の成長を促すために『学生の学び』の機会をできるだけ多く確保してやる必要があり、授業外の活動の充実が、学び・成長を促す重要な要素になっている。とはいえ、授業外のプロジェクト活動までを多忙な教員が全てフォローすることができないので、代わって職員がこれらの活動の一部をサポートすることになる。この授業外の活動を決して疎かにすることはできない。殆どのプロジェクト活動では、授業時間よりも長い学習活動が授業外で行われるからである。PBLでは、社会から学ぶことを大きな目的としており、その意味で、大学職員は模範の社会人として学生に接する必要がある。このように、PBLでは、授業時間と授業時間外の連携、即ち教員と職員の連携が、プロジェクトの成否や学生の成長に大きく関与すること

になる。職員と教員の質的・量的な協働が求められている。

3. PBLにおける職員の業務とは？

前述した通り、プロジェクト科目においても、職員の中心業務は、『学びの環境整備』である。本学のプロジェクト科目に関する職員の業務内容は、一覧（表1）の通りである。もちろん、それぞれの業務間の関連性もあり、単純に分類することが適切でない業務もあるが、下記の3つの業務に大別される。

（1）科目運営

プロジェクト科目の運営に直接関わる、根幹となる業務である。当然、最も業務量が多く、多様な業務が含まれる。各種案内や通知などの文書から手引きやマニュアルなどの資料の作成、説明会や報告会の準備・開催、集計処理（採択における評価）や分析（応募の分類や傾向など）、外部講師や企業や地方自治体との連絡調整など、交渉や折衝も行う。各種説明会では、司会進行や説明を行うこともある。ブログなどの情報発信や外部への広報など、積極的に記事を作成・提供し、新聞やテレビ等のメディアの仲介も担当する。加えて、学生やTA・SAなど、プロジェクト遂行に関する相談も受け付け、アドバイスを行うこともある。

（2）委員会運営

プロジェクト科目の運営方針やPBLに関する教育・研究体制を決定するための各委員会に関する業務である。日程の調査から、案内通知、各委員会の議案作成（関連する必要な資料の準備）、委員会の準備・開催（昼食や会場設営）、委員会のまとめ（記録、懸案や課題の整理）などを行う。

（3）GP事業

文部科学省に提出する調書や報告書等の資料の作成、予算の管理等、GP事業に関する窓口として本事業についての運営事務を行う。プロジェクト科目検討部会等で承認された各事業を、予算案に従って滞りなく実施するために、会場や機材、人員等の手配を行い、業者や関係者と事前に打ち合わせを重ね、1年間の全体スケジュールリングを行う。予算や会場、講師の都合など、様々な制約を考慮しながら、各種イベントをより『現実的な』企画に近づけて提案する。新聞広告や冊子の刊行など、PBLの取組みを学内外に積極的に広報し、情報発信に努めて、PBLの進展を促している。

4. 職員に求められる資質とは？

自らが持ち合わせていたかどうかはともかく、PBLにおいて、職員に求められる能力や資質、スキルについて考えてみたい。

●企画力

企画力は、よほどの天賦の才能の持ち主でも無い限り、最初から具わっている能力では無いだろう。何よりも経験（失敗も含め）の積み重ねが大きい。最初からPBLだけに限定せず、関連しそうな様々な学修や教育方法に関する書籍を広く読み、他大学の取組み事例なども実際に訪問調査するなどして参考にし、自らの大学のPBLに適合する手法をどんどん取り入れ、構築していくしかない。大学に限らず、中学校や小学校の取組みが参考になることも多い。可能な限り学習の現場に関わり、学生にどういう能力が不足しているか、どういうスキルを身に付けさせるべきかを観察し、カリキュラムの中に無理のないように、様々な学びの仕組みを仕込んでいくことが求められる。

●段取り力

プロジェクト科目では、シンポジウムや講習会、他大学との合同発表会等、授業外でも様々な学びの機会

を設けている。こうしたイベントの進行を中心的に仕切って頂くのは教員であるが、準備・開催・撤収などの会場運営は職員が中心となって行う。イベントを最初から最後まで遅滞なくスムーズに進行させ、成功するように導くことが職員に求められる。プロジェクト科目で特に心がけているのは、『学習効果を意識した段取り（単なるイベントの進行に留まらず、イベントの中に学生の学びの機会をいかにたくさん埋め込むことができるかを強く意識）』である。例えば、予めメモ用紙を用意しておいて、イベント終了後に気付いたことや参考になったこと、反省点などを学生に書かせて、提出させるなど、ちょっとした工夫で学生の学びに深みがでてくることもある。さらに成果報告会などでも、イベントの準備を学生自身に経験させることで、学生自身にも段取り力を身につけてもらうように工夫している。

●コミュニケーション能力

教員との対話と同じくらい、学生との対話の時間を確保することが大切である。プロジェクトの成否にも大きく影響するため、各プロジェクトの進行状況については、日頃から学生やTA・SAと継続的にコミュニケーションを取り、プロジェクトの概要を把握しておくことが大事である。特に学外関係者に迷惑がかかるような事が想定される場合には、至急、職員から学生リーダーに連絡を取り、状況を確認の上、イベントを中止させることもある。学生をカウンターに呼び出して注意することもしばしばある。その際、大切なことは、学生を頭ごなしに批判したり、否定したりせずに、学生の言い分、主張をきちんと聞いてやることである。学生には非が無く、学生の意見が正しいこともある。特に、教員とのコミュニケーションがうまくいっていないケースは、慎重に対応する必要がある。学生の力になってやれるのは職員しかいない。必要に応じてプロジェクト科目検討部会長に、担当教員と話し合ってもらえるように職員から働きかけることもある。

●忍耐力

プロジェクト科目で、教員同様、職員にも求められるのは忍耐力である。学生は、当然のことながら未熟である。社会経験が乏しいので、限界を知らない。夢や希望を持つこと、自信を持つことは非常に良いことではあるが、それがあまりにも過剰な場合は要注意である。学生がプロジェクトの実現に対してあまりにも楽観視し過ぎていることにしばしば驚かされることがある。特に自信過剰＝過信は、実体験によって築かれているものであることは少なく、主にテレビやネット上での疑似体験がベースになっていることが多い。プロジェクト科目では、集客のためにイベントを実施することがたくさんあるが、初期の企画案の多くは、テレビ企画のコピーである（酷いときには、タイトルもそのままである）。テレビですごく人気があったから、面白かったからという単純な理由で企画し、参加者を募集するのだが、その結果は、惨憺たるものである。そうした失敗体験を経て、初めて自らの無力さを知る。こうしたプロジェクトの失敗の経過を我々教職員は、ただ見守るしかない（もちろん、関係者に迷惑がかからない範囲内だが）。途中で教職員が無理矢理ストップさせたり、成功するように手助けをしたりしても、どちらの場合も学生には不満が残るだけである。失敗が判っていても、『失敗の後に本当のプロジェクトが始まる』ことを信じて、暖かく見守ってやる忍耐力が要求される。

●分析力

昨今、IR（Institutional Research）と呼ばれるICTを活用した大学戦略のためのデータ分析がよく話題になっており、分析の重要性が徐々に認識されつつある。当然、各種データを把握している職員にこうした能力が求められるのは当然のことである。データ分析に当たって、注意すべき、第一のポイントは、長期的な視野に立ってデータ分析を行うことである。もちろん、制度や仕組みをダイナミックに改善していくには、スピードが要求される場合も多いが、PBLの成果の評価（人材育成や能力開発など人に関わる評価）は、短期間で測定できるものでない。学生の中学や高校での学習方法や、課外活動の経験、学部カリキュラムの違いや専門知識の量など、その背景には多様な因子があり、PBLでの成長因子を特定することは困難を極める。

卒業後の追跡調査なども併せて実施するなど、長期的な視野に立って分析をすることが求められる。もちろん、事前に基礎データを十分に収集しておくことも大切である。

第二のポイントは、数値で表せないような指標（例えば思いやりやモラル等）をどのように分析に応用していくかを考慮することである。これはかなりの難題で、明確な方法は無く、今後、一層、研究を進めていく必要がある。定量的に分析できないものは、定性的に捉えるしか方法は無い。自己評価や他己評価、アンケートなど、多面的に情報を収集し、ポートフォリオとしてアーカイブしていくことが当面有効であろう。

●観察力

現在の大学職員に特に欠けているのは、観察力である。学生や教員を理解しているようで理解していない。カリキュラムは知っていても、その中身が持つ教育的な意義や授業間の関連性への理解も乏しく、授業内容に対する興味は薄い。特に授業外のサポートを強化するためにも、まずは現場でどのような内容の授業が行われているのか、その授業によってどのような知識や能力を身に付けることができるのか、をできるだけ把握することが重要である。また、他大学・海外ではどのような教育が行われているか、できるだけ広い視野から現状を分析し、変えなくて良いもの、変えるべきものを峻別し、同時に新しい価値をも創造していかなければならない。

●発信力

学生達の成果や取組みを学内外に積極的に発信していくことも重要な業務である。テレビや新聞等のマスコミに掲載されれば、良いプロジェクトだという短絡な意味ではない。学生の中にもマスコミに採上げられることが目的であると勘違いして活動している者も多い。確かに、一定の評価を得て意義を理解してもらえたからこそ、マスコミに掲載してもらえ、という側面もあるが、マスコミに採り上げられるというのは二の次であり、この科目では、プロジェクトの意義や評価を社会に問うこと、発信していくことが重要な活動であると考えているからである。立派なプロジェクトのように思えても社会的な評価が得られなければ独り善がりの活動にしか過ぎない。発信することによって、例えそれが『批判』や『中傷』であったとしても、何らかの意見や評価をフィードバックしてもらい機会を自ら創造していくことには大きな意味がある。

●連携力

職員の業務は、『連携』という橋を建設することである。学生と教員、学生と社会（地域、企業、NPO、行政等）、教員と社会、学生と外国、教員と外国など、両者を繋ぐ橋を次から次へと架けていく。建築する橋は、頑丈で道幅が広く、たくさんの人数が安全に通行できるものでなくてはならない。橋の距離はより短い（短時間で移動できる）のが望ましい。もちろん、工期もできるだけ短い方が良い。プロジェクト科目においても、社会と学生、教員を繋ぎ合わせる橋をたくさん建設していくことが職員に要求されている。

4. 最後に

PBLには無限の学びの可能性がある。プロジェクト科目は、忘れかけていた学びの楽しさや苦しさを実感できる素晴らしい科目である。今後も引き続き、PBLの成果を測定し、評価し、さらなる『学びの工夫』や『学びの機会』を加えながら、PBLの教育方法の研究を継続し、より充実したPBLのカリキュラムを築き上げていくことが望まれる。そのために、実践の輪、研究の輪をさらに拡げていくことが我々の大学に課せられた使命である。『学生の学び』のため、職員と教員の協働は不可欠で、今後一層、求められるであろう。

表1 職員の業務内容（同志社大学プロジェクト科目の取組事例）

大分類	中分類	業務内容	大分類	中分類	業務内容
科目運営	公募	公募要領・パンフレット作成	科目運営	成果報告会	成果報告会資料準備
		公募パンフレット送付			成果報告会会場設営
		公募説明会開催			成果報告会開催
		公募広告（新聞）		成果報告書	学生成果報告書説明会準備
		学内公募資料アップロード			学生成果報告書説明会開催
		学内担当者公募			学生・教員成果報告書原稿督促・校正
		採択資料作成			学生・教員成果報告書出版、配付
		採択結果送付		情報発信	ホームページ申請
		採択科目学内広報			メーリングリスト取得サポート
	プロジェクト科目授業説明会	ホームページ運用			
	開講準備	『授業の手引き』作成	ブログ運用		
		シラバス説明資料作成	CNS運用		
		シラバス基礎データ設定	プロジェクト科目検討部会	部会案内・日程調整	
		アピール文作成依頼		部会資料作成	
		アピール文アップロード	部会開催		
	プロジェクト手帳配付	PBL推進支援センター委員会	委員会案内・日程調整		
	先行登録		委員会資料作成		
	CNS	先行登録説明会開催	委員会開催		
		科目基礎データ作成	PBL推進協議会	協議会講師招聘	
		教員・学生ユーザ作成		協議会日程調整	
		CNS説明資料作成、配付		開催案内	
		科目データ作成		資料作成・会場準備	
		TA/SAデータ作成		ML案内	
		関係者データ作成		協議会開催	
		インフォメーション作成		講習会講師招聘	
		CNS利用説明会		講習会日程調整	
	予算管理	予算説明会資料準備		市民公開型教職員協同講習会	開催案内
		予算説明会開催	資料作成・会場準備		
		予算申請受付	新聞広告・ML案内		
		伝票、申請書・領収書チェック	講習会開催		
		伝票記入	外部評価委員会	委員会案内・日程調整	
		用品発注、納品チェック		委員会資料作成	
		残高管理	委員会開催		
		TA/SA	TA/SA募集	シンポジウム	シンポジウム講師招聘
	TA/SA利用申請書作成、送付		シンポジウム日程調整		
	TA/SA割当、決定通知送付		開催案内送付		
	TA/SA出勤管理		資料作成・会場準備		
	懇談会	懇談会案内作成、送付	PBL通信	新聞広告・ML案内	
		学生懇談会開催		シンポジウム開催	
		担当者懇談会開催		原稿依頼	
	アンケート	TA/SAアンケート懇談会開催	原稿校正		
		アンケート作成、送付	印刷発注		
	保険加入	アンケート分析、取りまとめ	配付・送付		
		保険受付	PBL成果報告書作成	原稿依頼	
	保険未加入者督促	原稿校正			
	授業サポート	保険加入申請	印刷発注		
		物品貸出・管理	配付・送付		
打ち合せ室貸出・管理		PBLガイドブック	原稿依頼		
書籍（資料）貸出・管理			原稿校正		
教室手配、学内各事務室への協力要請・申請手続		印刷発注			
学外への問い合わせ・各種申請手続		配付・送付			
相談、打ち合せ（学生、担当者、センター長等）					
マスコミ対応					
プロジェクト講習会	プロジェクト講習会準備				
	プロジェクト講習会案内				
	プロジェクト講習会講師招聘				
	プロジェクト講習会開催				

●●●●● PBLにおける学習支援 —CNS— ●●●●●

SNS型学修支援システム「CNS」

PBL推進支援センター委員・プロジェクト科目検討部会委員・文化情報学部教授 鋤柄俊夫

プロジェクト科目で活用をすすめているCNSであるが、その機能を一般の授業科目で展開してゆく際の有用性の試行実験として、文化情報学部の歴史文化情報研究室において2010年度からCNSを利用した卒業研究指導をおこなっている。

本研究室は、時代や地域性を背景に、さまざまな形や大きさや装飾や使用法などの多彩で大量の断片情報から構成されている非文字の歴史文化資料を、数量化や視覚化によってモデル化し、その分類を中心とした分析をおこなうことで導き出される新たな歴史解釈の提案と、その成果の社会的な活用可能性の模索を目標としている。

2010年度の卒業研究では、弥生土器から江戸時代の大名屋敷までの、時代も内容も多岐にわたる歴史コンテンツが、形から空間配置までの多彩な視点で検討され、基本的には分類の再検討を中心にした考察によって14の卒業論文が完成された。

その構成は、基本的に「はじめに」と第1章の「先行研究」、第2章の資料提示である「情報整理」および、第3章の「情報分析および考察」、そして「まとめ」であり、ゼミ生は最初に、各自のテーマに関係する先行研究を学ぶことで自分の研究目的を明確にし、それ以後、さきの構成にそって順次必要な資料調査や分析研究をおこなっていくことになっている。

このような当研究室の特徴により、教員は、常にゼミ生の多彩な研究テーマと大量のコンテンツに目を配り、最終目的と全体構成を意識しながら、章毎の進捗状況を把握している必要があり、ゼミ生も同様に、自分の最終目標が何であり、全体構成の中で現在自分が何をしているかを常に理解している必要がある。

そこで当研究室では、このような卒業研究の運営支援ツールとして、CNSの中でも、データバンクとジャーナルおよびスケジュールの機能に着目し活用をおこなってきた。

データバンクは、ゼミ生の多彩な研究テーマの最終目的の明示と進捗状況の把握に活用した。データバンク内には、ゼミ生1人ずつのフォルダーを作成し、さらにその中に卒論の各章のフォルダーを作成した。ゼミ生は研究を進める中で、その途中までのものも含めて、原稿をそれぞれのフォルダーにアップロードし、さらに更新した場合は上書きせずに、版を変えてアップロードすることにした。これによって、教員もゼミ生も、「はじめに」フォルダーで常に各自の最終目標を見、各章のフォルダーで進捗状況を確認することができた。また章毎のフォルダーがあることで、視覚的に研究の過程が理解しやすくなった。さらに各自のデータをデータバンクにアップロードすることで、データが複数箇所へバックアップされることにもなり、データ保存の安全性も高まった。

ジャーナルは、連絡とゼミ発表へのコメントなどと共に、具体的な卒論内容の指導に活用した。研究内容や運営に関わる連絡はできるだけ電子メールではなく、CNSのメッセージを用いることにつとめ、とくにジャーナルでは、ゼミ発表や各人がアップロードした原稿に対するコメントを全員が見られる状態でアップロードし、その共有化をはかった。またこの時の書き方として、できるだけ複数のゼミ生におよぶコメント記述につとめた。これによって、全員が互いの研究に関心を持ち、進捗状況や停滞しているところを知り、資料調査や研究法などで意見交換をする環境をつくりだすことができた。

スケジュールは、とくにこの年の秋学期に今出川キャンパスの発掘調査を兼務していたため、限られた時間の中での指導可能な日時を、変則的な予定にあわせて詳細に可能な限り公開するために役立ち、また卒論提出への手続や、ゼミ生毎の原稿達成の時限明示にも役立った。

このようなCNSの活用以外に、もちろん対面での卒論指導をおこなっていた。しかしCNSの活用を加える

ことで、ゼミ生の多彩なテーマと進捗状況を掌握し、より適切に指導をおこなうことができたと考えている。なかでもデータバンク内のゼミ生毎のフォルダーにアップロードされた原稿をみると、研究の進展にしたがって、その内容が充実していった状態がわかり、学生本人にとっても達成度を確認できる仕組みだったと思う。またアクセスデータを見れば、夏期休暇をのぞく、とくに秋学期におけるログイン数の多さは、メッセージとジャーナル形式で記録化していったコメントを共有することで育成された、ゼミ生の協調関係につながるデータではないかと考える。

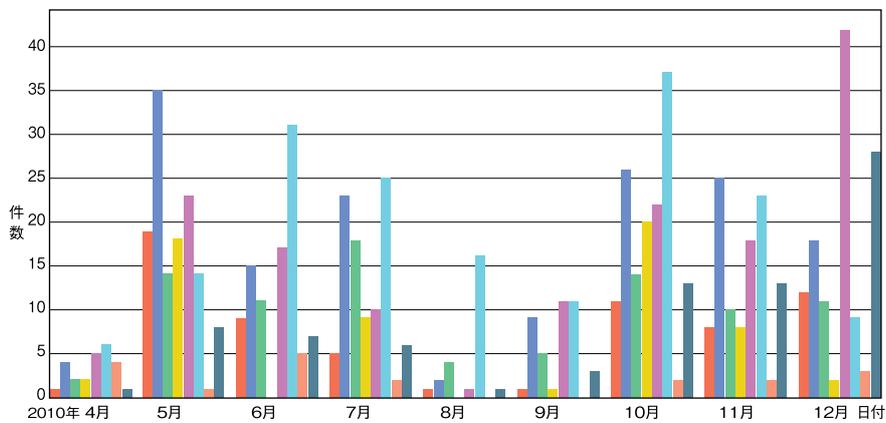
卒論執筆は、最終的には個人研究である。そしてその指導には対面が最も大切であることは言うまでもない。しかし個人で研究していく過程で、関連する研究仲間と議論をし、また助け合うことは、その研究に新たな知見と発想を生み、深みと広がりを持たせるものとなる。そしてメールとは違った形で共有されるコメントは、教員とゼミ生の間を、より近くさせる効果があったのではないかとと思われる。その点でCNS機能の活用は、卒業研究指導の大きな支援ツールになると考えている。



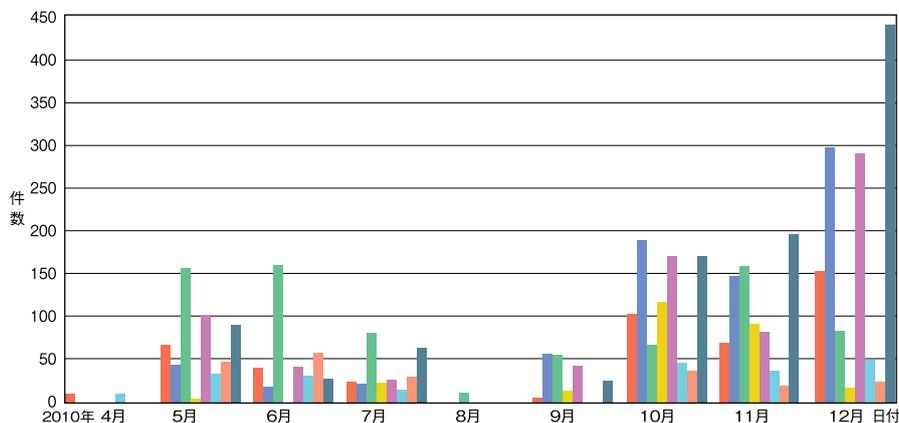
ジャーナルを利用した指導事例



個人別データバンクの活用事例



受講生の月別ログイン回数(2010年4月～12月)



受講生の月別データバンク(コミュニティ)のコンテンツアクセス件数(2010年4月～12月)

CNSの運用と改善について

株式会社SIGEL

同志社大学では、2006年度に現代GPで採択された「公募制のプロジェクト科目による地域活性化～往還型地域連携活動のモデルづくりを目指して～」の取り組みの一環として、『3つのC（Community, Communication, Collaboration）』をサポートし、PBL（Project-Based Learning）を円滑に支援するコミュニケーションシステムとしてCNS（Community Networking Service）を2005年度に構想、2007年度から独自に株式会社SIGELと共同開発を進め、2008年4月よりプロジェクト科目での利用を開始しました。

プロジェクト科目での本格利用により本システムの開発目的である学生同士、指導教員、あるいはスタッフをも含めた活発なコミュニケーションや協働学修の実現、学びの中心に学生を据えた個人の学修履歴の記録、授業科目ごとのコミュニティ開設とコミュニティへの学修履歴の記録、授業期間中および授業終了後の成果振り返りのためのポートフォリオとしての活用、科目間の学修における有機的な結合や気付きを提供することは達成できたと考えます。

しかし、この達成の背景には学生を中心としたCNS利用者からの各種改善要望や使い勝手の向上を求める意見を随時精査し、取り入れたことがポイントであったと考えます。主な改善点は下記参照。

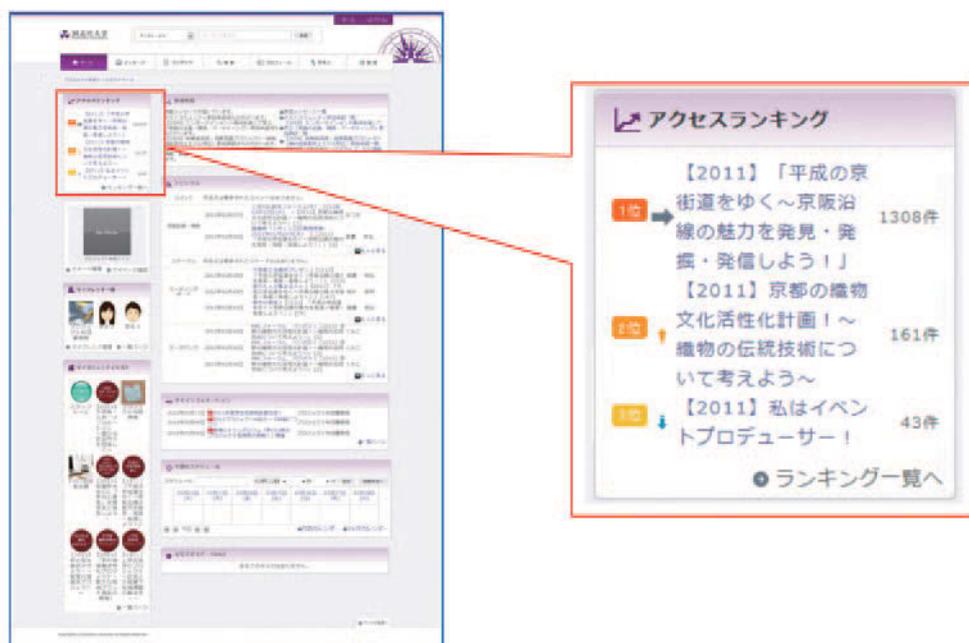
■携帯電話対応（2009年6月）

昨今の携帯電話普及に伴い、外出時でもプロジェクト科目としてのスケジュール確認や取材や調査内容が記録できる要望が多かったため、携帯電話主要メーカー3社の全キャリア対応を実施しました。



■アクセスランキングの公開（2010年8月）

利用者の利用頻度とモチベーションを上げるための仕掛けとしてプロジェクト科目単位でアクセス数を集計しアクセスランキングとして公開しました。学生自身が所属しているプロジェクト科目だけでなく他のプロジェクト科目での活動内容や進捗を閲覧し刺激を得て活性化を促す狙いがあります。



■学修記録の項目設計機能とテンプレート化（2010年8月）

学修履歴を振り返る機能としての（学びの）ジャーナルに、学生が記録する項目を自由に設計しテンプレート化できる機能を追加しました。現在では学修履歴の記録、授業期間中および授業終了後の成果振り返りのためのポートフォリオとしてもっとも活用されている機能です。



■画面デザイン変更（2011年3月）

システム利用4年目を迎えるにあたり使い勝手の向上とシステムの印象を変える目的に画面デザインを一新しました。



今後も学修における協働作業を一層支援するための情報共有ツールとして機能充実だけでなく、運用の見直し、使い勝手向上も継続的に行ってまいります。

— PBLにおける教育効果の測定 —

—プロジェクト科目成果報告会・プロジェクト科目成果報告書—

プロジェクト科目検討部会委員・文学部教授 新 茂 之

教育効果の測定

PBL、すなわち、Project-Based Learningは、字義どおり、プロジェクトに基づいた学習の活動である。プロジェクトとは、必要な情報を獲得したり、製品を作ったり、催しを開いたりするために、注意して練った企画を意味している。だから、プロジェクトには、ふたつの局面がある。ひとつは、企画の最終的な目標として定めた成果であり、もうひとつは、その成果に至るまでの過程である。プロジェクト科目は、プロジェクトについての、このような考え方を教育のなかに導入し、授業のなかにPBLを組み込んでいる。プロジェクト科目を教育課程のなかに位置づけるとき、ふたつの観点に立って、その教育効果を測定しなければならない。まず、学生たちがプロジェクト科目の取り組みによってどのようなものを作りあげたのか、という、プロジェクトの成果に着目して、教育効果を見さだめる必要がある。つぎに求めたいのは、その成果に至るまでに学生たちがなにを学んできたのか、という、プロジェクトの過程に力点を置いて、教育効果を確かめる、という姿勢である。これらふたつの視点から、プロジェクト科目の教育効果を解析するための材料として、たとえば、同志社大学に例をとれば、プロジェクト科目成果報告会とプロジェクト科目成果報告書とを挙げることができる。

(1) プロジェクト科目成果報告会

プロジェクト科目成果報告会では、学生たちは、プロジェクト科目の学びによってなにを成果として生みだせたのかを発表する。どのような企画であろうと、それにはねらいがあり、そのもくろみに基づいて、あの企画が立ちあがるのであるから、ねらいが達成できなければ、企画は、失敗に終わったことになる。それゆえ、プロジェクト科目では、ねらいが具体的な形で現れることは、肝要である。だから、参加者だけが充足感を得たとしても、それだけでプロジェクト科目の目標が達成できたとは言えない。プロジェクト科目成果報告会では、学生たちは、学びの成果を提示する。かれらは、実際的な効果を検証し、ねらいどおりの結果が得られたかどうかを明らかにして、それが獲得できなかったときには、その原因を究明しなければならない。

たしかに、計画を立案し、それを遂行して、その効用を確認する、という作業は、限られた学期では、なかなかこなせない。場合によっては、成果を明確には提示できないかもしれない。しかし、プロジェクト科目の特性を考えに入れば、そうした事態に陥らないように、はじめから企画の内容を精査し、なにをどこまで実現するのか、企画の到達点を、作業の途中で変更を余儀なくされることがあるにしても、ある程度まで掘っておかなければならない。逆に言えば、プロジェクトの内容を練って、実現の可能性を開いてきたからこそ、成果をしっかりと報告できるのである。上述したように、プロジェクト科目の第一の局面からすれば、その教育効果は、結果主義的に把握する必要があるのである。

プロジェクト科目の教育効果を見極めるときに、つぎのように問う必要がある。すなわち、学生たちは、はたして、社会のなかで成果の実際的な効果を検証して、そこで一定の有効性を確認できているのかどうか、と。この視点は、プロジェクト科目に関する結果主義的評価の指標として機能する。つまり、成果の共同体的意義に注視するのである。プロジェクト科目成果報告会では、プロジェクト科目担当者とは別に、審査員としてほかの教員も参加する。審査員は、学生たちの報告を聞きながら、高く評価できるプロジェクトに、割りあてられたポイントを投票する。いちばん多くのポイントを獲得したチームには最優秀賞が授与される。この試みには、ふたつの含意がある。ひとつは、第三者的評価が一定の数値によって明らかになる、という点である。もうひとつは、成果の共同体的意義がひとつひとつの形成する社会の要求によって異なるのを学ぶ、

という意味である。審査員は、さまざまな社会的問題に対して、それぞれの考え方を持っているから、報告の内容が審査員の考え方に適合していれば、当の審査員は、その報告に有意義性を認めるし、プロジェクトの成果が審査員の問題意識にできていないと、その評価は、低くなりがちである。このようにして、成果の共同体的意義は、共同体の成員たちの一定の合意に基づいてできあがっていくのである。

(2) プロジェクト科目成果報告書

プロジェクト科目の教育効果を見さだめるのに、結果主義的観点だけでは十分ではない。というのは、企画では、成果を明示し、その効果を測る段階のほかに、その成果に至る過程も無視できないからである。PBLは、成果を出すまでに直面するさまざまな問題を解決していくための営みとみなせ、その意味で、探究である。探究は、なにを明らかにしたか、という探究の帰結だけではなく、いかにして活動を制御してきたのか、という探究の方法も含んでいる。だから、プロジェクト科目の教育効果を捕捉するには、学生たちが設定した目標に向けて、学生たちが、どのような課題に取り組み、それをどのように解決して、そこからなにを学んだのかを問わなければならない。つまり、過程主義的観点が必要になるのである。

プロジェクト科目成果報告書は、結果主義的観点に立ちながらも、成果を形にしていくなかで学生たちが学びとっていた内容にも言及しており、過程主義的観点を提示している。この報告書は、ア) プロジェクトの目的、イ) プロジェクトの到達目標、ウ) 到達目標の達成度、エ) 成果内容、オ) プロジェクトへの取組についての自己評価から成っている。「プロジェクトの目的」と「プロジェクトの到達目標」では、まずは、結果主義的に、なにを具体的な成果として形にしていくのかを明白にしなければならない。そのうえで、そのねらいに向けた具体的な方策を露わにする。このときに、プロジェクトの過程に照準を定めることになる。

しかしながら、プロジェクトの過程をはっきりさせるからと言って、ただちに過程主義に立つわけではない。というのは、成果に向けたプロジェクトの探究は、各段階に分かれており、それぞれの段階では、最終的な成果を完成させるための準備的成果をまとめなければならないからである。「到達目標の達成度」では、プロジェクト全体の最終的成果をしっかりと設定して、それに向けた途中の成果を、プロジェクトの過程を構成する各段階で明別し、到達度を問わなければならない。言い換えれば、導入、展開、終末、という授業の全工程をつうじて、プロジェクト科目のねらいを結果主義的観点から提起することで、各段階で学生たちが身につけなければならない技能、たとえば、成果を形にするための具体的な技術、コミュニケーションの力、人間関係を構築する力、チームワークに貢献するために必要な資質、社会性、誠実さを、プロジェクト科目で培うべき能力としてようやく位置づけられる。このときにはじめて過程主義的にプロジェクト科目の教育効果を査定できるのである。

したがって、「到達目標の達成度」および「成果内容」では、第一に、結果主義的に確認した成果をどれだけ実現できているのかを評価しなければならない。教育効果の測定は、上述したように、成果の実際の効果に関する社会的検証と成果の有効性に関する社会的確認とに基づいている。こうした見地でプロジェクト科目の教育効果を測ったうえで、第二に、過程主義的に、ある地点に到達するまでに、学生たちが、どのような能力を習得し、どのような態度を身につけたのかを評価する。はじめから過程主義的評価に焦点を絞ってしまえば、なぜ学生がそうした技能をものにしなければならなかったのか、その理由があいまいになってしまう。たとえば、どのようなプロジェクト科目も、学生たちのコミュニケーション力の涵養を重視している。とはいえ、コミュニケーションと一口で言っても、どんな脈絡で相手と意志疎通を図るのかによって、コミュニケーションの内実は異なる。当該のプロジェクト科目でねらいと定めている成果に方向定位されて、コミュニケーション力の中身は具体的に定まってくる。すなわち、学生たちがプロジェクト科目の学びをとおして改めて気づかされたことについて、過程主義的観点から捉えるにしても、結果を脇に置くのではない。プロジェクトの成果を結果主義的に把握して、たとえそれが思わしくなかったとしても、学生たちの成長の度合いを過程主義的に見つもらなければならない。したがって、「プロジェクトへの取組についての自己評価」では、「学生たちは多くのことを学んだ」とか「学生たちは貴重な体験を共有できた」とかといった言表を避け、過程主義的評価の材料になる、学生の気づきについても、結果主義的見地で解析すべきであろう。

PBLにおける教育効果の測定

—授業アンケート・各種アンケート—

PBL推進支援センター委員・経済学部教授 八木 匡

1. PBL教育効果評価の重要性

大学における教育の中心は、学問体系の基礎を教え、専門的能力形成の基盤を作ることにあると言えよう。学問体系の基礎を学ぶことは、能力形成の土台をつくることであり、多くの場合には難解かつ単調な勉強の繰り返しを必要とする。そのため、学生による教育評価が一般には容易ではない一方、教育手法に関しては確立されている場合が多いと言えよう。PBL教育に関しては、大学における本格的な導入から間もないこともあり、教育手法が確立されているとは言い難く、担当教員および学生からの評価を検討しながら教育手法の改善を進めることが重要であると言えよう。また、PBLの場合には、教育目標自体も共通した理解があるとは必ずしも言えず、教育目標に関する議論を避けて通ることもできない。本稿は、学生と担当者のアンケート調査を基礎に、PBL教育の目標と教育手法に関する議論を進め、今後のPBL教育の改善に資することを目的としている。

2. PBL教育効果の評価方法

PBL教育効果の評価方法として重要なものとして成果報告会がある。この成果報告会は春と秋で異なった方式を採用している。春はポスターセッション方式であり、秋はプレゼン方式である。それぞれの方式では、それぞれ必要としている能力が異なったものとなっており、学生自身の自己診断のポイントも異なる。ポスターセッションでは、他者にメッセージとコンセプトが伝わるようなポスター制作が重要となるのに対し、プレゼンテーションでは、さらに人を惹きつける工夫が必要となる。学生は、成果報告会での評価と感触から、様々な点に関して反省を行い、PBLを通じて何を得心したかを確認することになる。成果報告会の後に学生対象に行われるアンケート調査は、PBL教育効果のレベルをかなり正確に反映したものとなっていると考えられる。

次に、学生および担当教員を対象としたアンケート調査も重要な評価手法となっている。この評価は選択肢方式をとっており、数量的に評価を整理することが可能であり、調査が蓄積されれば時系列的および分野別に比較評価することが可能となると共に、統計的な分析が可能となる。

以下では、まず選択肢方式のアンケート結果を整理し、その後記述型アンケートの結果をまとめることとする。

3. 授業アンケート結果

3.1 受講者評価

まず、表1ではPBLを通じて獲得した能力をまとめている。最も高い選択率となっているのがコミュニケーション能力であり、第2位が問題発見・解決能力となっている。これらの能力は、講義方式の大学の授業では獲得しにくい能力であり、PBLの教育上の意義を明確に示している。

表1 獲得した能力

実際にこの科目を受講してどのような力が身についたと思いますか？ 【複数回答可】	回答数/回答者総数(141)	選択率(%)
問題発見・解決能力	62	44.0

コミュニケーション能力	72	51.1
マネジメント能力・統率力	27	19.1
情報収集・分析・活用力	42	29.8
自己表現力	47	33.3
企画・立案力	47	33.3
交渉力	10	7.1
行動力	46	32.6
何も身に付いていない	5	3.5
その他	4	2.8

表2で示されるように、受講者の満足度は、「非常に満足」と「満足」を足した数値が91.4%となっており、受講した学生はPBLに高い満足度を持っていることが理解できる。

表2 受講者満足度

この科目を受講して良かったと思いますか？【一つを選択】	人数	比率(%)
非常に満足している	59	42.1
満足している	69	49.3
どちらでもない	10	7.1
不満である	0	0
非常に不満である	0	0
無回答	2	1.4

3.2 担当者評価

表3では、担当者満足度を示しており、PBL科目を担当した外部講師の評価が示されている。「必ず応募する」と「出来れば応募する」を合わせると、81.25%が科目担当者として、授業担当に意義を見いだしていることが理解できる。

表3 担当者満足度

来年度もプロジェクト科目に応募しますか？【一つを選択】	人数	比率(%)
必ず応募する	5	31.25
出来れば応募したい	8	50
未定	2	12.5
応募しない	1	6.25
その他	0	0

表4で示されるように、学生の能力に対する評価は、「非常に優れている」と「優れている」を合わせると87%となり、科目担当者は学生の能力に対して高い評価を与えていることが理解できる。

表4 学生の能力レベル

学生の知識レベル・能力について【一つを選択】	人数	比率(%)
非常に優れている	2	13.3
優れている	11	73.3
どちらでもない	2	13.3
劣る	0	0
かなり劣る	0	0

学生の能力に対して高い評価を与えている一方、努力レベルに対しても表5で示されているように、「非常に満足」と「満足」を合わせた比率は81%となり、高い評価を与えていることが示されている。

表5 学生の努力レベル

学生の授業への取組について【一つを選択】	人数	比率(%)
非常に満足している	3	18.75
満足している	10	62.5
どちらでもない	3	18.75
不満である	0	0
非常に不満である	0	0

運営費に関しては、表6で示されているように、少なすぎるが18.75%あり、多すぎるが0%であることを考えると、十分に満足しているとは言えないことが示されている。

表6 運営費満足度

授業運営費（1セメスター当り30万円）について【一つを選択】	人数	比率(%)
少なすぎる	3	18.75
適切	11	68.75
多すぎる	0	0
無回答	2	12.5
非常に不満である	0	0

支援体制満足度については、表7で示されるように、「非常に満足」と「満足」を合わせた比率が62.5%であるのに対して、「不満である」が6.25%あり、不満点に関する詳細な調査が必要であることを伺わせている。

表7 支援体制満足度

授業への支援体制や制度について【一つを選択】	人数	比率(%)
非常に満足している	2	12.5
満足している	8	50

どちらでもない	4	25
不満である	1	6.25
非常に不満である	0	0
無回答	1	6.25

4. 成果発表会アンケート結果

成果発表会後に行われた自由記述型アンケートからは、他の科目で得ることが難しい課題と成果について、示唆に富んだ記述が多く見られた。以下では、その一部を抜粋して紹介する。

- ・ 答えのない問題に取り組む力がついたと思う。
- ・ 理系的な部分だけでない文系的な（交渉力や文系知識）部分も含めた総合力を身につけられることをアピールできた。
- ・ 考えをまとめることまでは出来ていたが実際に何かを実践し成果を出すことがプロジェクト科目のあるべき形であると思うので、何かを考えるまでの部分までしか出来なかったと思う。
- ・ テストというものさしでは自分はダメですが、プロジェクト科目というものさしでは別の部分を評価していただけたと思います。
- ・ 自分達がまだ本当の意味で一生懸命ではなく、まだまだ甘いと感じました。
- ・ 座学では絶対に身につけられないスキルをみがくことができた。
- ・ 実際に社会人の方と関わったり、重役の方にプレゼンをさせていただいたことで、社会人になる予行練習ができたような気がした。
- ・ 企業家の方からの質問に適切な回答が出来た。
- ・ たくさんの人と出会えて、とても良い経験になりました。
- ・ 自分が駄目駄目だということを再確認できたこと。
- ・ コンセプトを持ってプレゼンを企画し、実現できた。
- ・ 企画を実行し、メディアを通して発信できた「外向き」の成果と、全ての活動を通して一人一人が成長できた「内向き」の成果は何にも変えがたいものとなった。
- ・ このイベントを行ううえで、コミュニケーション能力を大事にして行った。
- ・ いろんな方々のアドバイスを受ける中で、新たな発見ができた。他のプロジェクトから学ぶことができた。
- ・ メンバー全員での情報の共有ができていなかった事を再確認できたこと。
- ・ 深く尋ねられた時にうまく答えられず、自分の知識不足を痛感した。

5. アンケートから評価したPBL教育効果

前節の自由記述型アンケートで示されている点から、PBL教育効果の特徴を整理することができる。第1に、コンセプトを提示し、それを説得的に伝える能力を形成することが重要となっていることである。21世紀の経済社会では、新しいコンセプトを提示し、伝えることにより、より多くの活躍できる場が生まれると考えられており、この能力の重要性はより高まるものと考えられる。第2に、グループ活動が主体のPBLでは、コミュニケーション能力の本当の意味が理解できることである。コミュニケーション能力は、相手の意見や考えを聞き、理解する能力と自分の考えを正確に伝える能力であると考えられるが、PBLでは1対1の関係だけでなく、グループ内の情報共有の手法と活用方法の習得まで求められる。また、メディアを通じた「外」に対する情報発信という意味でのコミュニケーション能力が求められている点も重要であろう。第3に、自分自身が達成したことを、第3者に客観的に評価されることを通じて、自己評価をより厳しく出来る点も重要な点であろう。これらの能力形成は、内部の人々との関係性のみが存在している、大学内での講義型お

よび演習の授業では得ることが困難なものであるということができよう。

6. 評価方法とPBLの課題

PBL教育における評価の課題としてあるのが、専門家による評価が必ずしも行われていないことであろう。PBLについては、大学教員が専門家ではない場合が多いため、専門家による成果評価を行うことには限界がある。しかし、専門家による評価が必要であるのがPBLであると言っても良い。それは、学生にとっての成果達成の目標設定が、専門家による高い評価である場合が多いと考えられるからである。たとえば、ラジオ番組を制作するプロジェクトであれば、専門家の人々が多く関わることになり、成果の質によっては、大学外の多くの人々が迷惑を受ける可能性もある。このような状況の中で問われているのが、いかに努力したかではなく、成果の質のみである。この事実を踏まえて、PBLに取り組むことにより、緊張感が生まれ、真の意味での教育効果が得られると考えられる。

PBL教育は学生の自己満足では意味を持たず、常に社会による評価を明確に意識したものにする必要がある。そして、社会の厳しい評価を常に感じるような仕組みを作り上げることが重要であろう。たとえば、PBLでコンサートを開催するのであれば、そのコンサートに対する評価は、いくらの入場料で聴衆を集めることができるのかという点にかかってくる。実社会では、巨額の借入金でコンサートを開催するため、聴衆を集めることができるか否かは死活問題である。そのため、企画から実施に至るまで、緊張感を持って極めて慎重に進める必要がある。このようなプレッシャーを感じながら、成果を求めることにより、能力形成が効果的に進むと考えられる。

●●●●● PBLにおける評価 ●●●●●

PBL推進支援センター長・プロジェクト科目検討部会長・文学部教授 **山田和人**

プロジェクトで求められる力

プロジェクトでは、常に「考え抜くこと」「チームで活動すること」「行動すること」が求められる。そこでは、時々刻々変化する状況の中で、情報共有をしながらチームのメンバーの合意を形成して、計画的、持続的にプロジェクトを遂行していかなければならない。そこで学生は、受験時代から馴れ親しんだ個人学習ではなく、ともに学ぶチーム学習へと意識を変革していかざるを得ない状況に立たされることになる。そうした未体験の現場の中で揉まれることで自分自身のありかたを見つめ直し、自己啓発のレベルから自己変革へと自らを成長させていくのがPBLの教育力である。

プロジェクトを遂行する過程で求められる能力を列挙してみよう。

日常の局面	コミュニケーション能力・問題発見解決能力
議論の場面	論理的思考力・企画立案能力・情報交換共有力・交渉力
活動報告書	自己表現力・自己認識力・自己管理能力
タスク管理	目的遂行力・マネージメント能力・交渉調整能力
データ管理	情報収集整理活用力・情報伝達能力・情報発信能力

このように多様な能力がプロジェクトの日常において求められてくる。学生は、そうしたなかで自分の長所を伸ばそうと努力するとともに、チームのメンバーとの対話の中で自分の弱点に気づく。そして、お互いにメンバー同士で信頼し合い、励まし合って、ともに学ぶ姿勢を獲得していく。まさに双方向的な協調学習と言える。プロジェクトを通して、学生は自分自身を客観的にとらえるメタ認知、多様な人やものとの出会いによる気づきを得ることができる。自ら学び、自ら気づく。まさに自発性・自立性をもって行動するきっかけをつかむことができるようになる。PBLがもたらす学生の成長は、こうした不断の気づきのプロセスの中でもたらされていく。

PBLで学生に求められる力は多様であり、現在進行形の学びのプロセスのなかで発揮されていく。そういう意味において、PBLの評価も従来の静的な客観評価から動的な総合評価へとパラダイムシフトしていく必要がある。

PBLと自己評価・相互評価

評価という視点から言えば、PBLは学習者の自己評価・相互評価を内在した教育プログラムである。この点が、PBLの最大の特徴であり、その特徴を踏まえた上で評価についても検討されるべきであろう。PBLの授業展開では、学習者はチームのメンバーとともに活動するが、授業時間は多くの場合、合意形成のための連絡会議という位置づけになることが多い。学習者にとっては、授業外学習時間の方が質量ともに学習の深度は深くなる。それを最大にすることで、プロジェクトは大きく成長していくことになる。しかし、授業外学習の状況は担当者にはよく見えていない。授業外学習に行われるすべてのミーティングに担当者が出席することはできないからである。厳密に言えば、授業外の学習状況を把握しているのは学習者自身ということになる。

それゆえPBLでは、学習者自身が自分自身の活動をもっともよく理解している評価主体であるということになる。同時に、その活動を身近で観察しているのは他ならぬチームのメンバーであり、ともに活動してい

る学習者がお互いの活動内容について理解し、承認し合っている。すなわち、PBLでは、学習者の自己評価と学習者間の相互評価が日々の活動の中で行われているということになる。たとえば、役割分担をする場合、誰が何を担当するのかを決める時に、プロジェクトの活動内容をどれくらい深く理解しているか、メンバーに対してどのような配慮ができているか、プロジェクトの活動を推進していく行動力を備えているか等、こうした多面的多層的な評価をお互いに行っている。ただし、学習者はそれを評価活動だとは認識していない。しかし、それは間違いなく、自己評価であり、相互評価なのだ。こうした節目ごとにお互いを適切に評価し合い、自分自身が進んで役割を引き受けることができるようになれば、信頼に応えようとする責任感が身についていくことになる。

以上のように、PBLは、プロジェクトのなかで自分自身とチームの活動に対する自己評価と、メンバー間での相互評価を日々のプロジェクトの中で繰り返しており、そうした評価活動を内在した教育プログラムと言える。その意味で、学生は日々の活動の中で評価力を鍛えていくことにもなる。ここでは、学生は評価されるだけの存在ではなく、むしろ、評価する主体であることを忘れてはならない。

PBLとポートフォリオ

こうした学生による自己評価と相互評価をどのように把握することができるのか。大前提として、学生のプロジェクト活動の可視化が必要になる。そのためにはデジタルポートフォリオが有効である。ちなみにデジタルポートフォリオは、できるだけ多くのファイル形式に対応した掲示板がもっともシンプルなフォームであり、それでじゅうぶんに機能する。ポートフォリオの作成の目的は、個人の学習履歴の記録と保存と整理である。それによって、学習者が自らの学びについて、メタ認知を得ることにある。学習履歴をたどることによって、試行錯誤のプロセスから成功因子と失敗因子を分析して、自ら学びを再構築していくことにある。

元来、PBLでは、モチベーションの維持と情報共有、時間管理がもっとも重要であるが、チーム学習にポートフォリオを入れると実にうまく機能していく。ただし、PBLでは、個人とチームの両方の学習履歴の記録・保存・整理に活用される。議事録・活動記録・報告書・企画書等、活動期間に作成されたすべての書類やデータがポートフォリオとして残される。なお、ここで重要な点は、ポートフォリオがチームメンバーに限らず、他のチームにも公開されていることである。いわばネットワーク型ポートフォリオと言える。議事録も活動記録もすべてが公開されて、それらを自由に参照し合うことができることである。ちなみに同志社大学プロジェクト科目では、CNS（コミュニティ・ネットワーキング・サービス）を開発・運用している。

議事録や活動記録に対するコメントが、記録した学生本人に対する温かいフィードバックとなり、お互いの信頼関係を強化していく。チームメンバー同士の間にしだいに信頼と期待、励ましと癒しをもたらすようになっていく。ただ、強制したり、義務づけるのではなく、ポートフォリオを公開していくことによって、個人の学習履歴としてのポートフォリオから、ネットワーク型ポートフォリオへ質的な転換が起っているとも言える。このネットワークを機能させているのは、ほかならぬ学生自身なのだ。

ネットワーク型ポートフォリオによって、学生は自分たちのコミュニティを深化させていくとともに、それを学びのコミュニティ、チームのコミュニティへと展開していく。そうしたプロセスがポートフォリオによってお互いに共有されるとともに、自らの学びの総体を把握しようとするようになる。教員は、そうした記録を通して、授業外学習の貴重な学びを把握することができるようになる。現在進行形のネットワーク型ポートフォリオによって、そこに立ち会っている全員が、いわばプロセス評価の視点を持つことになる。

最終成績会議

成績評価のための会議を開催するのも、PBLを通して学生が身につけた評価力を評価するために有効な方法であろう。以下の自己評価表の項目についてデジタルポートフォリオにアップロードしておき、参照し合った上で、全員参加の成績会議でアピールして、相互評価を受ける。役割に応じたグループで何度か相互評価を繰り返し、その結果変更が生じた場合には、全員に変更の根拠を示して、変更申請をする。最終成績

を、デジタルポートフォリオにアップして自己評価・相互評価の成績会議は終了する。

1)	あなたは、このプロジェクトを遂行するために、何時間の時間を要しましたか（200字）。
2)	あなたは、プロジェクトのなかでどのような役割をはたすことができましたか（400字）。
3)	あなたは、もう一度最初から、このプロジェクトを始めるとすれば、どのような点に留意しますか（400字）。
4)	あなたは、このプロジェクトを通して、何を学ぶことができましたか（600字）。
5)	あなたにとって、このプロジェクトは、今後の人生にどのような影響をあたえると考えますか（400字）。
6)	あなたは、本プロジェクトチームの成果を何点と評価しますか（100点満点）。（200字）評価のポイントもあわせて記入してください。
7)	あなたは、自分自身のプロジェクト活動を何点と評価しますか（100点満点）。（200字）評価のポイントもあわせて記入してください。

プロジェクトの遂行のための所要時間は、プロジェクトのクオリティに深く関連する。春・秋連結型授業の場合、100時間程度がひとつの目安になる。さらに200時間程度で熱心な取り組みとなり、それ以上の時間をかけたプロジェクトは一定度の水準を超えたクオリティを獲得する。なかには1000時間を越えるケースもある。半期であればその半分が目安である。

最終的に、こうして得られた自己評価の点数と担当者の評価の点数はほぼ合致してくる。学習者の評価と担当者の評価が相関してくることになる。まさに学習者自身の評価力がプロジェクトを通して身についたことを示しており、自立的・自発的に学ぶPBLの学習態度を習得できたことになる。ここで、評価活動を通して、自己批判・相互批判の力がついてくることにも注目したい。

アウトプットとプロセスのバランス評価

評価は、ポートフォリオによるプロセス評価と成績会議の結果をベースに、アウトプット評価をあわせて総合的に評価することが望ましい。両者のバランス評価がPBLの評価になる。PBLでは、アウトプットはさまざまな形式をとる。

アウトプットの成果物（提言書・報告書・展示・イベント・報告会・競技会・WEBサイト等）、成果に対する個々の評価（専門家や協力者の講評・アンケート・意見・質問・マスコミ取材や記事等）、成果報告会での評価（プレゼンテーション・総評・個別講評・質問・受賞等）等が、参照資料となる。

プロセス評価では、授業時間内の動的観察評価（授業・現場）を中心に静的観察評価（授業・現場のビデオ記録）や継続的にアップロードされる議事録・活動記録・報告書・企画書等のチームと個人のポートフォリオが参照資料となる。

これらのアウトプットとプロセスが学習者にとっても評価の視点を自ら身につけていく絶好の機会であり、そうした学習者の自己評価・相互評価が成績評価をする担当者の貴重な資料にもなっていく。担当者も学習者とともに行動する視点を意識しながら、それらの学習者の評価を組み込んだ総合的な評価法を模索していくことが重要であろう。

PBLの導入にむけて

—自由・若さ、そして感動…教養教育PBL—

PBL推進支援センター副センター長・プロジェクト科目検討部会委員・理工学部教授 金田重郎

1. 教養教育PBLの特異性

PBLは看護学・医学の分野で生まれた [1]。PBLは、専門教育のための方法論である。学生は、専門的分野における具体的な課題を解決し、そのプロセスを通じて、基礎的専門知識を総合化して活用することを学ぶとともに、それぞれの基礎的専門知識への理解を深めてゆく。専門教育PBLは、将来の仕事を模擬しており、受講内容の必然性は担保される。反面、目的・内容はあらかじめ決まっていて、自由度はない。毎年、似たようなことをカリキュラムとして繰り返す。その意味では、現実社会に入って問題解決でもない限り、その活動は「感動」までは立ち行かない [2]。

これに対して、同志社大学プロジェクト科目は「教養教育PBL」である。教養科目ということは、学生達は「基礎的専門知識」を持たない。教養教育PBLとは、「素人集団」が、1) 思い出づくりをやりたいか、あるいは、2) 就職活動のアピールに使うことを期待して、社会的経験をするために、集まって来る場である。専門教育PBLの見方からすれば、これは最初から自己矛盾・自家撞着である。総合化すべき専門的知識もなく、学生達が集まっている。帰結として、以下のようなことが起きる。

- (1) 学生達は、相互に顔も知らない。急に「友達になれ」と言っても無理である。現代の学生は携帯電話やSNSを通じて、多数のコミュニティに同時に参画し、「空気を読みながら」活動している [3]。見知らぬ学生達相手に本音を語るのは危険である。簡単には「仲間」にはならない。しかし、「コミュニティ」が出来上がらないと、プロジェクトは動き出さない。
- (2) 集まっているのは「素人集団」である。集まって知恵を絞っても「若者らしい斬新な考え」など出るはずもない。「若者の新しい視点を生かして」はオヤジ達の美しい誤解である。素人集団から出てくるものは「子供だまし」となる。それでは、「思い出づくり」になるはずもない。
- (3) では、どうしたら「感動」や「思い出」になるのか。簡単なことである、「一定のクオリティを超えた企画」を実現すればよい。そもそも、優れた芸術とは、「この世のものではない」クオリティを持っているのではないのか。名作の絵、あるいは音楽を前にするとき、著者はそのような感覚を持つ。「これはこの世のものではない」と。しかし、プロジェクト科目を支えているのは、「素人集団」である。「この世になかったもの」を現出させようとすれば、週1回の講義や学生だけの多少のMTG（ミーティング）で実現できるはずもない。負荷が極めて重くかかる結果となり「意見の衝突」を生むレベルの活動をしない限り、「この世のものではない」は出てこない。

以上のように見ると、教養教育PBLでは、必然的に、1) 「子供だまし」でお茶を濁すか、2) 意見の衝突を乗り越え、「この世になかったもの」を目指すか、その一線上のどこに落とすかが大きな課題となる。

2. プロジェクト科目と企業・NPOの立場

同志社大学プロジェクト科目では、科目担当者が外部から公募されている。このことが別の側面を生んでいる。しっかりした企画を立ててこられるのは、企業やNPOから派遣された方が多い。それはそれで、大学にとって、ありがたい話である。しかし、企業やNPOには「しがらみ」がある。そもそも、週1回社員を1年間派遣するとなると、年間数百万以上の経費支出となる。そうであるなら、「組織として得るもの」がない限り、科目担当者を派遣する決心はつかない。まあ、1～2年はメセナで続いても、それ以上、長続きはしない、NPOも同様である。NPOにはNPOの活動目的がある。

したがって、企業・NPO派遣の科目担当者が指導するプロジェクトでは、その活動目的や活動内容に一

定の「足かせ」がかかる。このことを著者は否定するものではない。現実社会を変えてゆくのは、グリーンコンシューマではない。メセナでもない。ビジネスとしてその活動が社会に足をつけていない限り、永続することはない。企業メリット、NPOメリットを追求することは、公募形式の教養教育PBLにおいては、必要なことである。

しかし、「足かせ」は「足かせ」である。やるべき目的、やるべき内容は最初から決まっている。そうになると、どうしても、学生側からすれば、「労力を提供しただけ」との感覚を持ちやすい。学生が労働力を提供して、就職活動のためのアピール内容を買っている側面が生じる。一方で、企業側は、学生の活動を通じて、今の若者に対する深掘りしたマーケティング調査が可能となる。ギブアンドテイクはうまく回っているとも言える。

ただし、上記のような目的性のあるプロジェクトでは、学生の自主性や自由な活動は一定の枠をはめられる。たとえば、スポーツイベントを開催するとして、開催方法などに一定の工夫の余地はあるだろうが、やっていること自体、すでにどこかで開催されたイベントを大幅に変えることは難しいだろう。いや、スポーツの振興を考えれば、毎年、同じようなイベントを開催することがむしろ社会的要請である。そうすると、与えられたことをいかに頑張るかと言うような「プロジェクト」になる。それは、「若者の感性を生かした取り組み」と言ってよいのか、大いに迷う。

いまの学生は、数多くのコミュニティを持ち、それを消費しながら学生生活を送っている [4]。学生が期待するのは、「そこそこ、自分のアイデアを出せて、思い出となるような楽しいプロジェクト」であるように思われる。つまり、「そこそこの関わりで楽しめる」ことを期待している。それは、現実には大きな誤りである。前述したように、「子供だまし」を仲良しクラブでやるか、「意見の衝突」の向こうを目指すかの選択線上にしか、ソリューションは無いからである。



図1 プロジェクト科目「心ぬくもる『絵本』に出会う～絵本ソムリエ・プロジェクト～」から（2011年12月京都市内・新風館にて）

3. 自由・若さ、そして若気の至り

著者は、同志社大学において、この数年、上野康治先生のプロジェクト科目におつきあいをさせていただいている。上野先生のプロジェクトでは、学生達は、秋学期にメインイベントを開催している。今でも、目の前に過去のメインイベントのシーンが目に浮かぶ、皆で廃物から作った灯籠が作り出すモニュメントのきらめき。絵本を楽しみ、見直してもらおうための異空間、どこか、「この世のものではない」クオリティを持っていた。それが心に残っている。

おかしな話である。「素人集団」であり、「子供だまし」しか出てこない筈の学生である。それが、「感動」を与える。毎年そうであるが、素人集団が集まっても、つぎつぎアイデアが出るなんてことはない。むしろ、他人を警戒して、なかなか誰も意見を言わないミーティングとなる。「若者らしさの出たイベント」などまったく出てこない日が続く。

上野先生のプロジェクトは、企業やNPOのしがらみを持たない。完全な自由がそこにはある。「学生がある特定の目的のために使われる」ことはない。結果的に、「足かせ」とは別の問題が生じる。ソリューションが見つからない。何やってよいのか全く分からない。「子供だまし」的「思いつき」しか出てこない。そ

の意味では、春学期は助走期間となる。良くて、学生自身が顔見知りになるくらいであろうか。ただ、顔見知りになれるかどうかは、「見ず知らず」の集合体としては大きい。単に飲み会をやれば、「仲間」になれるわけでもない。春学期にミニイベントを企画して実行する中で、「仲間」となってもらえない。

最近の学生さんで気になるのは、なかなか自分からは動かないことである。この傾向は、この数年で顕著となった。したがって、上記の春学期のミニイベントでも、ほっておいて、アイデアが出てくるものではない。さりとて、あまり具体的にこれをやれというのもまずい。学生は使われるだけになる。方向性や方法論を示しつつ、出てくるアイデアに対してアドバイスすることくらいしか、科目担当者はできない。

ただし、不思議なのは、この後である。

何かのタイミングで、学生達は自ら走り出す。科目担当者の思いを超えて！である。はっきり言って、「若気ゆえの暴発」である。学生達にとってみれば、お互いに議論するなかで、「これやるしかない」みたいなものが見える「瞬間」があるのであろう。科目担当者としては、「そんなことプロはやらんよ！できるの?!」と言いたくなる企画が提起される。もう、歯止めは効かない。学生達は、「やらされ仕事」ではなく、主体的な活動として、走り始める。ただし、学生達は楽ではない。なぜなら、「この世のものではない」レベルにならないと感動がないからである。しかし、なぜか、突っ走り始めるのである。ここで初めて、「若者らしいアイデア」が現出する。

結果として、秋学期のイベント（メインイベントと呼んでいる）では、本当に「心に残る」イベントが何度も開催されてきた。ただし、疑問は尽きない。1年間やったとて、所詮、「素人集団」である。「若気の至り」があったとしても、なぜ、「この世のものではないもの」が現出するのか。

気づくことは2点ある。

これは、確信はないが、「プロが手を出さない異空間を学生は作り出してきた」ということである。「プロはやらない」というのは、プロがやると手間がかかりすぎるからである。ただし、それでも、疑問は残る。なぜ、感動を呼ぶレベルのクオリティのイベントが開催できるのか。

ひとつ言えるのは、実際には、学生（＝素人）だけでやっていないという事実である。学生達のわがままを聞いて、それをサポートしていただける「理解ある協力者」がいつもおられたように思う。具体的には、家具工房だったり、園芸屋さんだったり、「学生さんがせっかく頑張っているから」と、学生の情熱に押され、技術や場所を提供してきていただいている「プロ」がおられる。文化都市「京都」の強みである。地域社会には深く感謝せねばならない。学生がそのような認識できているかどうかはわからないが。

上記の立場は、企業やNPOから派遣されている科目担当者も同様なのではないだろうか？プロジェクトマネジメント方法だけを身に付けて、「学生のパワーを使ってプロジェクトをやらせれば、新しいものが出てくる」と言うのは幻想ではないだろうか。「この世のものではないもの」を学生達が作り出すには、何かの、技術、場、あるいは協力者を提供する覚悟が、企業・NPOにも必要なのではないだろうか。企業・NPOの立場からすれば、ビジネスの成立は重要である。しかし、そこにとどまれば、「この世のものではないもの」は出て来ないのではないか。ある意味で、企業・NPOが主催するか否かにかかわらず、科目担当者には、「若気の至り」への理解が重要となる。ただし、基礎的な専門知識もPBLの経験もない学生が相手であるが。

4. おわりに

教養教育PBLとは、「学生さんを集めると、前向きに次々、若いアイデアが出てくる」様なものでは決していない。科目担当者は、大きな方向性は示さねばならない。そして、学生の主体性を見守り、そして、最後に「若気の至り」の実現を支援する体制を準備しなければならない。教養教育PBLで一定のクオリティを担保することは、科目担当者にとって、決して楽なことではない。ただし、最後にお断りしておく。「この世のものではないこと」の実現には、公式にはあくまでも週一回のプロジェクト科目では、はっきり言って、限界がある。「子供だまし」から「この世のものではない」直線上のどこに落とすかは、それぞれに考えて

いただく必要があるのではないかとと思われる。なお、本稿は、同志社大学プロジェクト科目担当・上野康治先生の示唆によっている部分があります。御礼を申し上げます。

【文献】

- [1] B.マジュンダ, 竹尾恵子「PBLのすすめ—「教えられる学習」から「自ら解決する学習」へ」, 学研, 2004年3月
- [2] 井上明, 金田重郎, 「実システム開発を通じた社会連携型PBLの提案と実践」, 情報処理学会, 論文誌, Vol.49, No.2, pp.930-943, 2007年2月
- [3] 土井隆義, 「友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル」, 筑摩書房, 2008年3月
- [4] 東浩紀, 「動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会」, 講談社, 2001年11月

事業報告

プロジェクト科目 年次別事業報告

2009年度プロジェクト科目

■京田辺校地開講科目

テーマ	開講期間	科目担当者（所属・氏名）	科目代表者（所属・氏名）
「京都企業の優秀なDNAを探る」	春	石田 正勝	生命医科学部 和田 元
からだと心のための演劇+音楽ワークショップ	秋集中	矢中 紫帆	理工学部 長岡 直人
地域（京田辺市、京都市）の 中小製造業のものづくり強化支援	秋	NPO ホンモノづくり プロデューサー開発センター 森 俊洋	理工学部 佐々木 和可緒
プロスポーツにおけるファン獲得と 地域密着のためのマーケティングリサーチ	秋	二宮 浩彰	スポーツ健康科学部 二宮 浩彰
「F1をつくろう！（2009 JSAE 学生フォーミュラーカー大会出場を目指して）」	春・秋連結	中村 成男	理工学部 藤井 透
「同志社山手」地区におけるまちづくりデザイン提案	春・秋連結	株式会社 東洋設計事務所 齋藤 篤史	理工学部 千田 二郎
エンターテインメント商材を通して学ぶ 「実践の企画・開発・マーケティング」	春・秋連結	株式会社 タカラトミー 渡辺 公貴	生命医科学部 田中 和人
夜間中学を社会に向けて発信しよう！ 夜間中学を知っていますか？	春・秋連結	次田 哲治	社会学部 浅野 健一
休耕地活用・自家菜園プロジェクト （食料自給率向上モデル特区）	春・秋連結	NPO法人 けいはんな薬膳研究所 井原 浩二	生命医科学部 渡辺 好章
スポーツイベント開催！ 学生と地域の連携によるスポーツクラブ	春・秋連結	高橋 仁美	スポーツ健康科学部 竹田 正樹

■今出川校地開講科目

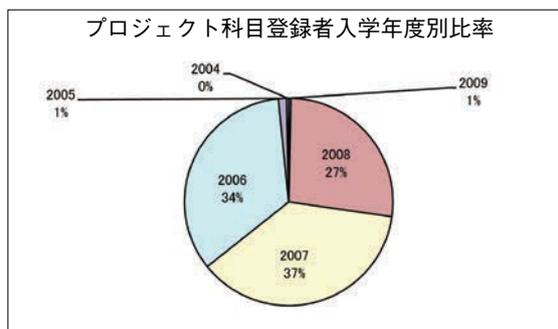
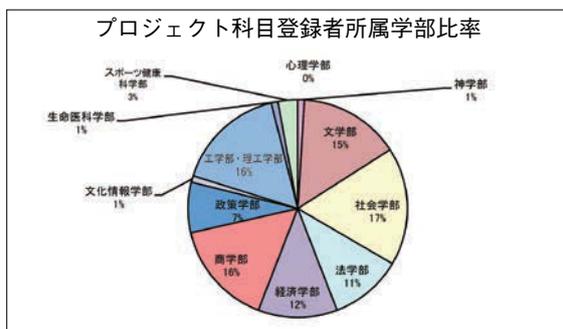
テーマ	開講期間	科目担当者（所属・氏名）	科目代表者（所属・氏名）
新京都みやげの創造/「Creation of new Kyoto souvenir」	春	株式会社 おたべ 酒井 宏彰	商学部 石川 健次郎
観光政策の最前線～みなと神戸訪日外客数アップ プロジェクト～	春	塚本 量敏	政策学部 今川 晃
「企業コンサルタント実習～社長！これが御社の課題 です～」	春	NPO法人 同志社大学産官学連携 支援ネットワーク 五島 洋	生命医科学部 廣安 知之
国際社会でのキャリア・デザイン支援プログラム	春	榎本 博之	社会学部 藤本 昌代
京都紹介Web2.0プロジェクト	秋	中伏木 寛	文化情報学部 鋤柄 俊夫
出会いを楽しめる空間づくり～遊空間のプロデュース～	春・秋連結	NPO法人 遊プロジェクト京都 上野 康治	理工学部 金田 重郎
「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト	春・秋連結	植村 照	法学部 富沢 克
私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう	春・秋連結	丸池藤井 株式会社 三甲野 春二	商学部 青木 真美
京都の伝統織物の情報発信プロジェクト	春・秋連結	日本伝統織物保存研究会 龍村 光峯	理工学部 大久保 雅史
演劇で子ども達と学ぶ 企画実践プロジェクト	春・秋連結	NPO法人 フリンジシアタープロ ジェクト 蓮行	文学部 勝山 貴之
「花のキャンパスライフ」から情報発信に挑戦、新聞、 ラジオ、ネットで	春・秋連結	田原 敏孝	経済学部 八木 匡
目指せ国民文化祭！誕生させよう京都学生文化コン シェルジュ！	春・秋連結	国民文化祭京都府実行委員会事 務局 青柳 良明	文学部 山田 和人
わらべ歌遊びを通して子ども達に京のこころつな げるプロジェクト	春・秋連結	株式会社 空 遠藤 正彦	文学部 余語 真夫
地域福祉に貢献する施設を作ろう 小規模多機能施 設開設に至るまで	春・秋連結	社会福祉法人 京都福祉サービス 協会 堀 善昭	社会学部 上野谷 加代子

2009年度プロジェクト科目 登録者数データ

■プロジェクト科目所属学部・年度別登録者数（履修中止後）

学生所属学部	2009	2008	2007	2006	2005	2004	合計
神学部			2	1			3
文学部		6	15	24	1		46
社会学部	1	10	24	19			54
法学部		7	15	10	1		33
経済学部		10	18	8			36
商学部		9	24	13	1	1	48
政策学部		12	7	4			23
文化情報学部			1	2			3
工学部・理工学部		17	8	24	1		50
生命医科学部		3					3
スポーツ健康科学部		9					9
心理学部							0
合計	1	83	114	105	4	1	308

※早稲田大学交換学生（社会1名）は、2009年度生に算入

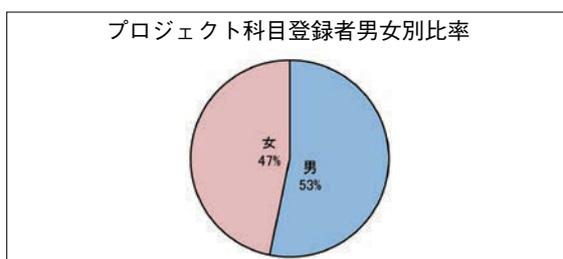


■プロジェクト科目所属学部・男女別登録者数（履修中止後）

学生所属学部	男	女	合計
神学部	3	0	3
文学部	13	33	46
社会学部	19	35	54
法学部	15	18	33
経済学部	23	13	36
商学部	28	20	48
政策学部	7	16	23
文化情報学部	3	0	3
工学部・理工学部	47	3	50
生命医科学部	2	1	3
スポーツ健康科学部	4	5	9
心理学部	0	0	0
合計	164	144	308

男 (%)	女 (%)
100.0	0.0
28.3	71.7
35.2	64.8
45.5	54.5
63.9	36.1
58.3	41.7
30.4	69.6
100.0	0.0
94.0	6.0
66.7	33.3
44.4	55.6
0	0
53.2	46.8

※早稲田大学交換学生（社会1名）は、2009年度生に算入



2009年度プロジェクト科目 事業報告

2009年度プロジェクト科目 春学期CNS説明会

京田辺校地 2009年4月23日(木) 10:45～12:15 情報メディア館405番教室
 16:45～18:15 情報メディア館202番教室
 今出川校地 2009年4月24日(金) 10:45～12:15 弘風館21番教室
 16:45～18:15 弘風館21番教室

本年度より、プロジェクト活動のより一層の円滑化を図るために全科目CNSを利用できる体制を整えました。両校地それぞれ時間を2回設け、CNS利用方法などを説明しました。

2009年度プロジェクト科目 会計講習会

今出川校地 2009年5月11日(月) 12:25～ 弘風館5階会議室
 京田辺校地 2009年5月12日(火) 12:25～ 副業館2階第1会議室
 両日にわたりプロジェクト科目会計講習会が開催されました。経理等執行の取扱いに関しては、学内規定および本科目の活動に基づく会計手続きを行なうていただくため、会計担当者を対象にプロジェクト科目における会計処理のすすめ方や学内規定にあわせた授業運営費支出内容などについて事務局から説明がなされました。



会計講習会の様子

2009年度プロジェクト科目 第1回講習会

2009年6月11日(木) 16:45～18:15 今出川校地 クラーク・チャペル
 「ビジネス展開の背景にあるプロジェクトマネジメントについて」
 プロジェクトベースで進めたビジネスの実例について、プロジェクトに必要な成功要素とは、プロジェクトを支える組織・人材とは、ビジネス実践の現場からの学生への提言について講習を受けました。



プロジェクト科目 第1回講習会

2009年度大学間合同成果報告会

2009年6月13日(土) 13:00～17:30 同志社大学東京オフィス 大セミナールーム
 本学が2006年度に採択された現代GP事業の一環として合同研究を進めてきた「PBL研究会」の中で生まれた企画で、このたび、ようやく実現に至りました。
 本学プロジェクト科目と同様にPBL型教育を正課科目に採り入れている東京電機大学、専修大学とともに各校2チームずつが参加し、各大学より個性的なテーマとレベルの高い活動内容のプレゼンテーションが行なわれました。
 (2010年度以降はPBL推進支援センター事業として開催を継続しています。)

2009年度プロジェクト科目 春学期成果報告会

京田辺校地開講科目 2009年7月23日(木) 13:00～ 夢告館102番教室
 今出川校地開講科目 2009年7月24日(金) 13:00～ 明德館21番教室
 両日にわたり2009年度プロジェクト科目春学期成果報告会が開催されました。自分達のプロジェクトの活動内容そのものや進捗状況を客観的に検証しあえる貴重な機会となりました。従来に比べてきれいなレイアウトのパワーポイントや動画を用いたプレゼンテーションもずいぶん増え、凝ったものになっていました。プレゼンテーション力もプロジェクト科目で身につけてほ



春学期成果報告会(今出川校地)

しいスキルのひとつであり大変喜ばしいことでした。

2010年度プロジェクト科目 公募説明会

2009年9月12日（土）9：30～11：00 京田辺校地 夢告館102番教室
14：00～15：30 今出川校地 明德館1番教室

2010年度プロジェクト科目公募について、山田和人プロジェクト科目検討部会長による科目の趣旨説明、事務局側からは応募要領の説明を行いました。両校地とも企業、個人、NPO団体から多くの方が参加され、質疑応答でも授業のアウトプットに関する質問や、授業曜日の設定、科目代表者との連携、授業運営費、学外活動のことなど、授業運営全般にわたる質問が会場から相次ぎ寄せられました。

2009年度プロジェクト科目 秋学期CNS説明会

今出川校地 2009年10月6日（火）12：20～13：50 弘風館21番教室
15：00～16：30 弘風館21番教室
京田辺校地 2009年10月7日（水）15：00～16：30 情報メディア館206番教室
16：45～18：15 情報メディア館206番教室

今回も春学期同様に説明時間を各校地それぞれ2回設けて秋学期CNS説明会が行われました。秋学期授業開始にあわせて携帯電話機能が付加され、画面も見やすくなり、さらに使いやすさが追求されました。

2009年度プロジェクト科目 第2回講習会

2009年11月19日（木）16：45～18：15 今出川校地 弘風館31番教室

「レイアウトの極意 魅せる企画書・デザイン」 講師：アインズ株式会社 企画部デザイナー

前半は企画デザイナーの目線で情報伝達の極意をレクチャーしていただきました。パンフレットのレイアウトを体験するワークショップを取り入れた講習内容で、出来上がった作品をプロのデザイナー目線で講評していただくなど、大いに盛り上がりました。プロジェクト科目ではイベント案内などでチラシを作る機会も多く、活動に役立つスキルアップの機会となりました。後半は各プロジェクトから活動内容の紹介やイベント情報の発表など、情報交換会を行いました。

2010年度プロジェクト科目 科目担当者・代表者説明会

2009年12月19日（土）10：00～ 今出川校地 至誠館3番教室
14：00～ 京田辺校地 夢告館101番教室

学内外から多くの応募がありましたが、本科目の趣旨と目的に相応しいテーマとして、京田辺校地開講科目9件、今出川校地開講科目15件の合計24件が2010年度プロジェクト科目として採択され、次年（2010年）度の科目担当者・代表者を対象に①プロジェクト科目の趣旨 ②授業の流れ ③評価方法について ④その他留意事項について、説明会が開催されました。

2009年度プロジェクト科目 秋学期学生懇談会

2010年1月16日（土）12：30～14：00 今出川校地 有終館第1会議室
各プロジェクト科目受講生の代表が、活動を通じて体感したプロジェクト科目の良い点・悪い点や、リーダーとしてメンバーをまとめることの難しさなど、自分たちの活動を振り返って意見交換を行いました。



学生懇談会の様子

2009年度プロジェクト科目 秋学期SA/TA懇談会

2010年1月23日（土）11：00～12：30 今出川校地 徳照館会議室

2009年度より初めて開催されたSA/TA懇談会では、受講生と担当者の間をとりもつSA/TAならではの視点から感じたことや悩み、苦勞した点などについてたくさんの思いが述べられ、普段あまり聞くことのできなかった貴重な意見を得ることができ、プロジェクト科目運営の上で大変参考になる懇談会となりました。

2009年度プロジェクト科目 秋学期成果報告会

京田辺校地開講科目 2009年1月25日（月）
13：00～16：00 夢告館102番教室
今出川校地開講科目 2009年1月26日（火）
13：00～16：30 明德館21番教室

両日それぞれの開講校地において2009年度プロジェクト科目秋学期成果報告会が開催されました。

京田辺校地では秋学期集中科目1科目、春秋連結科目8科目の合計9科目、今出川校地では秋学期科目1科目、春秋連結科目9科目の合計10科目が一年間の活動報告を行ないました。春学期の試行錯誤が、秋学期の活動を通してプロジェクト内容の質的な向上につながった様子で、大きな飛躍がみられました。



成果報告会（京田辺校地）



成果報告会（今出川校地）

2009年度プロジェクト科目 秋学期科目担当者・代表者懇談会

2010年3月6日（土）11：30～13：00 今出川校地 光塩館会議室

2009年度一年間のプロジェクト活動を終えて、受講生の成長の様子や事務局への要望など、今後のプロジェクト科目運営につながるたくさんの意見がきかれました。



科目担当者・代表者懇談会

2010年度プロジェクト科目 先行登録説明会

2010年3月27日（土）10：00～ 今出川校地 寧静館31番教室
13：15～ 京田辺校地 知真館2号館202番教室

2010年度プロジェクト科目の登録説明会および先行登録を行いました。説明会終了後、科目ごとに志願票を提出し、科目担当者・代表者による選考が行われました。後日選考結果が発表され、引続き日程に沿って再募集の選考を行い、2010年度は京田辺校地9科目、今出川校地13科目、合計22科目の開講が決定されました。



個別選考の様子



先行登録説明会（今出川校地）

2009年度プロジェクト科目 講習会アンケート 【抜粋】

《第1回》「ビジネス展開の背景にあるプロジェクトマネジメントについて」 2009年6月13日(土)

【学生】

- ・自分が何をしたいかの意思を明確に持ち、それに従いながら視野を広げたいと思った
- ・仮説・実行・検証のステップはプロジェクトを進める上で不可欠であることを再認識した。「何が原因で失敗したのかをきちんと検証することが大事」ということを、プロジェクトを進めるときに限らず、大学生活の中でも検証しながらスキルアップにつなげたいと思う
- ・「重要なのは<アイデア>ではなく<現状>と<目標>のギャップを埋めること」という言葉が印象に残り、どのようなことをするにしてもベースにあるべきものは同じであるという事を学んだ
- ・AsIs→ToBe→ToDoというプロジェクトの進め方、また仮説をたて実行し結果を検証するという流れを実際に今自分が進めているプロジェクトに反映していこうと思う。特に私たちは「ToBe」が少しまとまっていないことに気がつかされた。ありがたいビジョンを皆に提案し、共有することはプロジェクトを進める中で一番難しく大切な部分であると思う。今日の話参考に原点に戻り、皆とコミュニケーションを上手くとりながら良いものを企画提案していきたい
- ・私のプロジェクトはすでに始動しているが、目標の共有が上手くできていないように感じていて、今日の話聞き、再度話し合いの場を設けてより活性化させていくべきと感じた
- ・数値化されたゴールを常に共有することがプロジェクトにおいて大事であると理解した
- ・マーケティングの基本的知識をはじめとして、それ以上に参考になったところが大きかった。学生向けの提言や最後の社長の言葉など特に心に響き、来て良かった
- ・会社の中で実践してこられたプロジェクトを管理するノウハウをきけたことは良かった。4回生の自分にとって、研究や次年度からの社会人生活の中で実践にうつしていけるよう頑張っていきたいと思う。また質問の中でも、プレゼンテーションについてのアドバイスや、1時間の発表における自分が感じたものがプレゼンという伝える事について改めて考えることができた
- ・現状分析→理想像・予定→差の確認→やるべきことの抽出という目標を区別するための流れを知ることができて良かった

【教員・その他】

- ・政策学部でPBL教育を教えている関係で参加したが、大変有意義な講演会だった
- ・私は2008年度プロジェクト科目に参加したが、今回のお話を聞かせていただいて過去を振り返り、ビジョンの大切さをあらためて実感した

《第2回》「レイアウトの極意 魅せる企画書・デザイン」 2009年11月19日(水)

【学生】

- ・ワークショップを通じてデザインの持つ表現力、大切さを実感した。一つ一つのデザイン全てに意味があるということを知った
- ・身近にある広告の工夫や、他のプロジェクトのプレゼン能力に刺激をうけた
- ・デザインを考える時間が10分しかなくて少なく感じたが、時間の制約があるからこそ生まれるアイデアもあると感じた
- ・ワークショップ型ということで、新鮮だった。自分はやっぱりアートな人間だという再発見につながった

- ・実際にレイアウトとかをすると、難しいなと思った
- ・他のプロジェクト科目の方々とも、非常に少ない時間だったが情報交換ができてよかった
- ・プロジェクトを行う上で、その成果や活動を告知しなければいけない場面に大いに役立つと感じた
- ・1つの広告を作るにも、様々な角度からマーケティングを行っているということがわかり、びっくりした。実際にデザイン体験をしてみて少しでもデザインの現場を体験することができ、とてもいい経験になった。宣伝・広報を担当しているので、今後活かしていきたい
- ・デザイナーの方に、作品の紹介とプロセスを説明していただけたのが良かった
- ・今日、デザイン案を自分たちの班で試してみても自分なりに伝えたい事などを考えたつもりだったが、考えが足りなかったなと感じた
- ・班の皆と考えて、作ったデザインを後でプロの視点から評価してもらい、プロとは考えの深さが全く違う事が良く分かった
- ・今まで触れていた身近なものの、デザイン、レイアウトがどのような思惑や意図があって、最終的に私達が見る形になるのかを知れ、とても面白いお話しが聞けた
- ・グループでカタログのデザインを考えるという作業では、1人でイメージを考えて作るのちがって、試行錯誤ができ、かぎられた時間の中で集中して作ることができたので面白かった
- ・今後自分がものを作るときに、見る人に対してどう訴えるかの参考になった
- ・今後もこういったイベントに参加していきたい
- ・ピラを作る際、今まで意識した事がなかったような事ばかり教えていただいた
- ・人に見てもらおうためのものを作るプロジェクトなので、とても参考になった
- ・とても有意義な時間だった
- ・日頃無数の宣伝広告などを目にしていながらもほとんど注意を払っていないことに気付かされた。スーパーに入っても、少し店頭のPOPなどを見る視点が変わりそうだ
- ・作業をするにあたってこちらから伝えたいことだけではなく、手に取る人のことを考えて（例えばラックにかかっているけど最終段であったときの場合等）作らなければいけないということを実感した
- ・私は今日、初めてワークショップを経験した。時間内に商品のストロングポイントをよりよく見せるのは非常に難しく感じた。また、プレゼンテーションをする上で、抑揚をつけたり、リズムをつけるなど、以後気をつけてやっていかなければならないな、と感じた
- ・スーパーのポスターで店内の上では「感謝祭」と大きな情報、商品に近づくにつれ詳細な情報へと伝えるフェーズごとに伝えるべき情報があるというのは興味深かった
- ・自分のプロジェクトでは車両を作るため、各部品をスポンサー提供してもらうことで成り立っている。プロジェクトでよく企業様に企画書、月報等を送っているので今回の魅せる企画とはまさに今必要な知識だったので来てよかったと思う

【教員・その他】

- ・人を魅きつける紙媒体の大切さと、すばらしさを学べて非常に良かった。学生とのワークショップにも参加できて、勉強になった。他のプロジェクトの学生さんとの交流もできる、こういった機会は非常に良い

2009年度プロジェクト科目 授業アンケート（京田辺・今出川）【抜粋】

《学生編》

この科目を受講して良かったと思いますか？具体的な内容があれば、記入してください。【自由記述】

【春学期】

- ・自分のスキルを伸ばすとてもよい機会だと思う
- ・いろんな価値観を持つ人と話し合い、一つのことにまとめ上げる作業は、多角的な視点で物事を見て、何が今一番大切か、何を優先すべきかを判断することができる機会となった
- ・普段知らない世界へ踏み込む事ができ、様々な人と交流できたことがよかった
- ・企画として挙げたことを具体化する際に伴う楽しさ、困難さなど様々なことを学べた点

【秋学期】

- ・対外交渉などでメールの送り方や電話のかけ方という、社会に出て役に立つことを学べた
- ・自分の行動や言動のひとつひとつがプロジェクトの進行に大きく関わるので責任感を感じたが、それをやり遂げた事を満足している
- ・大学が全面的にバックアップしてくれているので、普段の授業と違い積極的に色々なことにチャレンジできる

従来 of 座学の講義と比べて、良かった点、悪かった点をご記入ください。【自由記述】

【春学期】

○良かった点

- ・座学とは違い学生が何かを作り上げるという点で参加意識が高まり、毎回の授業が充実していた
- ・他の受講生と話し合う機会がとても多く、座学に比べ深い関係を築くことが出来る

●悪かった点

- ・自分達が主体である為、授業がうまく進行しない時がある
- ・講義外での活動が多かったため一人一人の負担が多く、メンバー内で少し偏りが出た

【秋学期】

○良かった点

- ・座学では味わえない、行動力・決断力・団結力の3つを肌で感じられる点、大学（総務・教務・スポーツ支援課など）と連絡をとりあうことで、より密になれた点良かった
- ・実践しながらの学びだったのでたくさん問題にも直面したが、自分たちで方向性を模索したりみんなで悩んだり、実のある学びであった

●悪かった点

- ・フィールドワークなどで交通費の出費がかさむ

今後、どのような科目であれば受講したいと思いますか？

開設を希望するジャンルや具体的なテーマがありましたらご記入ください【自由記述】

【春学期】

- ・環境をテーマにした自然・生物に関するプロジェクト
- ・ジャンルに捉われず様々な社会問題の実情を自分達の足で見たり聞いたりするテーマ

- ・国際をテーマにするなら、留学生も募集して一緒に受講したい

【秋学期】

- ・絵本をつくりたい！そして、子供の教育なども学べたら面白いな、と思う
- ・地域再生プロジェクト

その他、何かご意見があればご記入ください【自由記述】

【春学期】

- ・人がどのように考え、意見を出しているかを知る事の重要性を感じた。もっと他のプロジェクト科目との交流があった方がより良いものになるのではないか
- ・学生が大学、教員、職員の方と身近に交流でき、共に活動できるこういう授業はとても良いと思う。今まで大学のことをあまり知らず、利用できていなかったことが残念だ
- ・プロジェクト科目を2年続けて受講しているので、来年も魅力的な科目があれば受講したい

【秋学期】

- ・このプロジェクト科目を通して、イベントをゼロから企画・運営することはとても大変で苦労することばかりだったが、やり遂げた達成感はいずれまでの学生生活の中で1番だった。このプロジェクトの一員になれて、とても幸せだった
- ・今後も学生の為に良いテーマのプロジェクトが行われ、同志社大学を代表する科目の一つになっていてほしい

《教員編》

学生の授業への取組みについて具体的な内容があれば、記入してください。【自由記述】

【春学期】

- ・授業時間以外にも班別ミーティングや企業等訪問取材を精力的に行い、授業時だけでは足りない時間のカバーに努めてくれた
- ・当プロジェクト科目に対する個人個人の持つ目標接近への努力と同時に、班別に設定した目標に対してチーム一丸となって協力し合い、成果達成への強い意志が感じられた

【春学期】

- ・クラブ・サークル活動を行っている学生がほとんどで、それぞれの経験に基づくノウハウを上手く出し合い、活かせていたと思う。授業外でも積極的に会議やML、CNS、スカイプでコミュニケーションを取りプロジェクトを進めていた
- ・責任感と善意を持って取り組んでいる

授業への支援体制や制度について具体的な内容があれば、記入してください。【自由記述】

【春学期】

- ・疑問に感じたりしたことなどに、事務局が適切に対応してくれている点
- ・CNSが完備されていて使い易く、メンバーと情報を共有できる

【秋学期】

- ・TAや代表の先生からの支援で大変助けられた
- ・プロジェクトの性格を把握していただき適切なサポートおよびバックアップをしてくれている

全体的に工夫すべき点や要望がありましたら、記入してください。【自由記述】

【春学期】

- ・フィールドワークなどで授業目的の為に学生に見せておきたい施設等の入場料は授業運営費から出せるようにできればありがたい

【秋学期】

- ・プロジェクト科目を受講する学生にとって役立つ講習会がいくつかあったが、もう少し早い時期に開催されると予備知識となってより高いレベルで活動に望めるのではないか
- ・特に優れたプロジェクトに関しては、継続的な科目として毎年審査ではなく複数年設置をしても良いと思う

2009年度プロジェクト科目 成果報告会アンケート（京田辺・今出川）【抜粋】

《2009年度プロジェクト科目 春学期成果報告会》 2009年7月23日(木)・24日(金)

○良かった点

- ・活動でのゴールだけでなく、プロジェクト科目としての在り方も考えて発表できた
- ・練習の甲斐があって、発表が時間内におさまったこと
- ・質問の中で数値を使った予測が大事だという指摘を受け、後期への新たな課題が見つかり良かった
- ・写真やイラストを多く使用し、言語だけでは伝えきれないイメージを伝える工夫ができていた
- ・「読む」ではなく「伝える」プレゼンだったと思う

●悪かった点

- ・自分達がどう成長したのかという点に、もう少し重きをおけばよかったのではないかと感じた
- ・質疑応答に対する対策が不十分であった
- ・発表の進め方など、メンバー全員での情報共有が不完全で準備不足だった
- ・春学期で学び感じたことをいかに今後の活動に活かしていきたいか、という部分が弱かったと思う
- ・言葉の説明に追われて、今どういう現状なのか、今後目指すものがどういうものなのかというプロジェクトの方向性を伝え切れなかった

■他の発表で、参考になった点、次回への工夫・改善点など

- ・図や表などを使い、視覚に訴えるという点が参考になった
- ・話し方ひとつでシンプルに訴えることができると実感した
- ・原稿をほとんど持たずに発表を行っていたプロジェクトのように、プレゼンにおいて臨機応変に対応できるようにになりたい
- ・読めないくらい細かい文字の資料はスライドに載せない方が良い
- ・「プレゼンテーションはこれまでの努力を100%以上に見せ、見る者におもしろいと感じさせなければならぬ」という話を聞き、プロジェクトに取り組む際の重要ポイントに改めて気付かされた

《2009年度プロジェクト科目 秋学期成果報告会》 2010年1月25日(月)・26日(火)

○良かった点

- ・自分たちの活動内容を具体的に知ってもらえた。皆でそれぞれの役割を分担して発表出来た
- ・今までの半年間の活動をまとめ、振り返る機会となった。人前で話すことで、度胸がついた
- ・一年間で取り組んだ各プロセスについて分析、検証した結果をたくさん盛り込むことができた
- ・多くの教授にプレゼンを見てもらい適切な指摘をいただき、今後まとめるという段階でとても参考になった

●悪かった点

- ・まとめの形になるリーフレットの作成が間に合わず、そこに関する具体的な発表ができなかった
- ・発表できる程、自分たちの中での振り返りが出来ていない
- ・時間配分に失敗し、このプロジェクトから得た学びや充実感にあふれた感想を伝えきれなかった
- ・後半は原稿を読むだけになってしまい、聴いてくださる方には受け取りにくくなってしまった。要点をパワーポイントなどで視覚化すればよかった
- ・報告というより、もっと「伝える」ということに重点を置いて発表できるように気をつけたい

■他の発表で、参考になった点、次回への工夫・改善点など

- ・具体的に学生たちがどのような点に悩み、改善していこうとしたかをもっと伝えるべきだった
- ・聞いている人をも巻き込むようなプレゼンというものがもっと必要だと思った
- ・プロジェクト科目の存在を知らない学生に知らせるべき
- ・事前準備の仕事の配分を全員で均等に行えるようにしたい
- ・スライドのページを変える速さや、文字の大きさが見やすいかどうか、参考になった

2010年度プロジェクト科目

■京田辺校地開講科目

テーマ	開講期間	科目担当者 (所属・氏名)	科目代表者 (所属・氏名)
インターナショナル・パフォーミング・アーツ・ワークショップ	秋集中	丹下 一	理工学部 長岡 直人
「F1をつくろう! (2010 JSAE 学生フォーミュラ大会出場を目指して)」	春・秋連結	中村 成男	理工学部 藤井 透
エンターテインメント商材を通して学ぶ「実践の企画・開発・マーケティング」	春・秋連結	株式会社 タカラトミー 渡辺 公貴	生命医科学部 田中 和人 (春) 片山 傳生 (秋)
「同志社山手」地区におけるまちづくりデザイン提案	春・秋連結	株式会社 東洋設計事務所 齋藤 篤史	理工学部 千田 二郎
「スポーツイベント開催!」学生と地域の連携によるスポーツクラブ	春・秋連結	高橋 仁美	スポーツ健康科学部 竹田 正樹
食育と健康 (自家菜園を通して薬膳を考える)	春・秋連結	NPO法人けいはんな薬膳研究所 井原 浩二	生命医科学部 渡辺 好章
ものづくり中小企業 (京都、京田辺市) の国際展開を考える	春・秋連結	NPOホンモノづくりプロデューサー開発センター 森 俊洋	理工学部 佐々木 和可緒
エコに優しい京都企業に学び、理想の環境経営を提案する!	春・秋連結	JOHNAN株式会社 中野 哲浩	生命医科学部 辻本 哲宏
プロスポーツにおけるファン獲得と地域密着のためのマーケティングリサーチ	春・秋連結	二宮 浩彰	スポーツ健康科学部 二宮 浩彰

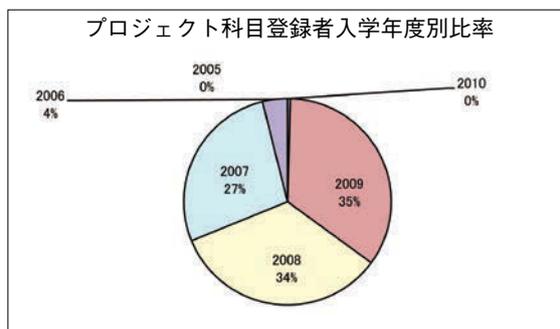
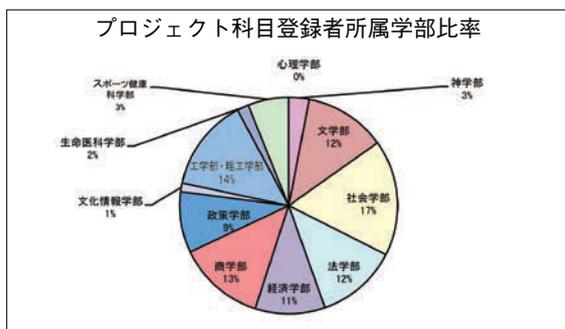
■今出川校地開講科目

テーマ	開講期間	科目担当者 (所属・氏名)	科目代表者 (所属・氏名)
新京都みやげの創造/ 「Creation of new Kyoto souvenir」	春	株式会社 おたべ 酒井 宏彰	商学部 石川 健次郎
京都紹介Web2.0プロジェクト	秋	中伏木 寛	文化情報学部 鋤柄 俊夫
夜間中学を社会に発信しよう! 夜間中学を知っていますか?	春・秋連結	次田 哲治	社会学部 浅野 健一
出会いを楽しめる空間づくり ～遊空間のプロデュース～	春・秋連結	NPO法人 遊プロジェクト京都 上野 康治	理工学部 金田 重郎
京都の伝統織物の情報発信プロジェクト	春・秋連結	日本伝統織物保存研究会 龍村 周	理工学部 大久保 雅史
演劇で子供達と学ぶ 企画実践プロジェクト	春・秋連結	NPO法人フリンジシアタープロジェクト 大橋 敦史	政策学部 山口 洋典
映像の力・若者たちの見た京都	春・秋連結	NPO 京都の文化を映像で記録する会 家喜 俊彦	理工学部 小泉 孝之
「花のキャンパスライフ」から情報発信に挑戦、 新聞、ラジオ、ネットで	春・秋連結	田原 敏孝	経済学部 八木 匡
ウィーン風成人式 「オープンバルin同志社」実現プロジェクト	春・秋連結	澤野井 信	経済学部 北川 雅章
花で生きる力を高める一花を活用する生活と 社会活動の企画実践プロジェクト	春・秋連結	NPO法人 フラワー・サイコロ ジー協会 浜崎 英子	心理学部 余語 真夫
環境教育教材作成プロジェクト 一環境マインドを持った次世代リーダーの育成	春・秋連結	財団法人 コカ・コーラ教育・環 境財団 麻生 朋子	政策学部 西村 仁志
京の台所・錦市場がつなぐ「京の食文化」を 子どもたちに伝えよう!	春・秋連結	株式会社 空 遠藤 正彦	心理学部 佐藤 豪
ソーシャル・プロデューサー養成講座 一参院選と松本清張をプロデュースせよ	春・秋連結	小関 道幸	政策学部 今里 滋

2010年度プロジェクト科目 登録者数データ

■プロジェクト科目所属学部・年度別登録者数（履修中止後）

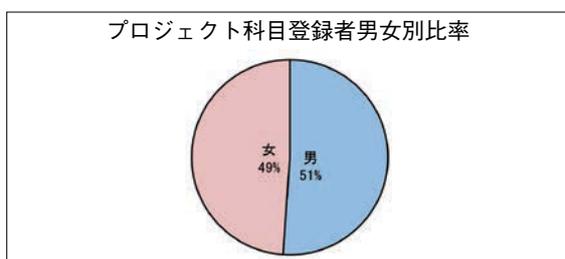
学生所属学部	2010	2009	2008	2007	2006	2005	合計
神学部		2	2	3			7
文学部		6	12	9	1		28
社会学部		20	12	7	1		40
法学部		5	12	9	2		28
経済学部		8	8	6	2		24
商学部		10	11	7	2		30
政策学部	1	13	4	3			21
文化情報学部		2	1				3
工学部・理工学部		5	7	19	1		32
生命医科学部		1	3				4
スポーツ健康科学部		8	6				14
心理学部							0
合計	1	80	78	63	9	0	231



■プロジェクト科目所属学部・男女別登録者数（履修中止後）

学生所属学部	男	女	合計
神学部	2	5	7
文学部	5	23	28
社会学部	11	29	40
法学部	19	9	28
経済学部	19	5	24
商学部	15	15	30
政策学部	6	15	21
文化情報学部	1	2	3
工学部・理工学部	30	2	32
生命医科学部	4	0	4
スポーツ健康科学部	6	8	14
心理学部	0	0	0
合計	118	113	231

男 (%)	女 (%)
28.6	71.4
17.9	82.1
27.5	72.5
67.9	32.1
79.2	20.8
50.0	50.0
28.6	71.4
33.3	66.7
93.8	6.3
100.0	0.0
42.9	57.1
0	0
51.1	48.9



2010年度プロジェクト科目 事業報告

2010年度プロジェクト科目 春学期学生担当者説明会

今出川校地 2010年4月22日(木)

13:15～15:15 弘風館21番教室

京田辺校地 2010年4月23日(金)

13:15～15:15 情報メディア館302番教室

各プロジェクト科目のリーダー、サブリーダー、会計、学生成果報告書、CNS各担当者に向けての説明会が開催されました。



学生担当者説明会の様子

2010年度プロジェクト科目 第1回プロジェクト・リテラシー講習会

今出川校地 2010年6月14日(月) 16:40～18:40 至誠館3番教室

京田辺校地 2010年6月15日(火) 15:00～17:00 知真館1号館216号教室

「伝える技術について～ポスターセッションの場合～」

講師：株式会社内田洋行 大野勝氏

パワープレイス株式会社 濱村道治氏

プレゼンテーションの実践を、第一線で活躍する営業やデザイナーのプロの目線でレクチャーしていただきました。プロジェクトの取組みをいかに正確に伝え、聴衆を惹きつけ、知的な好奇心を満たすプレゼンができるのかをテーマに、ポスターセッション形式のワークショップを通じて分かりやすく学びました。後半は春学期成果報告会開催要領説明会を行いました。



第1回プロジェクト・リテラシー講習会

2010年度プロジェクト科目 春学期学生懇談会

2010年7月14日(水) 12:15～13:15 今出川校地 有終館第1会議室

「意見交流が出来る機会がもっと欲しい!」という多くの声に応じて、懇談会は本年度から春学期・秋学期にそれぞれ1回ずつ年2回行われることになりました。

受講科目・校地は違っても、リーダーという同じ立場で共感する思いも多く、短い時間に活発な意見交換が行われました。プロジェクト活動を通して身につけた問題意識とそれを伝える対話力の高さが感じられた会となりました。

2010年度プロジェクト科目 春学期SA/TA懇談会

2010年7月21日(水) 12:15～13:15 今出川校地 有終館第1会議室

SA/TAならではの意見や悩み、苦勞を話し合うなか、他科目の考えをきくことで模索していた問題に自分なりの解答を見出す感じが感じられました。

2010年度プロジェクト科目 春学期成果報告会

2010年7月25日(日) 11:30～15:30 京田辺校地 恵道館106番教室

初めての試みとして、両校地の開講科目20プロジェクトによる合同開催の成果報告会となりました。150名を超える学生が集結してポスター発表形式で成果報告が実施されました。先に開催したプロジェクト・リテラシー講習会(6/14・15)で学んだ効果も大きかったようです。お互いのプロジェクトについて語り合い、活気に満ちたポスター発表の場となりました。

〈最優秀賞〉 『スポーツイベント開催!』学生と地域の連携によるスポーツクラブ

〈優秀賞〉 環境教育教材作成プロジェクト—環境マインドを持った次世代リーダーの育成

〈特別賞〉 花で生きる力を高める一花を活用する生活と社会活動の企画実践プロジェクト

2010年度プロジェクト科目 春学期科目担当者・代表者懇談会

2010年7月31日（土）12：00～13：00 今出川校地 光塩館会議室

両校地の科目担当者・代表者の懇談会が一堂に会して行われました。学部や学年の違うメンバーがプロジェクト活動を始めるにあたり、コミュニケーションの取り方の工夫や、担当者としての役割、プロジェクト活動自体の授業の質について等の踏み込んだ意見交換がされました。

2011年度プロジェクト科目 公募説明会

京田辺校地 2010年9月10日（金）9：30～11：00 夢告館102番教室

今出川校地 2010年9月11日（土）14：00～15：30 明德館1番教室

2011年度プロジェクト科目の公募に先立ち、プロジェクト科目公募の目的、手続き、授業実施要領等についての説明会が行われました。

2010年度プロジェクト科目 第2回プロジェクト・リテラシー講習会

2010年11月30日（火）

16：40～18：40

今出川校地 寧静館5階会議室

「伝える技術について～プレゼンテーション」

講師：シチズンシップ共育企画

代表 川中大輔氏



第2回プロジェクト・リテラシー講習会の様子

秋学期成果報告会を控えてプレゼンテーション

力について、プロ目線でのワークショップを交えて、分かりやすく、魅力的に正確に伝える技術を学びました。参加者からは「報告会だけでなくゼミの発表や社会に出て役立つ内容だった」との嬉しい声が聞かれました。また、秋学期成果報告会の説明、2010年度成果報告書要領についての説明会も併せて開催されました。

2011年度プロジェクト科目 科目担当者・代表者説明会

2010年12月11日（土）10：00～ 京田辺校地 知真館1号館107番教室

14：00～ 今出川校地 至誠館2番教室

2010年夏ごろから公募が始まり、厳正な審査を経たのち、2011年度プロジェクト科目として25テーマが採択されました。次年（2011年）度科目担当者・代表者を対象にした説明会が開催され、担当者・代表者とも授業内容について熱心な意見交換をする機会となりました。

2010年度プロジェクト科目 秋学期学生懇談会

2011年1月12日（水）12：15～13：15 今出川校地 有終館第1会議室

各プロジェクトへの質問が活発に出され、互いに積極的に学ぼうとする姿勢が見られました。一年間のプロジェクト活動を振り返り、人との出会い、目標設定、情報共有の大切さなど、活動を通じて何に気づき、何を達成することができたか、たくさんの意見が出されました。

2010年度プロジェクト科目 秋学期SA/TA懇談会

2011年1月19日（水）12：15～13：15 今出川校地 有終館第1会議室

受講生同士あるいは受講生と担当者との「間をとりもつ」SA/TAとしての役割の大切さがどのプロジェクトにも共通して述べられ、求められる役割を自然に理解し担っており、その存在の重要性を感じた懇

談会でした。

2010年度プロジェクト科目 秋学期成果報告会

2011年1月23日（日）12：30～18：30 今出川校地 明德館21番教室
 春学期に引続き秋学期も、両校地開講科目合同での成果報告会が、今出川校地において開催されました。各プロジェクトの個性を十分に活かして工夫に富んだプレゼンテーションが展開されました。休憩なしの長丁場となりましたが、最後まで多くの学生が発表に耳を傾け積極的に質問してくれ、互いのプロジェクトの成果を共有するとともに相互にプロジェクトの多様性と個性を感得したように見受けられました。

〈最優秀賞〉 「スポーツイベント開催！」

学生と地域の連携によるスポーツクラブ

〈優秀賞〉 食育と健康（自家菜園を通して薬膳を考える）

〈特別賞〉 「同志社山手」地区におけるまちづくりデザイン提案



秋学期成果報告会の様子

2010年度プロジェクト科目 秋学期科目担当者・代表者懇談会

2011年3月12日（土）12：00～13：30 今出川校地 寧静館5階会議室
 科目担当者・代表者問わず率直な意見交換が行われました。評価に関する話題に議論が集中し、有意義な機会となりました。

2011年度プロジェクト科目 先行登録説明会

2011年3月26日（土）9：45～ 今出川校地 寧静館31番教室
 13：00～ 京田辺校地 知真館2号館202番教室
 山田和人プロジェクト科目検討部会長あいさつ、2010年度科目履修生による科目紹介、事務局からの全体説明ののち、それぞれの選考会場で選考が行なわれました。

3月29日（火）10：00に結果発表、3月31日9：00から4月1日11：30まで再募集がなされ、2011年度開講科目が決定しました。



2011年度プロジェクト科目 先行登録説明会

2010年度プロジェクト科目 プロジェクト・リテラシー講習会アンケート【抜粋】

〈第1回〉「伝える技術について～ポスターセッションの場合～」 2010年6月15日(火)

【学生】

- ・プロジェクトのメンバーの中には話すことが苦手な人もいると思うが「対話型」という発表方法の利点を最大限に活かして本番に臨みたいと思った。実際にポスターセッションを行ってみて、メンバーが発表の意図を理解することが大切だと感じた
- ・ポスターセッションがどんなものか分からなかったので、今回は参加して自分でも作ることでとても理解できた
- ・説明をする為に基礎知識が足りなかった。プロジェクトでは毎回の講義、課外活動を振り返って整理しておくことが必要だと感じた
- ・時間中に何かを行うことの難しさというものを一番に感じた
- ・ポスターを使っただけのアピールというものの難しさを感じた。文字のみでなく、絵や写真等を使っただけのアピールの方法も考えるようにしたい。まず、会話のやり方を考えるのが一番早くとりかかるとも思えない
- ・他のグループのポスターを見て、学べるところがたくさんあり、参考になった（構図、色使い、キャッチコピーなど）。一番大事なのは、自分達の発表への自信だと感じたので、前期残りの授業やポスターセッションの準備の中で、自分達の考えを煮詰めていきたい
- ・実際にやってみて、自分のプレゼンの悪いところや良いところがわかり回数を重ねるごとに改善してよくなった
- ・自分達のグループで伝えたい事を共有しておくことも大切だと感じた
- ・ロールプレイングもさることながら学生自身のプレゼンを見ることができ、闘争心に火がついた
- ・ポスターセッションはパワーポイントを使ったプレゼンと違って、一枚の中に情報を盛り込むので、ポスターの中でのストーリー展開が非常に大切だと感じた
- ・ポスターセッションは、皆で、最後のプロジェクト科目の活動である成果発表会に取組むことができ、聞き手にとっても質問が出来て、相互にとってメリットが大きい発表形式だと思う
- ・ポスターセッションの手法などを伺っている時はよく理解できたが、実際にやってみるとうまく言葉が出てこなくてとまどった。特に、2人以上来られたとき、どう対応すれば良いかわからなかった。また、他の人が書いたところを自分が理解できていなくて説明できないところがあった
- ・発表側ではどうしても一方的になってしまったり、しゃべって相手の反応をしっかり見られなかったので気をつけたい。また、聞く側に立ったときはもっと積極的に参加したいと思った
- ・体験してみて、説明する難しさ、見やすいように作る難しさが分かり、自分達がしているプロジェクトの内容をまず、しっかり理解すること、説明する練習をしなければならないと感じた
- ・本物のプレゼンは熱意や情熱が伝わってきたし、声の大きさ、視線、丁寧さなど、相手のことを考えていることが分かった
- ・やれば意外とできるものだなとも感じた
- ・秋だけでなく、年中通してこのようなことが多いとやりがいもでて、生徒にも学習するものが多くなってよと思った
- ・普段はあまり、体験することのできないポスターセッションを、企業で働くプロの目を持った社会人の方に見てもらえる事もできて、貴重な体験ができた

【教員・その他】

- ・求められていることを把握し、整理しアピールできる能力を育てることが大切なことを実感できた。若い発想の流れが手に取るように解り楽しかった
- ・いかにひきつけて、説得力を持って説明できるかが大切なのだと感じた。見る側の立場でポスターを考えることの難しさも感じる

《第2回》「伝える技術について～プレゼンテーション」 2010年11月30日(火)**【学生】**

- ・場違いと感じやすい人に親しみを持たせる、というのが印象に残った。プレゼンにも他者への想像力、優しさを発揮する必要があるとわかった
- ・プレゼンって難しい！！その想いを払いのけてくれる大変わかりやすいワークショップに参加してよかった
- ・自分のプレゼンスタイルを改めて見直す絶好の機会となった。わかりやすく実用的だった
- ・新しい発見が多々あった。これをCNSで共用しようと思う
- ・プレゼンテーションというのは社会人においても必要不可欠なものなので、その極意を学べたというのは貴重な経験である。今まで演出ばかり気にしていたことを反省する
- ・今日、習ったことを活かして、成果報告会も創意工夫をして頑張りたい
- ・今まで、自分が行ってきたプレゼンが自分の中の自己満足で終わっていた、相手に伝わるという要素が欠けていたということに気づかされた。今後のプレゼンでは今日、お話いただいたことを参考にして、自分も満足し、聴衆も満足してもらえるプレゼンをおこなっていこうと思う
- ・相手の立場に立って話すという基本を知ることができてよかった。これから先、多くの発表を行うので、参考にしたい
- ・数日前に発表会をやり失敗した。今日の知識を使って次の発表会につなげたら良いと思う
- ・1月に控えるプレゼンテーションを前に、多くのポイントを学生同士の意見交換で行うというのは、大学では新鮮だった。困った時の対応策も教えていただきためになった
- ・科目の内容について伝えたいことが多すぎるので、どこを切ってどこを強調するのか考えられた
- ・初めて講習会に来たが、プレゼンというものがどういったものなのかが良くわかった。企業へ行ってプレゼンを何度もしたが、実際どうしたら良いのかもわからないまま行っていたので、今日で自分達のプレゼンの欠点がたくさんみえた
- ・今日の講習会を受けて、何が大事なのか、プレゼンの極意はある程度わかっているのに、出来ていないんだなと感心した

【教員・その他】

- ・プレゼンテーションについて、他の人と意見交換する良い機会になった。自分では思いもよらなかった考え方を知ることができたことが良かった
- ・プレゼンテーションをする機会は多いものの、自分の仕方でのいいのか、もっと良いテクニックはないか、というのは常々感じていた。今日のお話をうかがって、成果報告会にも、その後の自分のプレゼンにも活かせるコツをたくさん学べた

2010年度プロジェクト科目 授業アンケート（京田辺・今出川）【抜粋】

《学生編》

この科目を受講して良かったと思いますか？具体的な内容があれば、記入してください。【自由記述】

【春学期】

- ・自分達で計画を立て、対象に何がもっとも適切であるかを考えたり、自分達が伝えたいことは何かを考えたり、自発的な行動をとれるようになったと思う
- ・緊張感のある場でプレゼンを行うという経験ができた

【秋学期】

- ・「チャレンジ」を真の意味で体感できて「やってみなければわからない」と思えるようになった
- ・周りのメンバーの意見にハッとさせられることが多く、新しい視野を持つ良いきっかけになった
- ・礼儀や社会的基礎力を養うことができて大変満足している

従来の座学の講義と比べて、良かった点、悪かった点をご記入ください。【自由記述】

【春学期】

- 良かった点
 - ・実践でしか得られない失敗ができる
 - ・知識として学ぶだけでなく、コミュニケーション能力や行動力もつけることができた
- 悪かった点
 - ・何を学んだかがはっきりと形には表れない、成績の評価基準があいまい
 - ・自らが作り出していかなければならない授業なので、うまくいけば充実したものになるが、先が見えず不安だった

【秋学期】

- 良かった点
 - ・知識だけでなく、考える、まとめる、伝える等、社会ですぐに使える力が養われた
 - ・感謝状や依頼状の書き方、イベント企画力など、机上の勉強であればできない社会的リテラシーが身についた
 - ・自分の仕事が他の仲間にも影響を与えるので、責任を持って取り組むことができた
- 悪かった点
 - ・受講生間のモチベーションの差（積極的に活動する人、そうでない人）があったことが残念
 - ・プロジェクトでやることが山積みになり、長期休暇中他にチャレンジしたいことが出来なかった

今後、どのような科目であれば受講したいと思いますか？

開設を希望するジャンルや具体的なテーマがありましたらご記入ください【自由記述】

【春学期】

- ・広告分析、広告デザイン、講演会やコンサートを主催するプロジェクト
- ・ものづくり・まちづくりの地域活性、京都の文化にふれたもの
- ・他大学とも合同、連結したプロジェクト科目

【秋学期】

- ・マーケティング企画（買い付け→販売）、商品開発、マネジメント
- ・人と生活に関わるもの、スポーツビジネスに関するテーマ

その他、何かご意見があればご記入ください【自由記述】

【春学期】

- ・PBLを推進していこう！！
- ・科目数をもっと増やしてほしい

【秋学期】

- ・やるからには春・秋通年で設定すべき（半年だと達成度が中途半端）
- ・発表が続いたときがあり、少しだけプレゼンが上手くなった
- ・何をやるにしても準備やリサーチがとても重要であることを改めて感じた。プロジェクト科目で身につけた力を今後存分に活かしていきたい

《 SA/TA 編 》

この科目を担当して良かったと思いますか？具体的な内容があれば、記入してください。【自由記述】

【春学期】

- ・同じ学生ではあるが、TAという立場で学生を指導できることは良い経験だと思った。話し合いをしている時も「今、この学生は意見を否定されていやな思いをしているな」「この学生が言いたいことはこうだな」など学生一人一人の気持ちを汲みとってフォローすることができて、ファシリテートの能力を身につけられたのではと思っている
- ・昨年度より進化したプロジェクトの成果を知ることができたので、ポスターセッション形式の成果報告会は非常に有意義だった

【秋学期】

- ・学外の方と関わる機会が多いため、社会に出る準備になった
- ・他の授業では経験できないことばかりだった。学生が主体になって動き、一つのプロジェクトを達成する過程を手伝って、学生の成長を感じ取ることができたのが何よりも嬉しかった

従来の座学の講義の授業と比べて、良かった点・悪かった点をご記入ください。【自由記述】

【春学期】

○良かった点

- ・SAと受講生の距離が近く、相談を受けたりアドバイスできるのはプロジェクト科目ならではの利点
- ・自分たちがやりたいこと、課題に思ったことを実際に社会とつながりながらアクションを起こすことができる

●悪かった点

- ・一人一人の存在、行動の影響が良くも悪くも大きい。一人の発言で場が乱れることもあるので、学生にはより相手、状況を考えたコミュニケーションができるようになってほしい思うことがあった
- ・社会との接点の場である意識が学生側に足りない部分が課題だと感じた

【秋学期】

○良かった点

- ・社会に出てからも通用する、様々な能力を身につけることができる
- ・自らが設定した目的に主体的に取り組むことで、自分達のしようとしていることの本質を理解しやすくなり、考える力が養われたように感じた

●悪かった点

- ・プロジェクトではなく「授業」という点で考えると、頑張りに対して単位数が少ないように思う
- ・集団で行動を共にすることで意識を共有し円滑に進む点もあったが、その共有方法が不十分だった

今後、どのような科目であれば担当したいと思いますか？

担当を希望するジャンルや具体的なテーマがありましたらご記入ください。【自由記述】

【春学期】

- ・普段まったく関りのない人同士につながりを持たせられるテーマ

【秋学期】

- ・地域・大学（京都）の情報発信、コミュニティの形成、「自然」がテーマの科目

その他、何かご意見があればご記入ください。【自由記述】

【春学期】

- ・このプロジェクト科目では、教員、教務課（事務局）、TAの三者が連携して授業運営ができ、内容としても濃いものになったと思うし、TAとしても良い経験を積むことができた
- ・プロジェクト科目を学外に向けてもっと発信していきたいと思っている

【秋学期】

- ・TAという立場でどこまで介入するか、ということが一番困った点で、いろいろな戸惑いもあったが、一年間本当に貴重な経験をさせていただいた。プロジェクトを行う過程でも、学生たちから色々なことを学ぶことができて感謝している

《教員編》

学生の授業への取組みについて具体的な内容があれば、記入してください。【自由記述】

【春学期】

- ・主体性、責任感、親密性等プロジェクトを通して身につけていく様子に感動している。洞察力が素晴らしくこちらの学びにもなる
- ・さまざまな学年や学部が集まる中で、広い見方の意見交換に学生が新鮮さを感じている点

【秋学期】

- ・話し合いを重ね、チームでテーマを共有する積極的な姿勢
- ・少しのヒントと場を与えてあげると、学生たちがぐんぐん自分の意思で動き出し、自分たちで計画を立て迷いながら作品を創り出すことに喜びを感じている

授業への支援体制や制度について具体的な内容があれば、記入してください。【自由記述】

【春学期】

- ・ TAが大変良くサポートしてくれている
- ・ 大学での支援があるため安心して活動に取り組める（保険なども含めて）

【秋学期】

- ・ 広報等、大学発信をしてきて、幅広い方にアピールできた
- ・ 学生が作成した企画書について事務局からきちんと指摘していただき、学生が学び直しできる機会になるなど、大学全体で学生教育されていると感じた

全体的に工夫すべき点や要望がありましたら、記入してください。【自由記述】

【春学期】

- ・ リーダーシップ論やファシリテーターについての勉強会を開催してほしい

【秋学期】

- ・ 授業時間が少ないと感じることが多い
- ・ 予算の運用についてももう少し自由な裁量を与えられればと思うことがある

2010年度プロジェクト科目 成果報告会アンケート（京田辺・今出川）【抜粋】

《2010年度プロジェクト科目 春学期成果報告会》 2010年7月25日（日）

○良かった点

- ・ 分かりやすいボードの配置や内容で、来てくれた方の興味をひくことができた
- ・ 他のプロジェクト科目がどんなことをしているのか、その説明を聞くことでまた新しい視点が持てて考え方が広がったと思う
- ・ 非常に近い距離で、一般の方や他のプロジェクトの人とディスカッションできたこと
- ・ アウトプットする機会があることは自分達の考えを整理する良い機会になった
- ・ プレゼンは十分に準備すれば緊張しないことがわかったので、また機会があればしっかりやりたい

●悪かった点

- ・ 各メンバーの理解度に少々差があったこと
- ・ プレゼンテーションが下手すぎたが、これは練習不足ではなく私たちの知識、理解不足のため
- ・ 全体的に準備不足でパネルの資料やレイアウトに工夫の余地があった
- ・ 配布物を用意すれば良かった
- ・ 自分の考えが意外とまとまっていなくて、簡潔に上手く説明できなかった

■他の発表で、参考になった点、次回への工夫・改善点など

- ・ 解りやすい発表をする人は共通して丁寧な話し方ではきはきしており、次から心がけようと思った
- ・ 資料のまとめ方、これからのプロジェクトの考え方
- ・ アンケートをとると参考にできて良いと思った
- ・ まわりのことも配慮できるようになりたい
- ・ プレゼンテーション力の必要性を感じた
- ・ 発表する内容を全員で共有する、見てくれる人にわかりやすい資料を作ることが必要だと思った
- ・ 説明の仕方も十人十色でいろいろ感じるものがあった

《2010年度プロジェクト科目 秋学期成果報告会》 2011年1月23日（日）

○良かった点

- ・ 質疑応答の際、不意に投げかけられた問いに焦ることなくきちんと説明が出来た
- ・ 最後までメンバーの一体感があり、元気で明るい雰囲気での発表だった
- ・ 何度も方法を工夫し練習を繰り返したおかげで、難しく濃い内容だったにもかかわらず分かりやすく時間内に発表ができて満足。原稿を見ないで話せた
- ・ 報告会の準備をすることで今まで自分達が行ってきたことの振り返りができて、反省点などが沢山出てきたが、これらが今後につながると思う

●悪かった点

- ・ 専門的な内容の言葉が多く、それに対する説明が足りていなかった
- ・ レジューメに誤字やレイアウトが切れてしまっている点があった
- ・ 具体的な数値で結果を示せなかった
- ・ 活動内容をもっと具体的に説明出来たらよかった（学んだことや失敗例の内容が多くなった）
- ・ 他のプロジェクト科目に比べて成果報告会における認識が低かった。準備・練習不足

■他の発表で、参考になった点、次回への工夫・改善点など

- ・パワーポイントをしっかり使いこなし、見ていて飽きない発表を組み立てる
- ・興味を持たせるために、聞き手に問いかける手法を含みつつ発表していた点が参考になった
- ・苦労したこと、達成できたこと等を聞き手に納得してもらえるような発表をすること
- ・声のトーン・スピード・スライド・映像など、プレゼンというものをもっと勉強すべきだった
- ・「伝えること」は本当に難しく、勉強になった

2011年度プロジェクト科目

■京田辺校地開講科目

テーマ	開講期間	科目担当者(所属・氏名)	科目代表者(所属・氏名)
「京都企業の優秀なDNAを探ろう」	春	石田 正勝	生命医科学部 和田 元
同志社のリベラルアーツとスポーツマンシップ	春	平瀬 紘一	スポーツ健康科学部 横山 勝彦
京都伝統地場産業のイノベーションとキャリアを探るプロジェクト	秋	NPO法人日本キャリア・カウンセリング研究会 作田 稔	心理学部 及川 昌典
食育と健康 (菜膳と野菜作りで、正しい食事と健康を考える)	春・秋連結	NPO法人けいはんな菜膳研究所 井原 浩二	生命医科学部 渡辺 好章
プロスポーツにおけるファン獲得と地域密着のためのマーケティングリサーチ	春・秋連結	加藤 ひでなお	スポーツ健康科学部 二宮 浩彰
ものづくり・人づくり	春・秋連結	中村 成男	理工学部 藤井 透
エコタウン実現プロジェクト —エココミュニティの形成を目指して—	春・秋連結	株式会社東洋設計事務所 齋藤 篤史	理工学部 千田 二郎
子供の成長に良い玩具の考察と企画	春・秋連結	株式会社タカラトミー 渡辺 公貴	生命医科学部 片山 傳生
カリスマ経営企画担当者養成講座 (社長の右腕になって経営を体感する)	春・秋連結	中尾 光宏	文化情報学部 鋤柄 俊夫
大学発！スポーツプロモーション ～豊かな社会作りを目指して～	春・秋連結	高橋 仁美	スポーツ健康科学部 竹田 正樹

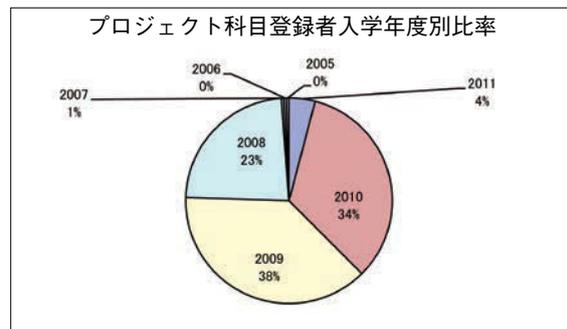
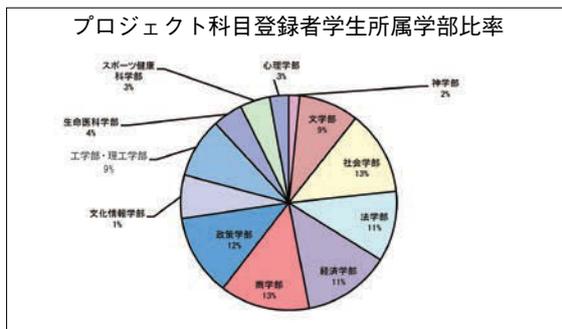
■今出川校地開講科目

テーマ	開講期間	科目担当者(所属・氏名)	科目代表者(所属・氏名)
京都土産から学ぶ商品企画	春	株式会社おたべ 酒井 宏彰	商学部 石川 健次郎
夜間中学を社会に発信しよう！夜間中学生を知っていますか？	春・秋連結	次田 哲治	社会学部 浅野 健一
「花のキャンパスライフ」から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで	春・秋連結	田原 敏孝	経済学部 八木 匡
ソーシャル・プロデューサー養成講座～統一地方選挙と坂本龍馬をプロデュースせよ～	春・秋連結	小関 道幸	政策学部 今里 滋
心ぬくもる「絵本」に出会う～絵本ソムリエ・プロジェクト～	春・秋連結	上野 康治	理工学部 金田 重郎
花で人をつなぐ！～介護、支援の場で新たな取り組みを考える～	春・秋連結	NPO法人フラワー・サイコロジ協会 浜崎 英子	心理学部 余語 真夫/神山 貴弥
京都の織物文化活性化計画！～織物の伝統技術について考えよう～	春・秋連結	日本伝統織物保存研究会 龍村 周	理工学部 大久保 雅史
私はイベントプロデューサー！	春・秋連結	国民文化祭京都府実行委員会事務局 青柳 良明	文学部 伊達 立晶
上京区活性化プロジェクト～区民との協働で地域課題の解決を！～	春・秋連結	京都市上京区役所 豊田 博一	政策学部 今川 晃
「京丹後漁業活性化プロジェクト～新たな地域ブランド商品の開発」	春・秋連結	間人底曳網漁業女性の会 田中 郁代	文学部 中井 悟
京の筏を復活させよう！～保津川筏復活プロジェクト～	春・秋連結	NPO法人プロジェクト保津川 早田 和仙	政策学部 風間 規男
「平成の京街道をゆく～京阪沿線の魅力を発見・発掘・発信しよう！」	春・秋連結	京阪電気鉄道株式会社 高橋 正浩	法学部 馬原 潤二
祇園祭を中心に「京の心意気」を留学生と発見しよう！	春・秋連結	株式会社空 遠藤 正彦	心理学部 佐藤 豪

2011年度プロジェクト科目 登録者数データ

■プロジェクト科目所属学部・年度別登録者数（履修中止後）

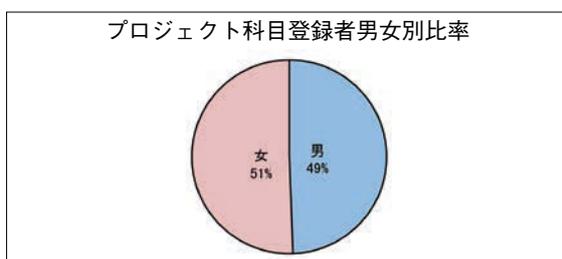
学生所属学部	2011	2010	2009	2008	2007	2006	2005	合計
神学部		1	3					4
文学部		6	10	5	1			22
社会学部		8	14	9				31
法学部		6	16	4				26
経済学部	6	9	11	6				32
商学部	1	16	8	7		1		33
政策学部		17	9	4				30
文化情報学部	1	2	12	1				16
工学部・理工学部		5	1	15			1	22
生命医科学部		5	3	3				11
スポーツ健康科学部		5	3	3				11
心理学部	2	2	3					7
合計	10	82	93	57	1	1	1	245



■プロジェクト科目所属学部・男女別登録者数（履修中止後）

学生所属学部	男	女	合計
神学部	0	4	4
文学部	2	20	22
社会学部	10	21	31
法学部	17	9	26
経済学部	18	14	32
商学部	17	16	33
政策学部	15	15	30
文化情報学部	11	5	16
工学部・理工学部	19	3	22
生命医科学部	3	8	11
スポーツ健康科学部	6	5	11
心理学部	3	4	7
合計	121	124	245

男 (%)	女 (%)
0.0	100.0
9.1	90.9
32.3	67.7
65.4	34.6
56.3	43.8
51.5	48.5
50.0	50.0
68.8	31.3
86.4	13.6
27.3	72.7
54.5	45.5
0	0
49.4	50.6



2011年度プロジェクト科目 事業報告

2011年度プロジェクト科目 学生担当者説明会

今出川校地 2011年4月27日(水)
10:45～12:15 至誠館3番教室

京田辺校地 2011年4月28日(木)
10:45～12:15 知真館1号館107番教室

リーダー、サブリーダー、会計担当者、CNS担当者、学生成果報告書担当者を対象に、各資料にもとづきながら担当者に向けての説明が行われました。



学生担当者説明会

2011年度プロジェクト科目 第1回プロジェクト・リテラシー講習会

2011年6月13日(月) 10:45～12:45 京田辺校地 情報メディア館101番教室
15:00～17:00 今出川校地 至誠館3番教室

「伝える技術について～ポスターセッション～」

講師：株式会社内田洋行 大野勝氏

パワープレイス株式会社 濱村道治氏

ワークショップではグループに分かれポスター作成、発表を行いました。講師から学んだことを自らが体験することで、聴衆に合わせた発表ができる一方、ポスターセッションの良さや難しさ、成果報告会へ向けた課題などを見つけ出せたようでした。



第1回プロジェクト・リテラシー講習会
ワークショップの様子(京田辺校地)

講習会後には、春学期成果報告会の開催要領説明会が行われました。

2011年度プロジェクト科目 春学期学生懇談会

2011年7月6日(水) 12:15～13:15 今出川校地 有終館第1会議室
山田和人プロジェクト科目検討部会長の司会で、恒例となった「1分間プロジェクト紹介」を皮切りに、「プロジェクト活動を行う中でリーダーシップはどうやっていけばよいか」など、各プロジェクトで共通した課題について活発な意見交換が行われました。



春学期 学生懇談会の様子

2011年度プロジェクト科目 春学期SA/TA懇談会

2011年7月13日(水) 12:15～13:15 今出川校地 有終館第1会議室

SA/TAの立場から、プロジェクトとの関わり方や悩み、工夫について、お互いの意見を興味深く聞く様子が見られました。次々と発言が繋がり、有意義な情報交換の場となりました。

2011年度プロジェクト科目 春学期成果報告会

2011年7月24日(日) 10:00～15:30 京田辺校地 恵道館106番教室

2010年度に続き両校地開講科目合同開催、ポスターセッション形式での春学期成果報告会が行われました。教育支援機構、全学共通教養教育センター、教務主任連絡会議、プロジェクト科目検討部会の各委員から成る17名の審査員が各ブースを丁寧に回り「最終目標は何か」「春学期末の時点で、最終目標のどこまで達したのか」「自分はどう貢献したのか」など、投げかけられた鋭い質問に真剣に応える受講生の姿が会場のあ

ちこちで見受けられました。各チームの取り組み姿勢や理解度、コミュニケーション力が試される数時間となりました。

〈最優秀賞〉

ものづくり・人づくり

〈優秀賞〉

「京都企業の優秀なDNAを探ろう」

〈特別賞〉

エコタウン実現プロジェクトーエココミュニティの形成を目指してー



春学期成果報告会 ポスターセッションの様子

2011年度プロジェクト科目 春学期科目担当者・代表者懇談会

2011年7月30日（土）12：00～13：00 今出川校地 徳照館会議室

2011年度の前半を終えて、担当者・代表者懇談会が開催されました。今回は担当者からの率直な意見が相次ぎ、今後のプロジェクト科目運営改善につながる貴重な時間となりました。

2012年度プロジェクト科目 公募説明会

京田辺校地 2011年9月2日（金）13：00～14：30 夢告館102番教室

今出川校地 2011年9月3日（土）9：30～11：00 至誠館2番教室

2012年度プロジェクト科目公募についての説明会が両校地において開催されました。事前申込みに加えて当日参加もあり、両日あわせて40名を越える多くの方々にプロジェクト科目公募の趣旨説明がなされました。

2012年度プロジェクト科目 科目担当者・代表者説明会

2011年12月10日（土）14：00～15：30 今出川校地 至誠館3番教室

2012年度プロジェクト科目公募において、教育支援機構、全学共通教養教育センター、教務主任連絡会議、プロジェクト科目検討部会の各委員による審査を経て、京田辺校地開講科目10件、今出川校地開講科目11件の合計21件が2012年度プロジェクト科目として採択され、プロジェクト科目ならではの多彩で魅力的なテーマが揃いました。次年（2012年）度科目担当者・代表者を対象に授業運営に関する説明会が開催されました。

2011年度プロジェクト科目 第2回プロジェクト・リテラシー講習会

2011年12月20日（火）10：45～12：15 京田辺校地 情報メディア館101番

15：00～16：45 今出川校地 至誠館23番教室

「伝える技術について～プレゼンテーション」

講師：株式会社内田洋行 中田知宏氏

パワープレイス株式会社 小出暢氏
プロジェクトやコンテンツをどうしたら魅力的に伝えられるか、第一線で活躍する企業にプレゼンテーションの実践を学ぶ、プロジェクト・リテラシー講習会の第2回目が開催されました。プレゼンテーション形式の秋学期成果報告会をふまえたワークショップによる



第2回プロジェクト・リテラシー講習会
ワークショップの様子（今出川校地）

講習内容に「成果報告会に向けての参考となった」「戦略立案とリハーサルの重要性を実感した」「今日学んだことをプロジェクト内でしっかり共有して、良い発表にしたい」などの感想がきかれ、成果報告会へのモチベーションが増した様子でした。

また、秋学期成果報告会の開催要領説明と相互評価のペア・発表順の抽選が行なわれました。

2011年度プロジェクト科目 秋学期学生懇談会

2012年1月11日（水）12：15～13：15 今出川校地 有終館第1会議室

1年のプロジェクト活動を振り返る時期の秋学期後半、学生懇談会が開催されました。チームが方向性を見失いそうになった危機を経験し、それが逆に、ひとつにまとまるきっかけになったという意見に多くの参加者が共感していました。

2011年度プロジェクト科目 秋学期SA/TA懇談会

2012年1月18日（水）12：15～13：15 今出川校地 有終館第1会議室

SA/TAという、受講生ではない一線を画した立場の違いを意識した発言が目立ち、春学期懇談会に比べ、苦勞を乗り越り大きく成長した様子を垣間見ることができました。

2011年度プロジェクト科目 秋学期成果報告会

2012年1月22日（日）10：00～16：15 今出川校地 明德館21番教室

一年間のプロジェクト活動の集大成とも言える、秋学期成果報告会が開催されました。発表レジメに加え、科目で成果物として作成した冊子を配布するなど、成果報告会に向けての意気込みが感じられました。今回はじめての試みとして抽選でプロジェクト同士ペアを組み、相互評価の機会を設けたことにより、自己反省、新たな気づきにつながった様子が見られました。

〈最優秀賞〉 心ぬくもる「絵本」に出会う～絵本ソムリエ・プロジェクト～

〈優秀賞〉 京都の織物文化活性化計画！～織物の伝統技術について考えよう～
「平成の京街道をゆく～京阪沿線の魅力を発見・発掘・発信しよう！」

〈特別賞〉 心ぬくもる「絵本」に出会う～絵本ソムリエ・プロジェクト～

2011年度プロジェクト科目 秋学期科目担当者・代表者懇談会

2012年3月3日（土）12：00～13：30 今出川校地 光塩館会議室

プロジェクト科目担当者と代表者の連携・関係や、成績評価方法についての意見など熱い議論が繰り広げられ、充実した意見交換の場となりました。

2011年度プロジェクト科目 プロジェクト・リテラシー講習会アンケート【抜粋】

《第1回》「伝える技術について～ポスターセッション～」 2010年6月14日(月)・15日(火)

- ・初めてポスターセッションをやった。最初はどうなるかと思ったが、上手くできた
- ・1対nの説明の欠点は今まで気づけなかった点だった
- ・ポスター発表は、どのように分かりやすく伝えるか、反応にどのように答えるか、悩むことも多かったが充実感のある発表形式だった。今回、私たちはデータ不足だったので本番はもっと良い発表をしたい
- ・初めてのポスター作りで、何を考えて作ればいいのか分からなかったが、このリテラシー講習を受けてポスターの内容、表現方法またプレゼン方法など様々なポイントを知ることができてよい経験だった
- ・ポスターセッションにおいて話し手は聞き手の興味を惹き続けていかなければならないので、かなりの労力を必要とすることが分かった
- ・短時間でしっかりと自分の考えをまとめ上げることの難しさを理解できた
- ・他の人がやっている発表を見るだけでもとても参考になった
- ・今回経験して、自分のプロジェクトで大きな柱としてアピールしたい事、ぜひ知ってほしいものなどがぼんやりながら自分の中で生まれた。ポスター及びプレゼンに足を止めて良かったと思われるように、プロジェクト一同で、興味を惹き内容も驚きをも感じられるものを作り上げたい
- ・実際にポスターセッションをして、否定的な意見も褒める意見もあり、本番の様子を体験できたと思う。一緒に説明していた子が、聴衆の意見を取り入れて次の説明を行っていたので、私も真似してやっていたが、そうやって話すたびに工夫し変化させて説明できるのもポスターセッションの魅力だと思う
- ・プレゼンでは一人の方にばかり話してしまい、他の方をないがしろにする傾向にあったので気をつけたい
- ・準備が本当に大事だということを改めて気づかされた
- ・実際に働く方からの多様な意見は学生である自分にとって有益なものであった
- ・ポスターセッションの良し悪しも、自分の良いところ悪いところも分かった
- ・ポスターセッションについては本などでやり方を学んだりはしたが、やはり実践が一番だと思った。改めて昨年のポスターセッションを振り返ると文字が多すぎて見にくい、伝わりにくいという欠点と花を実際に置いて目を引いたという具体的な自己評価ができた
- ・発表するときにダラダラと話してしまうかもしれないと思っていたが、気をつけないといけない点やポイントを教えていただけて為になった
- ・体験型（ワーク有り）説明会で、ポスターセッションの難しさを感じた。興味を持って貰えないと立ち止まってもらえない。論理をしっかりと組み立てていないと突っ込まれてしまう。今後のプロジェクト活動において、今回の気付きを生かしていきたい
- ・自分にはない発想が色々聞けて面白かった！図を使うこと、相互的に会話のキャッチボールをしながら発表を進めることの大切さと難しさを実感した
- ・ポスターセッションという大仕事を、今まで不安ばかりのイメージしか持てなかったが、今日の講習会を経て、依然難しいことは変わらないが何としてでも最後までやりきろうという決意が得られて良かった

《第2回》「伝える技術について～プレゼンテーション」 2010年11月30日(火)

- ・プレゼンテーションの仕方の実践と手本と、一度に沢山のことを学べた
- ・今回の講習で心に残ったのは、戦略立案と練習（リハーサル）の大切さである。本番では、伝えたいことと内容をグループ内でしっかり共有して良いプレゼンに出来ればと思う。発表の仕方が上手かった人を真似して、人の心に語りかけるような発表が出来れば良いと思う

- ・プレゼンテーションをする上でストーリーを立てて、いかに相手に自分の伝えたいことを伝えられるかが大切ということが学べた
- ・1月22日の成果報告会に向けて、プレゼンテーションの方法を学ぶことができてとても良かった。この学びをプロジェクトに持ち帰って良い発表に出来るようにしたい
- ・特にリハーサル、チームでの意思疎通が重要であると強く思う
- ・今回の機会は一方的に話を聞くのではなく、実際に自分たちで短時間でプレゼンしてみるというものであったので、とても有意義な時間だった。もっと経験を積んで慣れていきたい
- ・私はあがり症でコミュニケーションをとるのが上手くないので、上手くなるきっかけを掴めたら良いなと思い参加した。チームでリーダーシップを発揮している人を参考にしたいと思った
- ・プレゼンに関する本は何度か読んだことがあったが、今回はそれとは違って本当に新鮮なもので、ためになると感じた
- ・実際にプレゼンをやってみて、一人一人が協力していかなければ、と改めて思った
- ・プレゼンテーションをして、評価を頂けたことで自分の改善点が分かった
- ・漠然と、楽しそうだなと思って参加した講習会だったが、たくさんの学びがあってとても役に立った
- ・ゼミ等でプレゼンをしたことがあまりないので、1月22日にプレゼンをすることに不安があったが、プレゼンのコツを知ることでその不安が少し減った
- ・メッセージとストーリーを込める。技法や戦略も大切だが、「気持ち」を入れることが最も重要だと感じた
- ・こういった機会がもっと増えたら良いなと思った
- ・短時間だったが、とても有意義な時間になった
- ・次回から今日学んだことを参考に組み組んでいきたい

2011年度プロジェクト科目 授業アンケート（京田辺・今出川）【抜粋】

《学生編》

この科目を受講して良かったと思いますか？具体的な内容があれば、記入してください。【自由記述】

【春学期】

- ・自己表現する面白さを知った。主体的な活動が経験でき、自分の成長に繋がっていると感じる
- ・今までに無い、自分達の手で作上げていく事が大変であったものの、自分の役割を認識して積極的に出来てとても満足している

【秋学期】

- ・今まで目にも留めなかったことに注目して、掘り下げる洞察力が自然と身についた
- ・プロジェクトでは成功よりも失敗のほうが多く、自分の失敗がプロジェクト全体に影響を与えることもあったが、失敗を通して自分の欠点に気付く事ができ、社会に出てからこの失敗を活かすことが出来ると思う

従来の座学の講義と比べて、良かった点、悪かった点をご記入ください。【自由記述】

【春学期】

○良かった点

- ・一方的に授業を受けるだけでなく「授業を作っている」感じが良かった
- ・座学の講義では自身が気付かないまま「聞いているフリ」をすることがあるが、自分から動かなければ何も生み出せないプロジェクト科目は、物事をちゃんと理解することがどんなに難しいか体感できる

●悪かった点

- ・責任が伴うため、時間的な拘束が思った以上に多い
- ・「プロジェクト」ならではの役割や目標の曖昧性

【秋学期】

○良かった点

- ・「社会」と接する事ができた。自らの行動によって成果が変わることを知り、自主性や積極性の大切さを実感
- ・授業の中でプロジェクトのメンバーと協力して取組む中でも、常に自分の意見を持ちそれを伝えていく事が必要とされるなど、行動力や協調性などの重要性を実感することが出来て良かった

●悪かった点

- ・秋学期後半はまとめの作業等で忙しすぎ、テスト勉強との両立が難しかった
- ・授業時間（90分）では足りず、授業時間外の活動では他学部の受講生と時間が合わず大変だった
- ・時間的・金銭的な負担が思っていたより大きく、その事を事前にもっと詳しく知っておきたかった

今後、どのような科目であれば受講したいと思いますか？

開設を希望するジャンルや具体的なテーマがありましたらご記入ください【自由記述】

【春学期】

- ・東日本大震災に対しての復興など、何らかのアプローチができる科目
- ・海外を活動域に入れたグローバルな科目（語学力を問わず参加できる）

- ・社会に貢献できている実感をもっと得られる科目（自己満足で終わらせない高いレベルのもの）

【秋学期】

- ・他大学との共同プロジェクト、自然保護に関する科目
- ・映像制作に関するプロジェクト、同志社に関する科目

その他、何かご意見があればご記入ください【自由記述】

【春学期】

- ・プロジェクト科目の内容について事前にもう少し詳しい説明が欲しい（シラバスでは伝わりにくい）さらに、説明会から登録日まで日を空けて、内容を良く知った上で受講を考える期間がほしい
- ・大変だったが、得るものはたくさんあった。他の科目との交流の場を増やして欲しい

【秋学期】

- ・2011年度の開講科目には理系の学生がやってみたいと思うような科目が少ないと感じた
- ・報告会が年2回は少ない。報告会でなくても外部から評価してもらえる機会を増やしてほしい

《 SA/TA 編 》

この科目を担当して良かったと思いますか？具体的な内容があれば、記入してください。【自由記述】

【春学期】

- ・受講生が行き詰まったときに、その解決策を提供し問題解決できる点
- ・学生たちの活動のサポートや講師の方々のお話を伺う事を通して、受身でいるのではなく主体的に行動することの大切さについて理解する事が出来た

【秋学期】

- ・第三者として企画実施の過程を見守ることが出来る点
- ・後輩たちの学ぶ姿勢・成長の様子を近くで見て刺激を受けた

従来の座学の講義の授業と比べて、良かった点・悪かった点をご記入ください。【自由記述】

【春学期】

- 良かった点
 - ・実践に重きが置かれているゆえに地域との関係を考える機会になったと思う
 - ・企業の方々など、普段では会えない方とお会いできる点
 - ・答えが無いので自分たちの考えが直接反映される点
- 悪かった点
 - ・表面的なアイデアに捉われる学生もいる

【秋学期】

- 良かった点
 - ・自分から授業への修正点を挙げる事ができる
 - ・教員と学生の距離感が近い点
 - ・教務課の皆様にも「説得力・交渉力」の指導をしていただいた
- 悪かった点
 - ・成果評価の仕方はもう少し工夫する余地があると思う

- ・授業の実施時間を超過している

今後、どのような科目であれば担当したいと思いますか？
担当を希望するジャンルや具体的なテーマがありましたらご記入ください。【自由記述】

【春学期】

- ・学問と現場、理論と実践の融合を目指した講義
- ・商品開発

【秋学期】

- ・学生と企業が結びつくことが出来るテーマ
- ・「商業要素」の疑似体験ではなく、実際の「ビジネス」「商売」ができるような科目

その他、何かご意見があればご記入ください。【自由記述】

【春学期】

- ・実践の観点が重視されており、大学教育の学習の面での効果があるのか疑問
- ・2年連続で受講出来たら企画を実行する可能性が大になるし、かつ色々な知識も吸収できるのでプロジェクトとしてもメンバーも授業も活性化すると思う

【秋学期】

- ・社会に出る前に思いっきり失敗していい場所、想いのままに企画を実現する場所を与えてくださったことに感謝している
- ・プロジェクト科目は授業時間外の活動が多いので、備品や教室の貸出をもっと柔軟にしてほしい

《教員編》

学生の授業への取組みについて具体的な内容があれば、記入してください。【自由記述】

【春学期】

- ・役割分担により、調査・資料作成・データ整理・分析がスムーズに行われている（困難なときも乗り越える力がある）
- ・答えやスタイルが決まっていないものへの探求心や形にする積極さがもう少しあれば尚良い

【秋学期】

- ・授業時間以外にも自主的に集まり（CNS利用を含む）熱心に課題に取り組んでいた
- ・本人たちの責任ではないが、就職活動・ゼミ活動などが多忙で時間の調整がつかない

授業への支援体制や制度について具体的な内容があれば、記入してください。【自由記述】

【春学期】

- ・環境・設備等が素晴らしいと思う
- ・土・日曜日に学生同士が集まって作業する場所が無い

【秋学期】

- ・迅速かつ丁寧な対応、活動への理解

- ・授業の支援体制・場所・時間・費用等への配慮の他、特に全学での明確な方針と教育体制が充実
- ・予算をもう少し自由に使えるように科目担当者の裁量範囲を広げてほしい

全体的に工夫すべき点や要望がありましたら、記入してください。【自由記述】

【春学期】

- ・プロジェクト科目の授業は1年で終わるが、立ち上げた内容によっては継続したいものがあり、その様なものをどうするか考えてほしい
- ・興味を持って集まる学生は、責任感も強く信頼関係も出来て、志を同じくして成果を得られるこの授業は非常に良いと思う
- ・CNSについて、メンバー間だけでクローズドにしたい議論もあるため外部から見られない構造のところが欲しい

【秋学期】

- ・毎年の問題だが、授業時間が90分では足りない
- ・一般教養科目という位置づけならば1回生も受講できるようにするべきだと思うし、年齢を超えた活動の上で1回生の参加は良い効果をもたらすと考える
- ・学生への課題などが以前より多くなっていて負担になり、本来の活動に支障がある（事務局への提出物や授業日以外に集まる日が多い）

2011年度プロジェクト科目 成果報告会アンケート（京田辺・今出川）【抜粋】

《2011年度プロジェクト科目 春学期成果報告会》 2011年7月24日（日）

○良かった点

- ・質問をある程度予想していたため割とスムーズに質問に答えることができた
- ・お客さんの年齢や職業に対応して発表方法を変えた点
- ・外部の方に自分たちがやっている事の評価をしてもらえた。厳しい意見も多く、考えさせられる事も多かったが、次につなげられる良い機会になったと思う
- ・他のプロジェクトの発表を聞いて、自分のプロジェクトにも応用できる点が多々あり、非常に有益な情報交換の場であった

●悪かった点

- ・立ち寄ってくれる方全員に対応できなかった
- ・自分の頭の中で思っていることが上手く言葉に出来なかった。ポスターセッションの利点である発表者と見学者の“対話”が難しく、自分だけが話すばかりになってしまったことが反省点
- ・深く尋ねられた時にうまく答えられず自分の知識不足を痛感し、プレゼンテーションを通じて伝えることの難しさを知った

■他の発表で、参考になった点、次回への工夫・改善点など

- ・目を見て話す、相手から話を聞くことが大切
- ・もっと色々と展示物や掲示・発表方法など工夫すべきだったと思う
- ・早目に準備・行動して、皆で考察し、共有する時間を多く持つ
- ・明確な到達点を出しているところは説得力がある
- ・他のプロジェクト科目のやる気に満ち溢れている印象は、知ってもらいたいという意欲を感じる
- ・積極的にアンケートをとったり、質問をしたり、インパクトを持つ方法があると思った

《2011年度プロジェクト科目 秋学期成果報告会》 2012年1月22日（日）

○良かった点

- ・アンケートやイベントについてどういった目的で行ったのか、その内容と結果などを詳しく話せた
- ・時間制限がある中で、資料や言葉・スライドの工夫で要点を集約しまとまっていた
- ・発表で伝えられない各論は報告書配布で補えたので良かった
- ・一番自分たちの素直な心を伝えられたと思う
- ・会場の方に質問を投げかけるなど、発表が一方向ではなかった

●悪かった点

- ・結論が弱い
- ・レジュメを工夫すればよかった
- ・プレゼン・発表を行うにあたり、大前提である資料を期限までに提出できなかった
- ・活動報告だけでなく、活動を行うにあたって心がけた準備、重視していたことにも言及したかった
- ・もっと目的や成果の要点を絞って簡潔にしたほうが良いと感じた
- ・アンケートに関するデータをプレゼンで提示していたら会場の理解をより深める事ができたのではと思う

■他の発表で、参考になった点、次回への工夫・改善点など

- ・プロジェクトの全体内容を明確にして（1年の流れなど）発表する
- ・どうやって聴衆の興味を引くかを考えた結果が、それぞれの発表に反映されていてとても興味深かった。単に調査・研究結果を発表するだけでなく、個々人のプロジェクトを通しての感想、このプロジェクトを更に有効活用するための方法・提案が組み込まれていることが重要だと実感した
- ・話し方、声の抑揚、間のとり方、身振り手振り、目線の使い方が非常に参考になった
- ・VTR（動画）は印象に残るが使い方に気をつけなければ、成果発表の場を学びの場として活かせなくなる恐れがある。多くの人を前に、伝えたい事を効率よく自分の言葉で発信する場としてこの場があるにもかかわらず、VTR（動画）の利用はその機会を奪うことに繋がるのもったいない

2011年度プロジェクト科目 秋学期成果報告会 相互評価結果 【抜粋】

発表順 & 相互評価ペア一覧				
ペア	発表順	テーマ名	発表順	テーマ名
A	1	プロスポーツにおけるファン獲得と地域密着のためのマーケティングリサーチ	10	子供の成長に良い玩具の考察と企画
B	2	ものづくり・人づくり	11	エコタウン実現プロジェクト ーエココミュニティの形成を目指してー
C	3	大学発！スポーツプロモーション ～豊かな社会作りを目指して～	12	京の筏を復活させよう！ ～保津川筏復活プロジェクト～
D	4	カリスマ経営企画担当者養成講座 (社長の右腕になって経営を体感する)	13	「花のキャンパスライフ」から情報発信に挑戦、 新聞、ラジオ、ネットで
E	5	心ぬくもる「絵本」に出会う ～絵本ソムリエ・プロジェクト～	14	「京丹後漁業活性化プロジェクト ー新たな地域ブランド商品の開発」
F	6	京都伝統地場産業のイノベーションと キャリアを探るプロジェクト	15	上京区活性化プロジェクト ～区民との協働で地域課題の解決を！～
G	7	食育と健康 (薬膳と野菜作りで、正しい食事と健康を考える)	16	夜間中学を社会に発信しよう！ 夜間中学生を知っていますか？
H	8	「平成の京街道をゆく ～京阪沿線の魅力を発見・発掘・発信しよう！」	17	京都の織物文化活性化計画！ ～織物の伝統技術について考えよう～
I	9	祇園祭を中心に「京の心意気」を留学生と発見しよう！	18	ソーシャル・プロデューサー養成講座 ～統一地方選挙と坂本龍馬をプロデュースせよ～
			19	私はイベントプロデューサー！

※ペア「I」については、三者相互評価とする

1. プロスポーツにおけるファン獲得と地域密着のためのマーケティングリサーチ

【相互評価】「子供の成長に良い玩具の考察と企画」より

- ・最初の発表で緊張したと思うが、ハキハキと分かりやすく伝えられていた。プロスポーツとアクティブシニアがそんなに簡単に繋がるものなのかと疑問だったが、イベントの内容を見て、地域密着がある程度成功したのではないかと思う
- ・マーケティングリサーチというテーマに沿っていたのか疑問は残るが、分かりやすく、何をしたいか、どのような活動をしてきたのかが明瞭でとても良かったと思う
- ・スポーツをする、関心を寄せる方の、スポーツに対する意識調査がよく行われており、動機の分析ができていたと思う。しかし、サンプル数・質についての言及がなかったため、その調査結果が実際にそうであるのか疑問が残る。また、ターゲットをアクティブシニアの設定した説明が不十分なのではと感じた

2. ものづくり・人づくり

【相互評価】「エコタウン実現プロジェクトーエココミュニティの形成を目指してー」より

- ・主に写真を使用したプレゼンでとても分かりやすかった。また「1年間これだけ頑張った」という自信のようなものが伝わってきて、プロジェクトで学んだ事を今後も活かして行ってほしい。ものづくりはエンジニアの原点であり、私自身もこのプロジェクトから学ぶべき事が多いと感じた
- ・非常に素晴らしい内容だった。企画・設計のプロセスを経て様々な障害を乗り越えて車両を完成させる姿に感動した。耐久レースで完走できたのも素晴らしい！
- ・公式大会に参加するための様々な書類の提出や検査を受けたりする中で、社会でも通用するスキルが身につく大変レベルの高いプロジェクトだと思った
- ・ものづくりだけでなく「人づくり」をタイトルに掲げるとおり、様々な社会人や先輩方にアドバイスを受けながら成長する姿は、プロジェクト科目の一つの理想の形だと思う

3. 大学発！スポーツプロモーション～豊かな社会作りを目指して～

【相互評価】「京の筏を復活させよう！～保津川筏復活プロジェクト～」より

記載なし

4. カリスマ経営企画担当者養成講座（社長の右腕になって経営を体感する）

【相互評価】「[花のキャンパスライフ] から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで」より

- ・企業に赴き、実際にコンサルティングなど社会人のような活動をしていながら、その中にもマンガといった学生らしい発想で、大学生という立場を活かしていたと思う。ただ、成果がよく分からなくて残念だった。プロジェクトで得たスキルを将来活かしてもらいたいと思う
- ・プロジェクト活動の具体的な目的・目標が設定されていて、実際に企業訪問やSTP+4Pなどのマーケティング手法を用いたビジネス分析をされていて、具体的に色々な活動をされていたことが分かった。型にはまった事をするのではなく、自分たちで考えた事をされたのだと良く分かった。配布資料にマンガを付ける案は良かったと思う
- ・構成がきちんとしていたので、このプロジェクトの活動内容が分かりやすかった

5. 心ぬくもる「絵本」に出会う～絵本ソムリエ・プロジェクト～

【相互評価】「京丹後漁業活性化プロジェクト～新たな地域ブランド商品の開発」より

- ・「やりたい」ということを実際に自分たちの手で実現させていく様子、イベントの準備のため頑張った様子が伝わってきた。1年を通じて沢山の絵本を読んできている事が分かった
- ・絵本という2次元の世界をイベントで3次元にする発想が素敵だと思った。ただ、イベントやラジオでの発信の後、どのような効果が出たかまでは成果として報告がなかったので、その部分があればよかったと思う。プレゼンテーションが本当にすっきりしていて、開講から目的達成までの1本の道筋が見えたのが素晴らしく、逆に苦労話を聞きたいと思わせるくらいだった
- ・生き生きとした発表で楽しく聞けた

6. 京都伝統地場産業のイノベーションとキャリアを探るプロジェクト

【相互評価】「上京区活性化プロジェクト～区民との協働で地域課題の解決を！～」より

- ・このプロジェクトの大きな目的は「探る」事にあつたと思われる。その事を考慮すると京都の伝統産業に関わる3社から学んだ事が分かりやすくまとめられていたし、学んだ事を積極的に外部に向けて発信している点も良いと思った
- ・私たちのプロジェクトと関わりがあるので非常に勉強になった。説明は分かりやすかったが、情報量が多いと感じたので、よりコンパクトにした方が良いと思う
- ・提言にもう少し具体性があれば良いと思った（発表で聞いた限りはイマイチ説得性に欠ける）

7. 食育と健康（薬膳と野菜作りで、正しい食事と健康を考える）

【相互評価】「夜間中学を社会に発信しよう！夜間中学生を知っていますか？」より

- ・どのような目的でこのプロジェクトに参加し、プロジェクトに取り組んできたのが非常に分かりやすかった。時間が足りないなかでの工夫の仕方などは私たちも参考にしたいと思う。薬膳を自分たちで野

葉作りから始めるというプロジェクトに大変興味を持った。幼稚園生に分かりやすいように紙芝居をする工夫も良かったと思う

- ・春学期の座学やさまざまな積み重ねが、秋学期には出店、地域連携、幼児への食育など、地域に生きるかたちで活動に取り組まれていて、学生にできる形での色々な仕掛けがなされていた
- ・プロジェクトの内容が分かりやすかった。メンバーが少ない中たくさんの活動を行い、それぞれで大きな成果を上げていて素晴らしいと思った。特に「幼稚園での食育活動」は、子供だけでなく保護者も対象に行うことで、より一層効果的なメッセージを伝える事ができたのではないかと思う

8. 「平成の京街道をゆく～京阪沿線の魅力を発見・発掘・発信しよう！」

【相互評価】「京都の織物文化活性化計画！～織物の伝統技術について考えよう～」より

- ・多くの課題が浮上していく中どのようにそれを解決していったのか、プロセスが見えやすかった
- ・「人に伝える」ということで、毎回イベント終了後に反省をし「どうしたらもっと人に伝える事ができるか」を考えて改善しているところは見習うべきところだと感じた
- ・パワーポイント、プレゼンテーションがとても魅力的、的確、効果的で楽しく聞ける発表だった

9. 祇園祭を中心に「京の心意気」を留学生と発見しよう！

【相互評価】「ソーシャル・プロデューサー養成講座～統一地方選挙と坂本龍馬をプロデュースせよ～」より

- ・授業の教材として「祇園祭」を取り入れているのはとても良いと感じたが、実際に資料としてあれば実感がわいてさらに良かったと思う
- ・祇園祭を伝統として学ぶだけでなく、留学生にも日本の文化として発信し、形として残すというのは素晴らしい企画だと思った

【相互評価】「私はイベントプロデューサー！」より

- ・留学生だけでなく「留学生を教える先生」に対して提案を行ったことは、様々な方面から留学生へ伝えているという工夫を感じた
- ・春に学んだ事、反省点をきちんと秋に活かしていると思った。何を留学生に伝えていきたいか、調査やインタビューを裏づけとして念入りにしているところが良い
- ・言葉、文化の違いを乗り越えて工夫をしてきた事が分かった
- ・シンプルではあったが、写真も多くてきれいなスライドだった
- ・祇園祭という文化を継続して伝えようとする想いから試行錯誤しながら教材を作っていたことが伝わってきたが、どのような教材なのか内容をもっと聞かせて欲しかった

10. 子供の成長に良い玩具の考察と企画

【相互評価】「プロスポーツにおけるファン獲得と地域密着のためのマーケティングリサーチ」より

- ・早い段階で具体的な玩具の企画がされていた事を知り、私たちももっとスケジュール管理をして、先のことを考え話し合っていくべきだと思った
- ・色々な活動に参加されていて、何のためにやるのかまで考えていて素晴らしい。子ども達との交流、商品開発などとても楽しそうで私もやってみたいと思った。皆さんがプロジェクトを行い、知識を得ているということがよく分かった
- ・東京、大阪、福島など日本各地で調査を行っていて、行動力のあるプロジェクトだと感じた。机上の話し合いだけでなく、実際にタカラトミーと提携して商品化しているのは、社会に認められた証拠であり

素晴らしいと思う。「子供の成長に良い」に関して明確な定義はないにしろ、具体的なテーマが聞けたら良かったと思う

- ・インタビューや実際に子供と触れ合うなどリサーチがしっかりできていた
- ・商品化が楽しみ

11. エコタウン実現プロジェクトーエココミュニティの形成を目指してー

【相互評価】「ものづくり・人づくり」より

- ・役割でグループ分けをしているのが良い
- ・サイクルシェアリングを使ったエコタウンというものがどのようなもので、現状がどのようなになっているのかが非常に分かりやすかった
- ・省エネルギーを促進するにあたって省エネには様々な方法があると思うが、なぜ見える化というものを考え活動を行ったのか少し疑問に思った
- ・電気自転車のシェアリング等エコの内容が具体的に検討されており、普及させるための課題点も検討されているので良かった

12. 京の筏を復活させよう！～保津川筏復活プロジェクト～

【相互評価】「大学発！スポーツプロモーション～豊かな社会作りを目指して～」より

- ・端的にまとめられていて素直に分かりやすく、ハキハキと話されていて聞き取りやすいプレゼンだったが、筏師さんとのやり取りや、準備段階での内容がもっとあれば良かったと思う。また、課題への解決策をもっと提示して欲しかった
- ・なぜ筏なのか、事業計画の中で「エコ」という部分はどう解決されたのかわからなかった
- ・筏流しの定着についての理由や方法が薄かった
- ・人数が少ないのに熱心に活動されていて凄いと思う
- ・パワーポイントがほとんど単色、同じフォント、文章表現だったので、もう少しキーワードが目立つほうが良かった

13. 「花のキャンパスライフ」から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで

【相互評価】「カリスマ経営企画担当者養成講座（社長の右腕になって経営を体感する）」より

- ・自分たちのプロジェクトの成果という点で、発生した問題点に真剣に向き合い、その解決に向けてメンバー全員で奮起されたことがよく伝わってきた。今後の情報発信に期待したい
- ・失敗から述べていく素直さが良い
- ・写真や表が豊富な点、必要最小限の量の文章のみで情報が整理されていてとても見やすかった点は、さすが情報発信のプロジェクトということもあって、手の込んだプレゼンで良かった

14. 「京丹後漁業活性化プロジェクトー新たな地域ブランド商品の開発」

【相互評価】「心ぬくもる「絵本」に出会う～絵本ソムリエ・プロジェクト～」より

- ・プロジェクト内容・活動を分かりやすくまとめた動画はとても興味深く、自分たちの成果を会場の人たちに伝えるという点ではかなりレベルの高い発表だと思ったが、現時点でどれだけの人に影響を及ぼしたのかの調査と、実際に間人美人を食べた人からのフィードバックがどうだったのかが気になった

- ・実際に商品企画したりするのはとても楽しそうで、京丹後という遠い地域まで行ったり、ラジオ企画にも取組んだりして積極的に活動されていると感じた。今後もその取り組みを続けていくということなので、すごいと思った

15. 上京区活性化プロジェクト～区民との協働で地域課題の解決を！～

【相互評価】「京都伝統地場産業のイノベーションとキャリアを探るプロジェクト」より

- ・このプロジェクトは単に成果を報告するだけでなく、提言という形で今後の上京区活性化へつなげようという意欲が表れていて良かったと思う。スライドでもう少し視覚に訴える効果を取り入れると聴衆をひきつけやすいと思う
- ・「学生と地域のつなげ方」を学生の側から提言する取組みは素晴らしいと思う。今後は「学生と地域をつなぐ場」を創る取組みもして欲しい
- ・内容がしっかりしていたので情報不足は感じなかったが、展開が早く少し理解が難しかった。しかし、聞き取りやすい声で視線が前もしくは画面に向いていたことから「覚えた原稿を読んでいる」というより「自分たちの言葉で伝えている」という印象を受けた
- ・問題提起から解決の流れが良くできていたと思う。何がいけなくて、どうあるのが理想で、どうすれば解決するのか具体的に示されていたことが良かった

16. 夜間中学を社会に発信しよう！夜間中学生を知っていますか？

【相互評価】「食育と健康（薬膳と野菜作りで、正しい食事と健康を考える）」より

- ・話し方が滑らかで聞きやすかった
- ・話はとても深く興味深い
- ・取材しやすい関西の夜間中学だけでなく、関東の方への足を延ばして取材したのはすごいと思った
- ・いろいろな人に取材をして、そこで感じたことや印象に残った言葉の紹介を通して、メンバーの方がそれぞれ持っている夜間中学の考え方がはっきりしていて、聞いている側にもよく伝わってきた

17. 京都の織物文化活性化計画！～織物の伝統技術について考えよう～

【相互評価】「平成の京街道をゆく～京阪沿線の魅力を発見・発掘・発信しよう！」より

- ・市営地下鉄の方に交渉をして、今出川駅の展示スペースを継続的に利用させてもらえることになった点は、今後行われるプロジェクト科目に大きく貢献した
- ・寒梅館で行われた展示会に参加させてもらったが、高級な錦織物の実物を展示していて目の前で見ることが出来たし、スタッフが常在していて時折説明補足されていたので分かりやすかった。自分たちも同じように寒梅館で展示を行ったが、本当に展示のみだったので「あまり魅力は伝わってなかったのかなど」考え直すきっかけにもなった
- ・何年か継続して行っているプロジェクトなので、前年度の活動内容と異なっている点が分かるとさらに良いと思った

18. ソーシャル・プロデューサー養成講座～統一地方選挙と坂本龍馬をプロデュースせよ～

【相互評価】「祇園祭を中心に「京の心意気」を留学生と発見しよう！」より

- ・声が聞き取りやすく、しっかり発表する事ができていた

- ・ソーシャル・プロデューサーという抽象的なテーマを分かりやすく説明できていた
- ・映像を上手く取り入れて、インパクトが大きかったことが良かった
- ・イベントについての話だけだったので、そのイベントを行うまでの過程、背景などをより深く話すことでプロジェクトのイメージがより浮かびやすくなると思う
- ・このプロジェクト（集大成と言われたイベント）から、自分たちが何を得て、どう成長したのかをもっと聞きたかった

【相互評価】「私はイベントプロデューサー！」より

- ・「プロデューサー」という私たちと同じ観点からのテーマだったので興味深かった
- ・自分たちの1年間の活動を客観的に振り返り反省できていた
- ・坂本龍馬との関係性が良く分かる映像だったが、イベントを企画する際にどうメンバーを決めたのか、またパネルディスカッションの内容やイベントを行った結論についても聞きたかった
- ・イベントの内容が分かりにくく、プロジェクト科目の受講生がどの部分を担っていたのかをもっと詳しく知りたかった

19. 私はイベントプロデューサー！

【相互評価】「祇園祭を中心に「京の心意気」を留学生と発見しよう！」より

- ・参加型のイベントを開催して、アンケートをとっている点が素晴らしい
- ・イベントを何度も開催し、多様なアイデアを持っていることに驚いた
- ・イベントから何を学んだのかを具体的に伝えると、なお良いと思う
- ・1年で数多くのイベントを行うのは大変だったと思うし、苦勞がたくさんあったことも伝わってきた。作成した成果物のノウハウブックはプロジェクト特有のものなので、そちらをもっと強調したら良かったのではと感じた。

**【相互評価】「ソーシャル・プロデューサー養成講座～統一地方選挙と坂本龍馬をプロデュースせよ～」より
記載なし**

PBL推進支援センター事業報告

同志社大学PBL推進支援センター内規

2009年10月22日 制定

(設置)

第1条 同志社大学教育支援機構に、PBL推進支援センター（以下「センター」という。）を置く。

(目的)

第2条 センターは、PBL（Project-Based Learning）の推進及び支援を図り、もって同志社大学の教育の進展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) PBLに関する調査及び開発
- (2) PBLの計画、実施、評価に関する支援
- (3) 上記調査、開発及び支援に必要な図書・資料、情報の収集、整理及び情報の発信
- (4) 研修会、研究会、公開講座、セミナー、講習会等の開催
- (5) 同志社大学PBL推進協議会との連携及びその活動に対する支援
- (6) 報告書等出版物の刊行
- (7) その他前条の目的を達成するために必要な事項

(設置期間)

第4条 センターは、2009年11月1日から2012年3月31日まで設置する。

- 2 前項の設置期間を変更するときは、教務主任連絡会議の議を経て、学長の承認を得なければならない。

(センター長)

第5条 センターには、センター長を置く。

- 2 センター長は、専任教員の中から学長が委嘱する。
- 3 センターには、副センター長及び幹事若干名を置くことができる。
- 4 副センター長及び幹事は、センター長が専任教員の中から指名する。

(運営)

第6条 センターの運営を円滑に行うため、センター委員会を置く。

- 2 センター委員会は、センター長、副センター長、幹事及びセンター長が委嘱する者若干名で構成し、センター長が議長となる。
- 3 センター委員会に関する事項は、センター長が別に定める。

(事業費)

第7条 センターの事業費は、文部科学省「大学教育・学生支援推進事業 大学教育推進プログラム」補助金をもって充てる他、別に予算で定めるものとする。

- 2 センターは、所定の手続きを経て、委託研究費及びその他の寄付金を受け入れることができる。

(事業成果の報告及び公表)

第8条 センター長は、センター設置期間が終了したときは、終了したときから1年以内に、事業成果を学長に報告し、速やかに公表しなければならない。

(事務)

第9条 センターの事務は、教育支援機構教務部教務課が行う。

(改廃)

第10条 この内規の改廃は、教務主任連絡会議の議を経て、大学評議会において決定する。

附 則

この内規は、2009年10月22日から施行する。

PBL推進支援センター委員会

PBL推進支援センターの事業運営を円滑に行う為、学内教職員から成る委員会を設置し、審議、決定および、本取組の全事業についての自己点検・評価を行った。センターの事務は、同志社大学教育支援機構教務部教務課が担当した。

委員名簿

《2009年度》2009年11月1日～2010年3月31日

山田 和人	PBL推進支援センター長・文学部教授
金田 重郎	PBL推進支援センター副センター長・理工学部教授
西村 卓	学生支援センター所長・経済学部教授
八木 匡	経済学部教授
今川 晃	政策学部教授
鋤柄 俊夫	文化情報学部准教授
辻本 哲宏	生命医科学部教授
渡辺 孝義	キャリアセンター所長

《2010-2011年度》2010年4月1日～2012年3月31日

山田 和人	PBL推進支援センター長・文学部教授
金田 重郎	PBL推進支援センター副センター長・理工学部教授
眞銅 正宏	学生支援センター所長・文学部教授
八木 匡	経済学部教授
今川 晃	政策学部教授
鋤柄 俊夫	文化情報学部教授
辻本 哲宏	生命医科学部教授
初瀬 直章	キャリアセンター所長

● PBL推進協議会・大学間合同成果報告会・市民公開型教職員協同講習会 ●

PBL推進協議会

同志社大学、東京電機大学、専修大学が中心となり2007年6月に発足したPBL研究会を引き継ぐ形で2009年度にPBL推進支援センターの下に設置された研究会である。PBL（Project-Based Learning）教育に関する各大学等の先進的な取組や研究について情報交換を行い、効果的な授業運営や成績評価のあり方等の研究を通して、現場の授業運営に応用・実践していくことを目的とする。なお、本会の事務局は同志社大学教育支援機構教務部教務課が担当する。

《2009年度》

【第1回】 2010年1月9日（土） 14：00～17：00 甲南大学 西宮キャンパス（CUBE） [参加者22名]

○事例報告 報告者：甲南大学 マネジメント創造学部教授 井上 明

甲南大学 マネジメント創造学部 学生

○施設見学：甲南大学 西宮キャンパス CUBE

＜シンポジウムと兼ねて開催＞

【第2回】 2010年2月20日（土） 13：30～17：45 同志社大学 明德館21番教室

文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム

シンポジウム「未来を切り拓くPBL—「教育」の壁を越えて—」 [来場者：124名]

◇挨拶：同志社大学 副学長・文学部教授 田端 信廣

◇報告：同志社大学 PBL推進支援センター長・文学部教授 山田 和人

◇基調講演：京都市長 門川 大作 「京都市から見た地域連携教育の可能性」

◇事例報告1：小学校における試み～小大の取組みとして 京都市立朱雀第二小学校・同志社大学

◇事例報告2：生徒・教諭による報告～中高の取組みとして 大阪桐蔭中学校高等学校

◇事例報告3：大学生による報告～小大の取組みとして 同志社大学・同志社小学校

◇学生によるパネルディスカッション：「京都の文化を考える」2009年度プロジェクト科目受講生4名

◇シンポジウム：「『教育』の壁を越えて」

同志社大学 山田 和人、東京電機大学 情報環境学部教授 中村 尚五、大阪桐蔭中学校高等学校 教育相談室長 堤 晶子、京都市立朱雀第二小学校教諭 吉田 綾美、同志社大学 商学部3年 谷井 佳輔

【第3回】 2010年3月8日（月） 13：30～16：30 同志社大学 情報メディア館演習室 [参加者23名]

テーマ：正課科目と課外活動におけるPBL型学習の事例報告

○事例報告1：山口大学「おもしろプロジェクト」

報告者：山口大学 学生支援センター講師 辻 多聞

○事例報告2：同志社大学「ローム記念館プロジェクト」

報告者：同志社大学 理工学部教授 大久保 雅史

○事例報告3：「実践フロンランナープログラム」

報告者：広島大学 キャリアセンター教授 森 玲子

○施設見学：同志社大学 情報メディア館・ローム記念館

《2010年度》

【第1回】 2010年5月29日（土） 13：30～16：30 同志社大学 寒梅館208教室 [参加者21名]

テーマ：プロジェクト学習における導入教育の事例報告

○事例報告1：大阪産業大学「プロジェクトを成功させるためのメソッド教育」

報告者：大阪産業大学大学院 工学研究科教授 和氣 慎

○事例報告2：大阪産業大学「メソッド教育導入によるPBLシステム」

報告者：大阪産業大学大学院 工学研究科教授 田中 武雄

○事例報告3：広島経済大学「興動館教育プログラムの取組みについて」

報告者：広島経済大学 興動館科目センター長 濱田 敏彦

＜シンポジウムと兼ねて開催＞

【第2回】 2010年6月26日（土） 13：00～16：30 同志社大学 明德館1番教室

文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム

シンポジウム「PBL教育における多面的評価—社会が求める人材像—」[参加者：98名]

◇挨拶：同志社大学 副学長・法学部教授 土田 道夫

同志社大学 PBL推進支援センター長・文学部教授 山田 和人

◇講演：「社会の求めに応え得る大学教育 “キャリア教育” “就業力支援” に関する考察～企業と大学
双方の視点から～」

講演者：県立広島大学 総合教育センター 准教授 松尾 智晶

「こらからの市職員に求められる資質」

講演者：京都市 行財政局 人材活性化推進室長 山本 達夫

「公を担うNPO人について」

講演者：久留米市 市民活動サポートセンター センター長 今村 勲

「企業が期待する人間像」

講演者：ニチコン株式会社 会長 武田 一平

◇シンポジウム：「PBL教育における多面的評価—社会が求める人材像—」

広島県立大学 松尾 智晶、京都市 山本 達夫、ニチコン株式会社 武田 一平、

久留米市 市民活動サポートセンター 今村 勲、司会：同志社大学 山田 和人

【第3回】 2010年9月18日（土） 13：30～16：30 同志社大学 大阪サテライトオフィス [参加者22名]

○事例報告：「学習意欲を高めるナビゲータの役割」

報告者：ラーネットグローバルスクール・神戸情報大学院大学 炭谷 俊樹

ラーネットグローバルスクール 熊野 麻子

ラーネットグローバルスクール 青木 芳恵

【第4回】 2010年12月4日（土） 14：30～18：00 同志社大学 東京オフィス大セミナールーム

[参加者15名]

○事例報告：「早稲田大学プロフェッショナルズ・ワークショップについて」

報告者：早稲田大学 赤松 茂利（大学院公共経営研究科事務局）、末松 大（メディアネッ

トワークセンター)、竹迫 寿(教育システム課兼オープン教育センター)、牧井 文伸(メディアネットワークセンター)

【第5回】 2011年1月30日(日) 13:30～16:30 同志社大学 寒梅館6階大会議室 [参加者10名]

テーマ: 社会教育と博物館活動にみるPBL

○事例報告1: 「社会教育の視点からみたPBL」

報告者: 天理大学 人間学部講師 佐々木 保孝

○事例報告2: 「兵庫県立考古博物館における取り組みについて」

報告者: 兵庫県立考古博物館 学芸課主査 中川 渉

○事例報告3: 「四條畷市立歴史民俗資料館運営の取組み」

報告者: 四條畷市教育委員会 社会教育課主幹 野島 稔

<シンポジウムと兼ねて開催>

【第6回】 2011年2月26日(土) 13:00～16:30 同志社大学 明德館1番教室

文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】 大学教育推進プログラム

「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～」

シンポジウム「PBL教育における多面的評価-PBLは社会で役に立つか」[来場者146名]

◇挨拶: 同志社大学 副学長・法学部教授 土田 道夫

◇提言: 「大学教育に求めるもの」

提言者: 株式会社ニッチモ 代表取締役 海老原 嗣生

提言者: 読売新聞 東京本社 編集局教育取材班記者 松本 美奈

◇在学生による報告: 「プロジェクト科目で学生は何を学んでいるか」

報告1: 同志社大学2010年度プロジェクト科目「『花のキャンパスライフ』から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで」受講生 法学部4年 北村 龍弥

報告2: 同志社大学2010年度プロジェクト科目「映像の力・若者たちの見た京都」受講生 文学部4年 中谷 しのぶ

◇シンポジウム: 「PBL教育を考える～提言者・在学生・卒業生の視点から～」

株式会社ニッチモ 海老原 嗣生、読売新聞東京本社 松本 美奈、

鳥取環境大学 キャリア支援課 三宅 将史、京都市立松尾中学校 英語科教諭 安本 梓、

同志社大学法学部 北村 龍弥、同志社大学文学部 中谷 しのぶ

司会: 同志社大学 PBL推進支援センター長・文学部教授 山田 和人

《2011年度》

2011年度はPBL型教育における「評価」について、「PBL型教育の評価主体について考える」を年間テーマとし全4回に亘って開催した。

【第1回】 2011年9月17日(土) 13:30～16:30 同志社大学 クラーク記念館25番教室 [参加者17名]

○事例報告: 「PBL型教育における担当者のポジションを考える」

(同志社大学プロジェクト科目 科目担当者)

報告者: 株式会社空 専務取締役 遠藤 正彦

報告者: 上野 康治

報告者：NPO法人フラワー・サイコロジー協会 浜崎 英子

<フォーラムと兼ねて開催>

【第2回】 2011年10月22日（土） 13：00～17：10 同志社大学 臨光館301番教室

文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム

「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～」

PBL教育フォーラム2011「学生のやる気を引き出すPBL—実践的な学習をサポートする支援としかけ—」

[来場者142名]

◇挨拶：同志社大学 全学共通教養教育センター所長・言語文化教育研究センター准教授 西納 春雄

◇基調講演：「社会で求められる「実力」とは？ Why PBL？」

◇発表：参加校の学生による取組発表

発表1：早稲田大学 プロフェッショナルズ・ワークショップ

テーマ：「2011年KUMON×早稲田プロフェッショナルズ・ワークショップ」

指導者：早稲田大学 メディアネットワークセンター 牧井 文伸

発表者：池ヶ谷 英里（教育学部3年）、北方 萌子（文化構想学部2年）、中村 雄貴（政治経済学部1年）

発表2：明治大学 商学部 特別テーマ実践科目

テーマ：「グッド・イノベーション講座～新聞のプロモーション～」

指導者：明治大学 商学部准教授 福田 康典

発表者：宍戸 直樹（商学部3年）、中田 裕貴（商学部3年）、三島 岬（商学部3年）

発表3：広島経済大学 興動館教育プログラム

テーマ：「インドネシア国際貢献プロジェクト～インドネシアの復興を目指して～」

指導者：広島経済大学 興動館プロジェクトセンター長 榎本 伸悦

発表者：里信 和也（経済学部2年）、坪井 冬馬（経済学部2年）、大場 康平（経済学部2年）

発表4：甲南大学 CUBEプロジェクト科目

テーマ：「—MyKONAN改善プロジェクト学生が欲しい学内ポータルサイトの企画—」

指導者：甲南大学 マネジメント創造学部教授 井上 明

発表者：川井 健太（マネジメント創造学部3年）、河内 瞭（マネジメント創造学部3年）、佐々木 卓郎（マネジメント創造学部3年）

発表5：同志社大学 プロジェクト科目

テーマ：2011年度プロジェクト科目「京都の織物文化活性化計画！～織物の伝統技術について考えよう～」

指導者：同志社大学 プロジェクト科目嘱託講師 錦の伝統織物作家 龍村 周

発表者：中村 みゆ（文学部4年）、西川 久美子（社会学部3年）、田中 菜月（文学部3年）

◇パネルディスカッション：「学生と共に考える学習環境」

早稲田大学 池ヶ谷 英里、明治大学 宍戸 直樹、広島経済大学 里信 和也、甲南大学 川井 健太、同志社大学 田中 菜月

司会：同志社大学 PBL推進支援センター長・文学部教授 山田 和人

【第3回】 2011年11月12日（土） 13：30～16：20 同志社大学 寒梅館6階大会議室 [参加者20名]

テーマ：地域社会からPBL型教育を評価する

○事例報告：「地域の教育力を生かす連携型PBLの可能性と課題」

報告者：京都文教大学 人間学部教授 森 正美

京都府茶協同組合 事業課係長 田中 克典

宇治市都市整備部部长 木下 健太郎

【第4回】 2012年1月7日（土） 13：30～16：30 同志社大学 東京オフィス大セミナールーム

[参加者13名]

テーマ：PBL型教育における評価について

○事例報告1：「東京電機大学情報環境学部におけるPBL型授業の評価について」

報告者：東京電機大学 情報環境学部准教授 土肥 紳一

○事例報告2：「専修大学ネットワーク情報学部におけるPBL型授業の評価について」

報告者：専修大学 ネットワーク情報学部教授 飯田 周作

大学間合同成果報告会

大学間合同成果報告会はPBL型カリキュラムを実践する大学間の研究会を基盤とし、2009年度より実施されている事業である。初年度は本学、東京電機大学・専修大学の3大学での開催、2010年度より法政大学も加わり、各大学各学部の特色が出た個性的なテーマと、レベルの高い活動内容が報告された。

《2009年度》

(2009年度はPBL推進支援センターの前身であるPBL研究会として主催)

2009年6月13日（土） 13：00～17：30 同志社大学 東京オフィス大セミナールーム

参加大学：同志社大学・東京電機大学・専修大学

◇挨拶：専修大学 ネットワーク情報学部助教授・PBL研究会副会長 飯田 周作

<司会> 同志社大学 文学部教授・PBL研究会会長 山田 和人

◇発表：学生による取組発表

発表1：東京電機大学 2008年度年次縦断型PBL「東京電機大学に放送局を作ろう」

発表2：東京電機大学 2008年度基礎プロジェクト「ソフトウェアの設計・開発」

発表3：専修大学 2008年度ネットワーク情報学部プロジェクト

「リアルタイムコミュニケーション型教育支援システム“GATHER”の開発」

発表4：専修大学 ネットワーク情報学部 吉田・飯塚プロジェクト2008

「ITを活用した街の活性化」

発表5：同志社大学 2008年度プロジェクト科目「食育と健康（薬膳の食養生を中心として）」

発表6：同志社大学 2008年度プロジェクト科目

「私の『着てみたいきもの』をプロデュースしてみよう」

《2010年度》

2010年6月12日（土） 13：00～17：30 同志社大学 東京オフィス大セミナールーム

参加大学：同志社大学・東京電機大学・専修大学・法政大学

◇挨拶：専修大学 ネットワーク情報学部教授 飯田 周作

＜司会＞同志社大学 PBL推進支援センター長・文学部教授 山田 和人

◇発表：学生による取組発表

発表1：東京電機大学 2009年度年次縦断型PBL「サーバの構築および保守・運用」

発表2：東京電機大学 研究室間コラボレーションプロジェクト「フィジカルコンピューティングシステムの設計・開発」

発表3：法政大学 2009年度社会貢献・課題解決教育「企業の業務フローに関する課題解決商店街」

発表4：法政大学 2009年度社会貢献・課題解決教育「『おかず横丁』の活性化」

発表5：専修大学 2009年度専門必修科目プロジェクト「WorkeeS ネット学生の未来カタログ」

発表6：専修大学 2009年度専門必修科目プロジェクト「一人暮らしの大学生のための孤食と食品廃棄を減らす支援システム“shareat”」

発表7：同志社大学 2009年度プロジェクト科目「クラシックコンサート文化を創る」プロジェクト

発表8：同志社大学 2009年度プロジェクト科目「休耕地活用・自家菜園プロジェクト（食料自給率向上モデル特区）」

《2011年度》

2011年6月4日（土） 13：00～17：30 同志社大学 東京オフィス大セミナールーム

参加大学：同志社大学・東京電機大学・専修大学・法政大学

◇挨拶：法政大学大学院 政策創造研究科准教授 宮木 いっぺい

＜司会＞同志社大学 PBL推進支援センター長・文学部教授 山田 和人

◇発表：学生による取組発表

発表1：東京電機大学 2010年度基礎プロジェクトA/B 「レンタサイクルサービスの提案」

発表2：専修大学 2010年度専門必修科目プロジェクト「fraction—フラフラしてブルブル 寄り道ナビゲーション—」

発表3：法政大学 2010年度社会貢献・課題解決教育「ジュエリーの新規顧客開拓」

発表4：法政大学 2010年度社会貢献・課題解決教育「ViBlink(LEDライト)の商品企画と販促戦略」

発表5：同志社大学 2010年度プロジェクト科目「『スポーツイベント開催!』学生と地域の連携によるスポーツクラブ」

発表6：同志社大学 2010年度プロジェクト科目「花で生きる力を高める—花を活用する生活と社会活動の企画実践プロジェクト—」

市民公開型教職員協同講習会

市民公開型教職員協同講習会は、PBL推進支援センター主催の諸活動への教職員の参加促進、及びプロジェクト・リテラシーの養成とFD及びSDの推進を目的とし開催している。

《2009年度》

2009年度は「学習環境を考えるーグループワークを促す学びの空間デザイン」をテーマに、PBL等でチーム学習やグループ学習を行う際に求められる学習環境・空間について、全2回に亘り、取組事例を各社からご紹介いただき、理想の学習環境を議論した。

【第1回】 2010年1月23日（土） 14：00～16：00 同志社大学 クラークチャペル [参加者38名]

○講演：「学習環境を考えるーグループワークを促す学びの空間デザイン」

パワープレイス株式会社 取締役/教育・施設デザイン室ディレクター 濱村 道治

コクヨファニチャー株式会社 設計推進部 高橋 麻子

○ディスカッション：山田 和人、濱村 道治、高橋 麻子

【第2回】 2010年2月13日（土） 14：00～16：00 同志社大学 寧静館会議室 [参加者42名]

○講演：「学習環境を考えるーグループワークを促す学びの空間デザイン」

株式会社紀伊國屋書店 理事・営業推進本部長 牛口 順二

丸善株式会社 教育・学術事業本部学術情報SOL事業部ネットソリューションセンター長

矢野 正也

○ディスカッション：山田 和人、牛口 順二、矢野 正也

《2010年度》

2010年度はテーマを「経済産業界から学ぶPBL」とし、全4回に亘り、経済産業界で実践されている最新のプロジェクトの取組事例を各社からご紹介いただき、プロジェクトに内在する教育力を議論した。

【第1回】 2010年8月28日（土） 14：00～16：00 同志社大学 明德館1番教室 [参加者20名]

○講演：「TOYOBOの果敢な挑戦！ー繊維からバイオへー」

TOYOBO（東洋紡績株式会社）常務執行役員・バイオ事業総括部長 曾我部 行博

【第2回】 2010年9月25日（土） 14：00～16：00 同志社大学 至誠館21番教室 [参加者19名]

○講演：「自創型プロジェクト人材が実現する製造支援ソリューションビジネス」

JOHNAN株式会社 常務取締役 中野 哲浩

【第3回・第4回】 2011年3月5日（土） 13：30～17：00 同志社大学 明德館1番教室 [参加者24名]

○講演1：「新しいコンセプトによるメンズインナーの開発に学ぶ」

株式会社ワコール ウイングブランド事業本部 メンズインナー部 企画生産課

プロフェッショナルリーダー 赤野 美紀

○講演2：「滋賀銀行のCSR経営ーお金の流れで地球環境を守るー」

株式会社滋賀銀行 総合企画部 副部長兼CSR室長 西堀 武

《2011年度》

2011年度はテーマを「リーダーシップ」「チームビルディング」「著作権」に絞りこんで、プロジェクトを進

める上で必要な要素を全3回に亘って学んだ。

【第1回】 2011年7月22日（金） 16：45～18：15 同志社大学 クラーク・チャペル [参加者49名]

○講演：「プロジェクトにおけるリーダーシップ」

コミュニケーション株式会社 代表取締役 山元 賢治

【第2回】 2011年10月14日（金） 16：45～18：15 同志社大学 クラーク・チャペル [参加者35名]

○ワークショップ：「プロジェクトにおけるチームビルディング」

オフィスアニバーサリー 竹下 知子

【第3回】 2011年12月8日（木） 16：45～18：15 同志社大学 至誠館3階会議室 [参加者27名]

○講演：「著作権講座—発信することの責任」

映像作家 梶本 晃佑、写真家 武田 陽介、DoGA代表 CGアニメプロデューサー かまだ
ゆたか、社員食堂ラボラトリー運営 笠原 敬太

●●●●● シンポジウム (2009年度) ●●●●●

文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム
「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育～
課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～」シンポジウム

未来を切り拓くPBL—「教育」の壁を越えて—

2010年2月20日(土) 13:30～17:45
同志社大学 今出川キャンパス【明德館21番教室】

次 第

-
- 13:30 ■ あいさつ
田端 信廣 同志社大学 副学長 文学部 教授
- 13:40 ■ 報告
「PBL推進支援センター設置報告とシンポジウム開催の趣旨」
山田 和人 同志社大学 PBL推進支援センター長 文学部 教授
-
- 14:00 ■ 第1部
基調講演『京都市から見た地域連携教育の可能性』
門川 大作 京都市長
-
- 14:30 ■ 第2部
事例報告1 小学校における試み～小大の取組みとして
京都市立朱雀第二小学校・同志社大学
◆2009年度プロジェクト科目「演劇で子ども達と学ぶ企画実践プロジェクト」
【プロジェクト概要】「演劇を教育現場に取り入れる」をテーマに、小学校で演劇ワークショップを重ねるなかで、小学生とともに創る演劇ワークショップの新しいかたちを実践した。
吉田 綾美 京都市立朱雀第二小学校教諭 小学校五年生の担任
谷井 佳輔 同志社大学商学部3年
後藤いずみ 同志社大学社会学部2年
- 15:00 事例報告2 生徒・教諭による報告～中高の取組みとして
大阪桐蔭中学校高等学校
◆中学校国語科 国語科から「プロジェクトワーク」へ
【プロジェクト概要】国語科から発信された「生きる力」を育てる試みが、学年クラスの枠を取り払い、テーマを選んで体験型の学習をする「プロジェクトワーク」に成長していった経緯を報告します。
田村かすみ 大阪桐蔭中学校高等学校 国語科客員講師
神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程在学中
西原 輝将 大阪桐蔭高等学校3年生 ディベートクラブ所属
中村 朱里 大阪桐蔭中学校3年生 ディベートクラブ所属
- 15:30 事例報告3 大学生による報告～小大の取組みとして
同志社大学・同志社小学校
◆2009年度プロジェクト科目
「わらべ歌あそびを通して子ども達に京のこころつなげるプロジェクト」
【プロジェクト概要】京都に残る多様な「わらべうた」の取材し、記録保存するとともに、次世代につなげる活動を小学生、地域の方たちと一緒にやった。
竹澤 啓二 同志社大学 文学部4年
星野 康平 同志社大学 法学部4年
-
- 16:00 休憩 (15分)

<展示発表>

同志社大学 2009年度 プロジェクト科目 学生による展示発表1

◆「花のキャンパスライフ」から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで

【プロジェクト概要】 大学生活を複数メディアを通して発信。企画制作出演までを行う。ラジオ番組制作。

安藤 美穂 同志社大学 経済学部3年

同志社大学 2009年度 プロジェクト科目 学生による展示発表2

◆京都の伝統織物の情報発信プロジェクト

【プロジェクト概要】 カフェイベント・展示会・座談会を通して錦織の情報と魅力を発信。オリジナル文様制作。

堀内ゆうき 同志社大学 文学部4年

同志社大学 2009年度 プロジェクト科目 学生による展示発表3

◆私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう

【プロジェクト概要】 「私たちと着物の架け橋になる」をテーマに着付教室、ファッションショーを企画実践。

池田 優祐 同志社大学 経済学部4年

16:15

■第3部

学生によるパネルディスカッション 『京都の文化を考える』

同志社大学 2009年度プロジェクト科目受講生

◆わらべ歌遊びを通して子ども達に京のこころつなげるプロジェクト

竹澤 啓二 同志社大学文学部4年

星野 康平 同志社大学法学部4年

◆目指せ国民文化祭！誕生させよう京都学生文化コンシェルジュ！

渡名喜美和 同志社大学政策学部4年

◆私の「着てみたい・きもの」をプロデュースしてみよう

池田 優祐 同志社大学経済学部4年

◆「クラシック・コンサート文化を創る」プロジェクト

奥野世理奈 同志社大学文学部4年

16:55

シンポジウム 『「教育」の壁を越えて』

同志社大学 文学部 教授・PBL推進支援センター長 山田 和人

プロフィール：文学部国文学科教授。専門は日本近世文学。江戸時代前後の文学や芸能、国内外の人形芝居の調査・研究。日本近世文学会事務局代表、コンソーシアム京都高等教育研究センター高等教育実態研究プロジェクトリーダー、同志社大学プロジェクト科目検討部会長、2009年より同志社大学PBL推進支援センター長。

東京電機大学 情報環境学部 教授 中村 尚五

プロフィール：東京電機大学電子工学部ではデジタル信号処理関係を中心とした教育と研究に従事。平成13年より同大情報環境学部。学長補佐、情報環境学部学部長、同研究科委員長等を歴任。特に新設学部であった情報環境学部では教育改革に従事。印西市各種委員会の座長、千葉県内の研究会の会長等を務める。

大阪桐蔭中学校・高等学校 教育相談室長 堤 晶子

プロフィール：教育相談室長、カリキュラムマネジメント並びにPBL手法の研究開発を担当。PBLは中等教育においても知性・感性と行動力を備えた真のエリート育成に有効であることを実証している。

京都市立朱雀第二小学校 教諭 吉田 綾美

プロフィール：三十年間、教諭としてご活躍になり、2009年度から朱雀第二小学校五年生の担任として教壇に立たれる。

同志社大学 商学部 3年次生 谷井 佳輔

プロフィール：2009年度プロジェクト科目「演劇で子ども達と学ぶ 企画実践プロジェクト」リーダー

17:40

■あいさつ

山田 和人 同志社大学 PBL推進支援センター長 文学部 教授

17:45

終了

18:00～

■懇親会

19:30

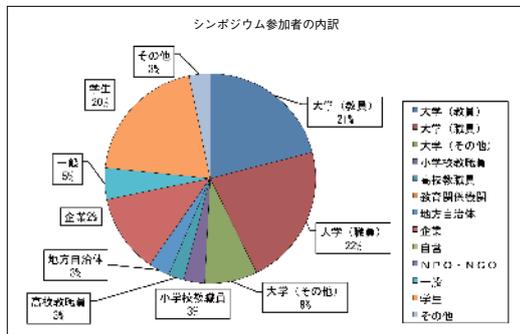
会場：同志社大学寒梅館1階 Hama de Paradis ※事前申込

文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラムシンポジウム
「未来を切り拓くPBL—「教育」の壁を越えて—

—アンケート結果について 抜粋—

●シンポジウム参加者の内訳

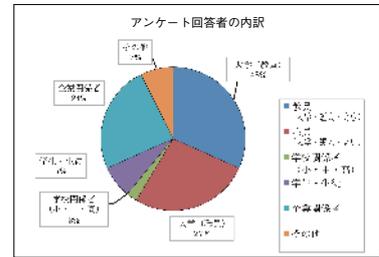
所属	人数
大学(教員)	26
大学(職員)	27
大学(その他)	10
小学校教職員	4
高校教職員	3
教育関係機関	0
地方自治体	4
企業	15
自営	0
NPO・NGO	0
一般	6
学生	25
その他	4
合計	124



■アンケート結果について

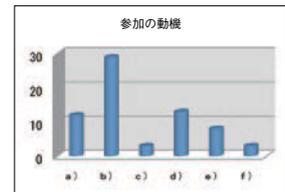
●アンケート回答者の内訳 ※参加者中、アンケートにご回答頂いたのは、約33%でした。

所属	人数
教員(大学・短大・高専)	13
職員(大学・短大・高専)	11
学校関係者(小・中・高)	1
学生・生徒	3
企業関係者	10
地方自治体関係者	0
その他	3
合計	41



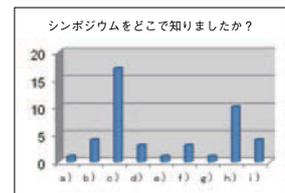
●参加の動機(複数回答可)

参加の動機	人数
a) 地域連携に興味があった	12
b) PBLに興味があった	29
c) 関係者から勧められた	3
d) 大学生の活動に興味があった	13
e) 小学生～高校生の活動に興味があった	8
f) その他	3



●シンポジウムをどこで知りましたか?(複数回答可)

シンポジウムをどこで知りましたか?	人数
a) 新聞広告	1
b) 同志社大学のホームページ	4
c) 案内パンフレット	17
d) 学内のポスター	3
e) 学外のポスター	1
f) メーリングリスト	3
g) 文部科学省ホームページ	1
h) 関係者に勧められて	10
i) その他	4

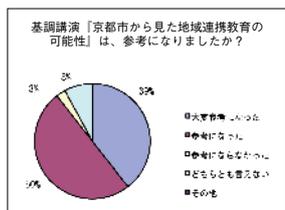


人数	強く思う	思う	どちらでもない	思わない	全く思わない
(1) PBLを大学でもっと普及させるべきである	29	9	0	0	0
(2) PBLは、小学生に有効な教育手段である	15	17	4	2	0
(3) PBLは、中学・高校生に有効な教育手段である	16	16	3	2	0
(4) PBLは、大学生に有効な教育手段である	27	9	0	1	0
(5) 大学と小学校～高校はもっと連携するべきである	18	12	6	0	0
(6) 大学は地域・社会と連携するべきである	24	11	1	0	0
(7) PBLは、教育の壁を越えていく可能性を持っている	20	13	3	0	0



●基調講演「京都市から見た地域連携教育の可能性」は、参考になりましたか?

基調講演「京都市から見た地域連携教育の可能性」は、参考になりましたか?	人数
a) 大変参考になった	15
b) 参考になった	19
c) 参考にならなかった	1
d) どちらとも言えない	3
e) その他	0



【教員】

- ・京都の、市と市民の教育にける思いの強さを感じる事が出来た。
- ・「教えることで自ら学ぶ」ということが分かり、大変参考になった。
- ・共汗という言葉が印象的だった。共通理解から、共に動き汗するという事の重要性を感じた。
- ・既存の制度に内閣から手を入れて、行政の自己改革を図ることが重要であり、その為外部の様々な力やリソース(大学やNPOも含めて)を、どんどん風通し良く取り入れていける仕組みを作って頂きたい。
- ・今の課題への対応も重要だが、未来世代に向けた努力を、皆でやっていかないと間に合わない気がする。

【職員】

- ・教育に対する熱い思いを、自らの言葉で語られていたのが印象的。自ら実践されてきた方だから、実感のこもった思いを感じた。
- ・市は学生にどんどん活動してもらいたいと思うが、地域も学生に対し、活動したことに對するキャリア支援などを、考えてみたらいいのではないかと考えた。

【学校関係者】

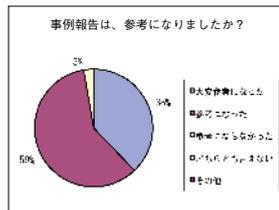
- ・学校の勉強と、実社会とのギャップが興味深かった。
- ・「胆識」にまで触られることは、これまでになかった気がする。また、後伸びする力、人間同士の関係から育った力については共感した。京都が学問のまちとしてこれまで発展し、またさらに飛躍する指針を分かりやすく示された気がする。

【学生・生徒】

- ・アイデアが良いが、実施に当たる教師、保護者達の負担をどう考えるか。「現場重視」というのであれば、教職員が進んでやれるような環境作りが大切であると思う。

●事例報告は、参考になりましたか？

事例報告は、参考になりましたか？	人数
a) 大変参考になった	14
b) 参考になった	22
c) 参考にならなかった	1
d) どちらとも言えない	0
e) その他	0



【教員】

- ・小学校と一緒に取り組むことで、学生にも責任が生まれる。小学校×大学生×プロで取り組むと、さらに強いものになるのではないか。外部（小学校教員など）からの意見も、学生が次を考える良い機会になるのでは。
- ・小学校、中学校、高校でもPBL教育が有効であることが良く分かり、大変参考になった。
- ・小学校側からの率直な意見、反応が聞けた。

【職員】

- ・大学だけでなく、小学校・中学校・高校それぞれの立場によるPBLについてお話を聞けたので、大変参考になった。
- ・初等・中等教育と大学教育の連携を考える上で、色々考えさせられた。また、熱心な先生、理解ある先生の個人的な頑張りや、どう組織的な動きにしていこうかについて、後のシンポジウムと併せて、大阪桐蔭の事例など参考になった。
- ・学生は無限の能力を持っている。教員側の厳しい指摘も必要と感じた。そうすればもっと学生は成長すると思った。

【学校関係者】

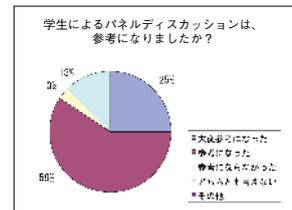
- ・学生がそれぞれの観点からプロジェクトを立ち上げ、実行していくという事は、自分を見つめ直し、新たに発見し、成長することだと思う。これは大人になって生きて行く上で、「枠」というものを打破できる人間になれることにつながると思う。

【学生・生徒】

- ・各プロジェクトに共通するリテラシー・スキル・メソッドを開発していく必要がある。

●学生によるパネルディスカッションは、参考になりましたか？

学生によるパネルディスカッションは、参考になりましたか？	人数
a) 大変参考になった	15
b) 参考になった	19
c) 参考にならなかった	1
d) どちらとも言えない	3
e) その他	0



【教員】

- ・PBLを通して「答え」に達したと締めくくっていたが、むしろ「課題」に達したというべきだと思われる。だとすると、PBLは大きな成果があったといえると感じた。
- ・皆の苦労や大変さ、楽しさをもっと知りたかった。

【職員】

- ・PBLを通して学んだことを自分の言葉で語ろうとしている姿が、PBLの教育的効果なのかと感じた。
- ・PBL手法により、パネルディスカッション参加学生達にとって、有意義な実践教育となっていると思う。
- ・学生・生徒・現場の教師のリアルな声が聞けたのは大変参考になった。皆さんが、「私の考え」「自分の意見」を持って発信されていたのが、とても良かった。こういう発表・発信が出来るようになるのが、PBLの教育効果の一つだと実感した。

【学校関係者】

- ・学生のありのままの意見を聞くことが出来たので参考になった。

【学生・生徒】

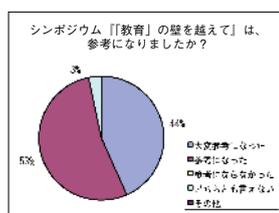
- ・PBL活動で成長した学生の生の意見を聞けたので、「学生によるパネルディスカッション」は良かった。彼ら、自信を持ってうまくディスカッションする姿を見て、PBL活動実施の意味を感じた。
- ・人前に出て、自分の意見をはっきり言えることは大切だと感じた。

【その他】

- ・地域コミュニティ間の「かけはし」「つなげる」ということが参考になった。

●シンポジウム「教育」の壁を越えては、参考になりましたか？

シンポジウム「教育」の壁を越えては、参考になりましたか？	人数
a) 大変参考になった	13
b) 参考になった	16
c) 参考にならなかった	0
d) どちらとも言えない	1
e) その他	0



【教員】

- ・大学教員だけでなく、小学校・中学校・高校・大学の立場の違う先生方の話が聞けたので、参考になった。
- ・大阪桐蔭の先生が話された、ゴール設定の話に共感した。高校の場合は大学受験、大学の場合は就職。でも本当のゴールはもっと先でそこに向かう事が大切なのに、目の前のゴールに向いてしまう。全体を聴いて思いついたのは、PBLは本来、単位や成績で学生をカリキュラムに取り込んでしまっただけではないのか、ということ。しかし、同志社大学の取組みには、日本の大学教育再生のための試みとして大きく期待する。

【職員】

- ・企業がテーマを出すということが印象に残った。足りない分については教員が出す。これが効果的だと思った。
- ・初等・中等教育現場の話が聞け、大変参考になった。
- ・様々な現場からの報告で、PBLについての実態を知る事ができ、問題点なども共有（洗い出し）出来た。
- ・評価について、今後も色々な話を聞ければと思う。

【学校関係者】

- ・小学校・中学校・高校・大学の関係者が揃ったので参考になった。

【その他】

- ・PBLは初めて聞いたが、もっと知り今後に生かして行きたいので、また会を開いて欲しい。参加して良かった。
- ・プロジェクト科目のテーマを、もっとスケールの大きなものに広げる必要があるのではないかと思う。

■その他、ご意見やご感想（自由記述）

【教員】

- ・「文化」を実感化する、文化を伝承してきた人と「協調」して伝える、協力する、学ぶ、というだけなら、あまり面白くないと思ったが、学生のパネルディスカッションで「ゆずれないものはゆずれない」という主張ができて楽しめた。シンポジウムでのやりとりも良かった。
- ・今後、PBL教育が教育現場に拡大し、生徒や学生が学びの本質を理解していくことを期待する。
- ・PBLとして様々なあり方を聞く事ができたが、それと同時にベーシックな共通の要素も見えた気がする。自分なりにまとめ、実践し改良していく、そのプロセスを仲間と共有することの大事さを改めて感じた。

【職員】

- ・多様な事例に触れる機会をくださり、有難うございます。どのお話にも共通してでてる「共有する」というキーワードは、私自身も日々重要性を実感しています。今後「共有」するための具体策、効果的な方策を考えなくてはならないし、ぜひ共有したいテーマだと思った。
- ・PBLの発展のためには、厳しい評価制度とタイムリーな問題の発掘だと考える。

シンポジウム (2010年度)

文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム

「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育
～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～」シンポジウム

PBL教育における多面的評価—社会が求める人材像—

2010年6月26日(土) 13:00～16:30
同志社大学 今出川キャンパス【明德館1番教室】

次 第

13:00 ■ あいさつ

土田 道夫 同志社大学 副学長 法学部 教授
山田 和人 同志社大学 PBL推進支援センター長、文学部 教授

■ 第1部 シンポジストによる講演

「社会の求めに応え得る大学教育

“キャリア教育” “就業力支援” に関する考察～企業と大学双方の視点から～」

松尾 智晶 / 県立広島大学 総合教育センター 准教授

「こらからの市職員に求められる資質」

山本 達夫 / 京都市 行財政局 人材活性化推進室長

「公を担うNPO人について」

今村 勲 / 久留米市 市民活動サポートセンター センター長

「企業が期待する人間像」

武田 一平 / ニチコン株式会社 会長

休憩 (15分)

16:00 ■ 第2部 シンポジウム

「PBL教育における多面的評価—社会が求める人材像—」

(シンポジスト)

松尾 智晶 県立広島大学総合教育センター 准教授

山本 達夫 京都市 行財政局 人材活性化推進室長

今村 勲 久留米市 市民活動サポートセンター センター長

武田 一平 ニチコン株式会社 会長

山田 和人 同志社大学PBL推進支援センター長、文学部 教授

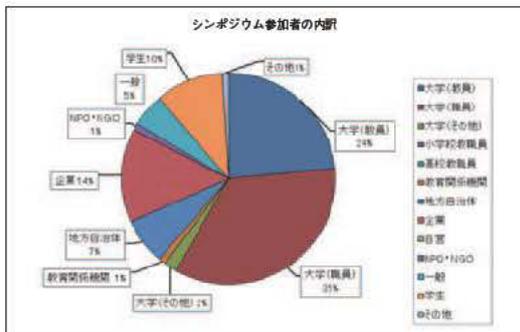
(司会) 今川 晃 同志社大学PBL推進支援センター委員、政策学部 教授

16:30 終了

文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラムシンポジウム
 「PBL教育における多面的評価—社会が求める人材像—」
 —アンケート結果について 抜粋—

●シンポジウム参加者の内訳

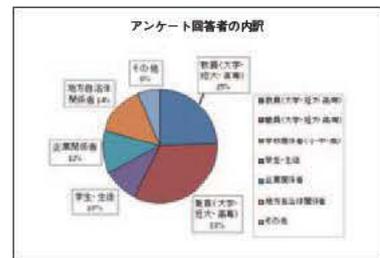
所属	人数
大学(教員)	23
大学(職員)	34
大学(その他)	2
小学校教職員	0
高校教職員	0
教育関係機関	1
地方自治体	7
企業	14
自営	0
NPO・NGO	1
一般	6
学生	10
その他	1
合計	98



■アンケート結果について

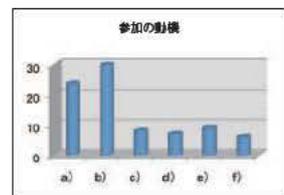
●アンケート回答者の内訳 ※参加者中、アンケートにご回答したのは約50%でした。

所属	人数
教員(大学・短大・高専)	12
職員(大学・短大・高専)	16
学校関係者(小・中・高)	0
学生・生徒	5
企業関係者	6
地方自治体関係者	7
その他	3
合計	49



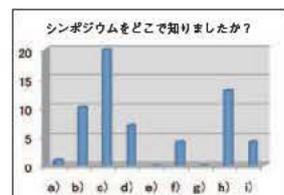
●参加の動機(複数回答可)

参加の動機	人数
a) 人材育成に興味があった	24
b) PBLに興味があった	30
c) 関係者から勧められた	9
d) 大学生の活動に興味があった	7
e) 地域連携の活動に興味があった	9
f) その他	6



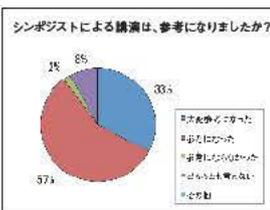
●シンポジウムをどこで知りましたか?(複数回答可)

シンポジウムをどこで知りましたか?	人数
a) 新聞広告	1
b) 同志社大学のホームページ	10
c) 案内パンフレット	20
d) 学内のポスター	7
e) 学外のポスター	0
f) メーリングリスト	4
g) 文部科学省ホームページ	0
h) 関係者に勧められて	13
i) その他	4



●シンポジストによる講演は、参考になりましたか?

シンポジストによる講演は、参考になりましたか?	人数
a) 大変参考になった	16
b) 参考になった	28
c) 参考にならなかった	1
d) どちらとも言いえない	4
e) その他	0



【教員】

- ・PBL教育を進めていく多数のヒントを得ることができた。
- ・これまでにない視点が明らかとなった。とりわけ、NPOの方のお話が参考になった。

【職員】

- ・京都市も、ニテコンも、求める人材像にはっきりとした背景があり、それを理解することが大切であると確認できた。
- ・各方面からの人材期待像を多面的に把握できた。
- ・大学のキャリア教育について、大学機関だけでなく、行政、NPO、企業からの視点が大変参考になった。
- ・シンポジストのお話がわかりやすく非常に参考になった。特にNPOについて理解が深まり、企業の求める人物像もポイントがよく理解できました。

【学生】

- ・これまで自分のキャリア形成の中にNPOという選択肢はなかったが、今回のシンポジウムを通して興味をもった。
- ・国、私、公部門それぞれの事情や求める人材が、この部門のトップに立つ方々から聞け、今後の人生設計をする上で大変参考になりそうだ。

【企業関係者】

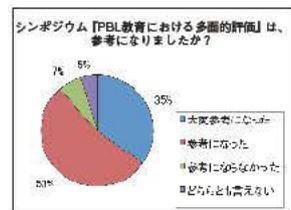
- ・参加、実践型の教育に企業としてどのように関われるかが見えてきたように思える。
- ・メリハリがあり柔らかい感じの中にも「芯」を感じた。

【地方自治関係者】

- ・それぞれの立場での意見が聞けて参考になった。

●シンポジウム「PBL教育における多面的評価」は、参考になりましたか?

シンポジウム「PBL教育における多面的評価」は、参考になりましたか?	人数
a) 大変参考になった	15
b) 参考になった	23
c) 参考にならなかった	3
d) どちらとも言いえない	2
e) その他	0



【教員】

- ・PBL教育での学生の評価(成績)を決める方法の一例を期待した。
- ・PBL教育のあり方について参考になった。

【職員】

- ・社会ニーズ(グローバル競争等)に対応する人材育成の重要性を感じた。しかし、一律的な人材育成論ではなく、層別別、個々の学生に応じた人材育成やそのための教育プログラムの開発、実践が必要であると強く感じた。
- ・コミュニケーション力という観点のない能力向上の必要性をやはり痛感するとともに、大学教育の中で実現することの難しさを改めて感じた。
- ・テーマ設定に対するレスポンスがやや弱かった面もあるが、武田氏の危機感も説得力があった。

【その他】

- ・このような様々な価値観を含めた上で、現時点での課題や今後作っていく評価軸策定にあたる必要があると感じた。

■その他、ご意見やご感想 (自由記述)

【教員】

- ・中高大連携で「学習力・人間力を高める新しい教育プログラムの研究構築」をPBLテーマにとりあげる必要性はどうか？7年間の教育メソッド(開発)を生かしてトライしていますが、期待以上の成果が見えてきている。
- ・市の方は大学と官とのコラボレーションということで益々重要になると思う。

【職員】

- ・コミュニケーション能力についての行政、企業、NPO、大学の各界の方から考えを聞けて有益であった。
- ・教育だけでは解決できない問題が多くあり、教育以外の周辺力をもっと活用する必要があるだろうと思った。
- ・講演は時間が短く感じられるほど興味あふれる内容であった。

【学生】

- ・社会人の方々が学生に対して思う本音を聞くことができ、大変貴重な経験になった。
- ・学生向けの説明会や講演会では絶対に聞けないようなお話ばかりで、このようなシンポジウムに学生も積極的に参加するべきだと思った。

【企業関係者】

- ・学生に限らず、最近人の話を聞くのが下手、人前でしゃべるのが下手な人が増えているように思われる。その意味でもPBL教育は様々な問題の解消に役立ち、大切な教育の場であるので継続してほしい。
- ・何事も“自主性”“好奇心”からという部分等、改めて考える機会になりました。
- ・“大学教育と社会”というテーマを初めて考える機会になった。今回のシンポジウムはもっと双方が密着した形になるようなキッカケになった。

【地方自治関係者】

- ・地域連携の活動についての話題を増やして欲しい。

【その他】

- ・嘱託講師を海外に求めるのも一方法かと思う。グローバルな人材という意味からも、学生にとってメリットがあると考える。

..... シンポジウム (2010年度)

文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム
 「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育
 ～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～」シンポジウム

PBL教育における多面的評価—PBLは社会で役に立つか—

2011年2月26日(土) 13:00～16:30
 同志社大学 今出川キャンパス【明德館1番教室】

次 第

13:00 ■あいさつ

土田 道夫 同志社大学 副学長、法学部 教授

13:10 ■第1部 提言

「大学教育に求めるもの」

海老原 嗣生

(株)ニッチモ代表取締役、人事経営雑誌『HRmics』編集長。1964年生まれ。
 大手メーカーを経て、リクルートエイブリック(現リクルートエージェント)入社。事
 業企画や新規事業立上げに携わった後、リクルートワークス研究所へ出向、『Works』
 編集長に。2003年よりリクルートエイブリック(現リクルートエージェント)にて数々
 の新規事業企画と推進、人事制度設計等に携わる。人材育成学会理事。
 専門は、人材マネジメント、経営マネジメント論。

松本 美奈

読売新聞 東京本社 編集局 教育取材班記者。
 教育ルネサンス「大学の實力—教育力向上の取り組み調査—」担当。

13:50 ■第2部 在学生による報告

「プロジェクト科目で学生は何を学んでいるか」

報告1 2010年度プロジェクト科目 「『花のキャンパスライフ』から
 情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで」

<プロジェクト概要>

身近な学生生活の中から素材を発見し、KBS京都や、朝日新聞等、様々な企業の協力を得ながら、大学生活とは何かを、等身大の学生から広く発信し続けるほか、伝統芸能公演、教育関連シンポジウムの運営にも携わる。

北村 龍弥 同志社大学 法学部 政治学科4年

2010年度プロジェクト科目「『花のキャンパスライフ』から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで」学生リーダー

- 14:10 報告2 2010年度プロジェクト科目 「映像の力・若者たちの見た京都」
 <プロジェクト概要>
 「若者の視線からみた京都」をテーマにドキュメンタリー映像を作成。映画・テレビ制作の現役・元プロの講師陣のもとで、企画・構成・撮影・編集・音楽・仕上げまで、一貫して行った。
 中谷 し の ぶ 同志社大学 文学部 英文学科4年
 2009年度プロジェクト科目「『クラシック・コンサート文化を創る』プロジェクト」学生リーダー
 2010年度プロジェクト科目「映像の力・若者たちの見た京都」学生リーダー

14:30 質疑応答

14:45 休憩 (15分)

15:00 ■第3部 シンポジウム

「PBL教育を考える～提言者・在学生・卒業生の視点から～」

山田 和人 同志社大学 文学部 教授・PBL推進支援センター センター長

文学部国文学科教授。専門は日本近世文学。江戸時代前後の文学や芸能、国内外の人形芝居の調査・研究。日本近世文学会事務局代表、コンソーシアム京都高等教育研究センター高等教育実態研究プロジェクトリーダー、同志社大学プロジェクト科目検討部会長、2009年より同志社大学PBL推進支援センター長。

海老原嗣生 株式会社 ニッチモ代表取締役

松本 美奈 読売新聞 東京本社 編集局 教育取材班記者

北村 龍弥 同志社大学 法学部 政治学科4年

中谷し の ぶ 同志社大学 文学部 英文学科4年

三宅 将史 鳥取環境大学 事務局 キャリア支援課

2007年度プロジェクト科目「量から質への『京都型ニューツーリズム』の開発と流通」、2008年度プロジェクト科目「私の『着てみたい・きもの』をプロデュースしてみよう」受講生。2009年文学部卒業後、鳥取環境大学職員として主に学生支援業務に携わる。

安本 梓 京都市立松尾中学校 英語科教諭

2007年度プロジェクト科目「子どものための『京都職場図鑑』作成プロジェクト」受講生。2008年文学部卒業後、京都教育大学大学院にて、英語教育における対話哲学を学ぶ。2010年から京都市立中学校にて教鞭をとる。

16:30 終了

<司会>

木村 珠莉 同志社大学 文学部 国文学科4年

2009年度プロジェクト科目「『花のキャンパスライフ』から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで」受講生。ラジオ番組パーソナリティ担当。

17:00 ~ ■懇親会

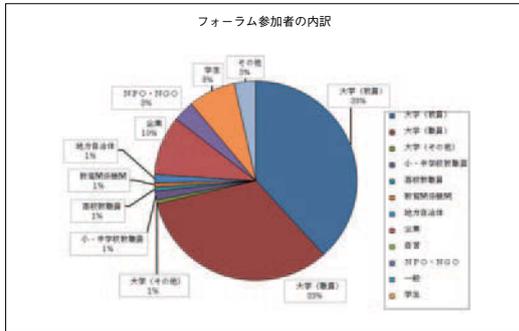
18:30 会場：同志社大学 アーモスト館 ゲストハウス ダイニングホール ※事前申込制

文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラムシンポジウム
 「PBL教育における多面的評価—PBLは社会で役に立つか—」
 —アンケート結果について 抜粋—

●シンポジウム参加者の内訳

所属	人数
大学(教員)	56
大学(職員)	48
大学(その他)	1
小・中学校教職員	2
高校教職員	1
教育関係機関	1
地方自治体	2
企業	14
自営	0
NPO・NGO	5
一般	0
学生	11
その他	5
合計	146

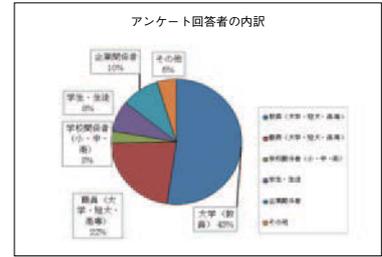
フォーラム参加者の内訳



■アンケート結果について

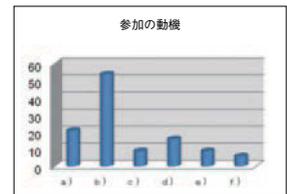
●アンケート回答者の内訳 ※参加者中、アンケートにご回答頂いたのは、約53%でした。

所属	人数
教員(大学・短大・高専)	33
職員(大学・短大・高専)	14
学校関係者(小・中・高)	2
学生・生徒	5
企業関係者	6
地方自治体関係者	0
その他	3
合計	63



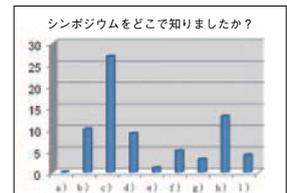
●参加の動機(複数回答可)

参加の動機	人数
a) 人材育成に興味があった	21
b) PBLに興味があった	54
c) 関係者から勧められた	9
d) 大学生の活動に興味があった	16
e) 地域連携の活動に興味があった	9
f) その他	6



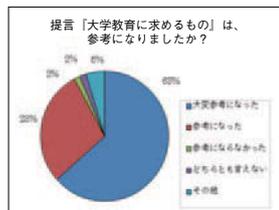
●シンポジウムをどこで知りましたか?(複数回答可)

シンポジウムをどこで知りましたか?	人数
a) 新聞広告	0
b) 同志社大学のホームページ	10
c) 案内パンフレット	27
d) 学内のポスター	9
e) 学外のポスター	1
f) メーリングリスト	5
g) 文部科学省ホームページ	3
h) 関係者に勧められて	13
i) その他	4



●第1部 提言「大学教育に求めるもの」は、参考になりましたか?

提言「大学教育に求めるもの」は、参考になりましたか?	人数
a) 大変参考になった	40
b) 参考になった	18
c) 参考にならなかった	1
d) どちらとも言えない	1
e) その他	3



【教員】

- ・授業外、学外からの意見を聞く機会が乏しいので、良い機会になった。
- ・大学と大学生の増加が大学教育と就職にどう影響しているか考えさせられた。
- ・企業の視点からの現状の捉え方、大学教育への提言が得られた。
- ・社会人の視点から大学教育への提言であり、適切な現実認識に基づく内容であった。
- ・大学への切り口が新しく、気づかされるが多かった。
- ・リアル感が不足していることが再認識できた。必要性を伝えながら教育に携わっていきたい。
- ・率直で大変おもしろかった。
- ・「必要とされる自分」を考えさせることは確かに大切だと思った。
- ・プロジェクトに参加する学生は放っておいても伸びていくが、参加しない学生のほうが問題となること、その学生をどのようにするのか知りたい。学生の力は大きいことを知り楽しみが出て来た。

【職員】

- ・「大学の實力」調査の提言の論議。必要とされる自分へもっていく教育方法に共感。
- ・海老原さんのレポートで、リベラルアーツ及びPBL教育の位置付けが明確になった！素晴らしい。
- ・社会に直結し、かつ汎用性のある大学教育とは何か、ということについて示唆に富んでいた。
- ・社会が大学教育に求めるものの背景が短時間で理解できた。
- ・パネリストのストレートな話が良かった。
- ・「必要とされる自分」というアプローチは学生にとって大切だと思う。「なりたい自分」というアプローチは学生にとってだけでなく大人にとってもハードルの高い問いかけである。

【学校関係者】

- ・最近の大学や学生の実態について、考えている事と実際とは違い、思い込んでいることなど改めて考えさせられた。

【学生】

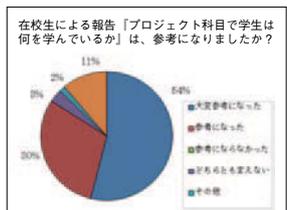
- ・大学教育を受けるものとして、参考になった。
- ・学生の実態について改めて実感させられた。
- ・リベラルアーツを学ぶ手段としてのPBLという考えが、とてもしっくりきた。

【その他】

- ・社会との関わりを含め、主体性とは何かを考える上でたいへん参考になった。
- ・PBLを進めた当事者のプロセスを内省した発表は好感が持たれた。

●第2部 在校生による報告「プロジェクト科目で学生は何を学んでいるか」は、参考になりましたか?

在校生による報告「プロジェクト科目で学生は何を学んでいるか」は、参考になりましたか?	人数
a) 大変参考になった	34
b) 参考になった	19
c) 参考にならなかった	0
d) どちらとも言えない	2
e) その他	1
f) 無回答	7



【教員】

- ・学生に自ら育つ力があることがよくわかった。
- ・学ぶことの意義を見つけて自己評価を行って変わっていることが知れた。
- ・学生が自主的かつ意欲的に取り組む力を身につけるプロセスがよく分かった。
- ・リーダーのあり方、成長を知ることが出来た。教訓は力の入れ方、時間・労力の配分だと感じた。
- ・PBLとして、どのレベルの活動をしているのかが興味があった。とても真正性の高い内容だと感じた。
- ・リーダーの成長する過程を、反省的思考の深まりをたどりながらの内容で、体験に基づく実りある報告に感動した。
- ・初めて勉強させていただったので、PBLのインフラについてもっと知りたい。しかし、それを自ら考え実行していくのが教員としてのPBLなのかもしれない。

【職員】

- ・学生自身の声でPBLの意義、成果を確認できた。
- ・「花のキャンパスライフ」のプロジェクト報告から、PBLは確かに「社会に役立つ」ものである理由が具体的に分かった。プレゼン能力の高さからもPBLの効果が証明されている気がする。
- ・学生がPBL教育で学んだスキルや見出した価値などがわかった。
- ・実践の目的を「授業だから」だけでなく参加学生自身が社会的意義を意識し、それを考えられるまでに展開できることは有意義だと思う。単にプロジェクトやイベントの実践だけでなく、そのプロセスで学生たちが得たことを言語化できることは素晴らしい。PBLで習得できる能力こそ社会人基礎力だと改められた。
- ・プロジェクトの成果と個人成果の評価について感心をもった。

【学校関係者】

- ・「何を学んでいるか」よりも「どのように変容したか」に興味があった。北村さん、中谷さん共にそこに重点を置いてお話をしていたので興味深く聞かせていただいた。これこそがPBLの魅力であり、学生たちがそれに自覚的であることが素晴らしいと感じた。
- ・学生、プロジェクトの違いにより特色が浮き彫りになったと思った。
- ・私の指導していたプロジェクトと違う面もあり、やはり個性が出るなと感じた。

【学生】

- ・成果報告会と異なる視点の報告を聞くことが出来た。

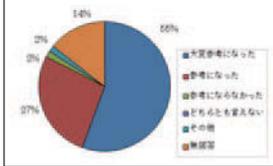
【企業関係者】

- ・プレゼンの仕方で、彼らの成果が十分わかった。
- ・大学生の目線と、社会に対してどのようにすれば情報を発信でき、また社会参加ができるか、参考になった。

●第3部 シンポジウム「PBL教育を考える～提言者・在校生・卒業生の視点から～」は、参考になりましたか？

シンポジウム「PBL教育を考える～提言者・在校生・卒業生の視点から～」は、参考になりましたか？	人数
a) 大変参考になった	35
b) 参考になった	17
c) 参考にならなかった	1
d) どちらとも言えない	0
e) その他	1
f) 無回答	9

シンポジウム「PBL教育を考える～提言者・在校生・卒業生の視点から～」は、参考になりましたか？



【教員】

- ・実学的手段としてよい参考のモデルとなった。
- ・PBLの必要性がよくわかった。
- ・教育の目標について見直す機会となった。
- ・大学の視点、企業の視点、学生の視点、様々な視点からの討論は単純に楽しめた。
- ・提言者の厳しい指摘が非常に興味深かった。
- ・リアルをいかにフィクションに取り組みかについて改めて考えさせられる機会となった。
- ・学生の生の声が聞けるシンポジウムのやり方は良いと思った。
- ・PBLは意欲的で自立した「学習力向上」に寄与するところ大であると感じた。新しい時代の教養教育の形であると思う。

【職員】

- ・すばらしいファシリテーションで本質的な問題について参考になる意見を聞いた。
- ・提言者のコメントや質問が的確かつ批判的でよかった。
- ・時間が不足するくらい濃い内容。提言者の方の話も学生・卒業生の方の貴重な意見が身にしみた。
- ・PBL教育こそ社会と連携できるものであり、さらにもっと社会へ還元できるものとなればよいと思った。
- ・「学びの中で変化していく状況、局面にどのように対応し、どのように乗り越えてゆくかを考える」を学生に教えていきたいと思った。

【学校関係者】

- ・PBLの経験者（プロジェクト科目等の卒業生）が、自分の「現場」でプロジェクトの仕掛け方等について語れる日が来ると、さらに大学生に要求できるレベル、身につかせなければならない事項が浮かび上がってくるのではと期待する。

【企業関係者】

- ・表面的で自己満足な褒め合いではなく、問題点をハッキリし、各々の意見を言える雰囲気づくりなど、パネリストと学生、卒業生の差を埋める運営がうまかった。
- ・薄原さん、松本さんの視点がストレートで鋭かった。
- ・学生、卒業生、社会人の三者が生々の意見、現場のものの見方や考え方が討議されていた点。

【その他】

- ・プロジェクトを通して自分達がどのように成長したかが発表の中心であった。プロジェクトを通して社会にどのように働きかけ、どのような形で継続しているかについても知れたかった。

■その他、ご意見やご感想（自由記述）

【教員】

- ・プロジェクトラーニングに取り組むチームは、プロジェクトだから、まさに会社でも部門横断的な活動となる。学部横断的な教育活動としてPBLは活用できると思った。ただし、根本的に「社会のための教育」ではなく「教育のための社会」とは何か、そのためのPBLを議論する必要もある。
- ・来年の企画を楽しみにしている。卒業生のコメントは特に貴重。これからもぜひ続けてほしい。
- ・第3部で松本さんが発言されたように、今の学生は法律の必要性でも肌で感じる機会が無いと聞き、PBLの必要性に気づかされた。どう大学が学生の気づこうとする気持ちに火をつけるのか、これが大事だと思う。
- ・PBLの「しかけ」についてもっと知りたいと思った。
- ・登壇者が本音を語っていたのでよかった。
- ・ゼミや卒論指導でもPBL的な学びは可能なだろうが、チームワークが重視される本学の科目は特色でもあり、優れていると思った。グループで研究する手法をあまり入れていない学問分野の学生にとっては卒論で身につけることが難しい内容・手法を得ることができたと感じた。
- ・すばらしいPBLを全国に発信していることに感服する。導入教育でメソッド教育(コンセプトのたて方、企画書のつくり方、ノート術、PERT、PDPCによる計画推進力等)が加わると更にすごいと思う。

【職員】

- ・ディスカッションが非常に面白かった。提言者のコメントや質問が刺激的だったので、それに対する考えについては学生だけではなく、もっと教職員側からもお話を伺いたかった。
- ・PBLが大事だといわれる現状、時代である事が残念。PBLを通して社会人基礎力等のグループワーク、コミュニケーション能力が身につくが、文字通り「基礎力」に過ぎない。それがあるからといって競争に必ず勝てるわけではない。できれば1・2回生でその段階を通過して、4回生はもっとご自身の専門に打ち込んで、個人の能力を上げられるような時代になればいいと思った。

【学生】

- ・プロジェクトを何のためにしているのか、私はそれをもっと知りたいと思った。
- ・目標課題設定が大事、自己満足で終わらせない、それは基本だと思う。なぜこれが大事なのか、どうして大事だと気づいたのか、そこから自分が見る社会や人とのつながりは何なのか、人と関わる上で何を学んだのか、もっと深く聞いてみたかった。
- ・非常に参考になった。また参加したいと思う。

【企業関係者】

- ・素晴らしいメンバー、内容だった。PBLが学生の成長にこれだけ貢献出来ることを実感し、信じている。

フォーラム (2011年度)

文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム
 「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育
 ～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～」

PBL教育フォーラム2011 学生のやる気を引き出すPBL

—実践的な学習をサポートする支援としかけ—

2011年10月22日 (土) 13:00 ~ 17:10
 同志社大学 新町キャンパス【臨光館301番教室】

次 第

-
- 13:00 ■あいさつ
 西納 春雄 同志社大学 全学共通教養教育センター所長
- 13:10 ■本日のフォーラムについて
 山田 和人 同志社大学 PBL推進支援センター長
-
- 13:15 ■第1部 基調講演
 テーマ: 社会で求められる「実力」とは? Why PBL ?
-
- 13:50 休憩 (15分)
-
- 14:00 ■第2部 学生による取組発表
- ～ 14:20 発表1 早稲田大学 プロフェッショナルズ・ワークショップ
 テーマ: [2011年KUMON×早稲田 プロフェッショナルズ・ワークショップ]
 指導者: 牧井 文伸 (早稲田大学 メディアネットワークセンター)
 発表者: 池ヶ谷英里 (教育学部3年)
 北方 萌子 (文化構想学部2年)
 中村 雄貴 (政治経済学部1年)
- 14:25 発表2 明治大学 商学部 特別テーマ実践科目
 ～ 14:45 テーマ: [グッド・イノベーション講座～新聞のプロモーション～]
 指導者: 福田 康典 (明治大学 商学部准教授)
 発表者: 宍戸 直樹 (商学部3年)
 中田 裕貴 (商学部3年)
 三島 岬 (商学部3年)
- 14:50 発表3 広島経済大学 興動館教育プログラム
 ～ 15:10 テーマ: [インドネシア国際貢献プロジェクト～インドネシアの復興を目指して～]
 指導者: 榎本 伸悦 (広島経済大学 興動館プロジェクトセンター長)
 発表者: 里信 和也 (経済学部2年)
 坪井 冬馬 (経済学部2年)
 大場 康平 (経済学部2年)

- 15 : 15 発表4 甲南大学 CUBEプロジェクト科目
～ 15 : 35 テーマ : 「—MyKONAN改善プロジェクト学生が欲しい学内ポータルサイトの企画—」
指導者 : 井上 明 (甲南大学 マネジメント創造学部教授)
発表者 : 川井 健太 (マネジメント創造学部3年)
河内 瞭 (マネジメント創造学部3年)
佐々木卓郎 (マネジメント創造学部3年)
- 15 : 40 発表5 同志社大学 プロジェクト科目
～ 16 : 00 テーマ : 2011年度プロジェクト科目
「京都の織物文化活性化計画!～織物の伝統技術について考えよう～」
指導者 : 龍村 周 (同志社大学 プロジェクト科目嘱託講師 錦の伝統織物作家)
発表者 : 中村 みゆ (文学部4年)
西川久美子 (社会学部3年)
田中 菜月 (文学部3年)

16 : 00 休憩 (10分)

-
- 16 : 10 ■第3部 パネルディスカッション
～ 17 : 00 「学生と共に考える学習環境」
池ヶ谷英里 早稲田大学 教育学部3年
穴戸 直樹 明治大学 商学部3年
里信 和也 広島経済大学 経済学部2年
川井 健太 甲南大学 マネジメント創造学部3年
田中 菜月 同志社大学 文学部3年
＜パネルディスカッション司会＞
山田 和人 同志社大学 PBL推進支援センター長

16 : 30 終了

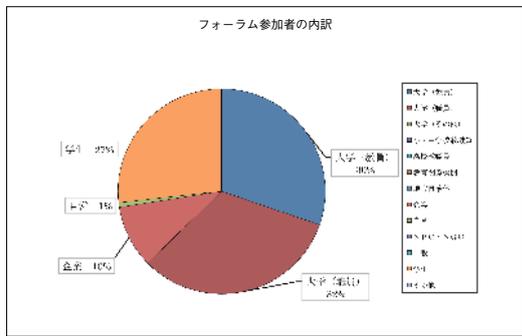
＜司会＞宇崎 学 株式会社SIGEL システム営業部

文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム
PBL教育フォーラム2011
学生のやる気を引き出すPBL～実践的な学習をサポートする支援としかけ～

—アンケート結果について 抜粋—

●フォーラムの参加者の内訳

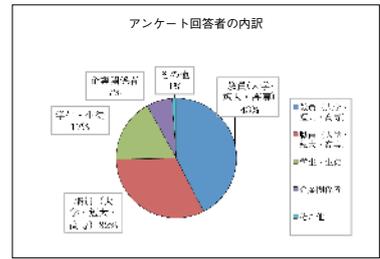
所属	人数
大学(教員)	43
大学(職員)	46
大学(その他)	0
小・中学校教職員	0
高校教職員	0
教育関係機関	0
地方自治体	0
企業	14
自営	1
NPO・NGO	0
一般	0
学生	38
その他	0
合計	142



■アンケート結果について

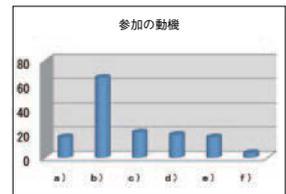
●アンケート回答者の内訳 ※参加者中、アンケートにご回答頂いたのは約61%でした。

所属	人数
教員(大学・短大・高専)	37
職員(大学・短大・高専)	28
学校関係者(小・中・高)	0
学生・生徒	15
企業関係者	6
地方自治体関係者	0
その他	1
合計	87



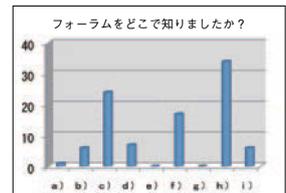
●参加の動機(複数回答可)

参加の動機	人数
a) 人材育成に興味があった	17
b) PBLに興味があった	66
c) 関係者から勧められた	21
d) 大学生の活動に興味があった	19
e) 地域連携の活動に興味があった	17
f) その他	4



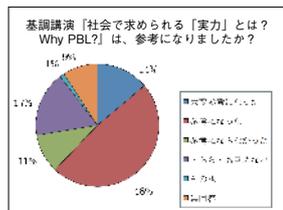
●シンポジウムをどこで知りましたか?(複数回答可)

シンポジウムをどこで知りましたか?	人数
a) 新聞広告	1
b) 同志社大学のホームページ	6
c) 案内パンフレット	24
d) 学内のポスター	7
e) 学外のポスター	0
f) メーリングリスト	17
g) 文部科学省ホームページ	0
h) 関係者に勧められて	34
i) その他	6



●第1部 基調講演「社会で求められる『実力』とは? Why PBL?」は、参考になりましたか?

基調講演「社会で求められる『実力』とは? Why PBL?」は、参考になりましたか?	人数
a) 大変参考になった	12
b) 参考になった	42
c) 参考にならなかった	9
d) どちらとも言えない	15
e) その他	1
f) 無回答	8



【教員】

- ・PBLの学びと企業において必要となる力がつながっている事がよく理解できた。
- ・企業が活躍できる人のまとめと、社会人基礎力とのつながりが良かった。
- ・大学で地域連携活動を支援・担当しており、興味深く拝聴した。こうした課外活動を社会人基礎力や事業推進力、キャリアデザイン力育成に結びつけ、授業化・単位化する事の良し悪しを考え判断する良い課題提示だった。

【職員】

- ・実際の企業の方が会社の中で活躍できる項目を挙げ、それを社会人基礎力に置き換えているところに興味を持った。
- ・アップルの商品を使ってどのような教育を大学がしているのか、もっと具体的な事例を紹介して欲しかった。
- ・実際担当した科目についての意見や感想、今後求めるものの話についても聞いてみたかった。

【学生】

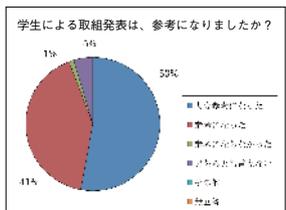
- ・社会からの視点を知れてよかった。
- ・Apple社からの視点で考える、大学の授業のあり方を聴くことができ興味深かった。これからの授業では、iPadのようなIT製品を導入していくことで、より良い授業を行うことができるのだろうと思った。

【企業関係者】

- ・アップル製品の説明について、もっと具体的な活用事例までお話が聞けると良かった。

●第2部 学生による取組発表は、参考になりましたか?

学生による取組発表は、参考になりましたか?	人数
a) 大変参考になった	46
b) 参考になった	36
c) 参考にならなかった	1
d) どちらとも言えない	4
e) その他	0
f) 無回答	0



【教員】

- ・プロジェクトに直接携わる学生の生の声は大変よかった。
- ・PBLと一言でまとめられない、多様な方法や考え方がある事を知った。
- ・学生が苦しんでやり遂げたプロセスがリアルでよかった。
- ・特にPBLの成功体験だけでなく失敗例やウィークポイントが聞けたことが良かった。
- ・PBLでは実社会の課題に取組むため、プロジェクトの過程では担当教員だけが指導に携わるのではなく、必要に応じて(調査方法、マナー、マーケティングなど)学内の色々な分野の教員の力を借りながら進めている点に能動的な教育ヒントを見出した。
- ・ともすればPBLの良い部分だけが紹介されがちだが、甲南大学の悪い点も含めた話はおもしろかった。
- ・学生たちが体験したことをよく内省し、言葉で表現できているのが参考になった。
- ・実際にPBLを体験した学生の熱意が伝わった! 大学や企業のサポートの重要性を強く感じ、企画する学生側をサポートする問題点についても整理することができた。

【職員】

- ・学生から語られる言葉の端々に、今後の自分の大学で考えなければならない事のヒントをもらった。
- ・大学の規模、立地、学生の質、学生の専門など、各事例を比較できる要素が多かった。
- ・学生のプレゼンテーション能力の高さを感じた。
- ・PBLの良い点、得られたもの、課題だけでなく必要な仕掛け、環境などについて学生自身の視点で話されていたことが非常に参考になった。
- ・学ぶ環境の整備は、これまで学生さんの力を大きく引き出すものなのかと驚いた。
- ・他大学の発表(プロジェクトの概要)が一度に開けて良かった。同じPBLといえども大学によって異なり、それは自分の大学と合致するものでもなかった。各大学の取組を自分の大学でも生かせるような気がした。
- ・成果は十分あがっているのに、次は大学の教育(カリキュラム・環境)マネジメントを整備する段階だと思う。もっともっとPBLの意義を世に、学外に発信して変えていかないといけないと思った。

【学生】

- ・先生側からのプロジェクトについての見方も分かった。

- ・いろいろな経験を積んできた学生から「何を学んだのか、改善点は何か」などを聞く事ができた。
- ・他大学のプロジェクトの内容を聞いて非常に刺激を受けた。
- ・他大学のPBLがどのようなものか知ることができて興味深かった。
- ・同い年の学生が、様々な取組みの中からPBL教育の効果を実感できているのだと感じた。
- ・最初は圧倒されるばかりでしたが、「自分もやればできるはず」と意欲が湧いてきました。

【企業関係者】

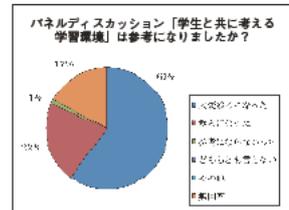
- ・大学の学びの実態が分かり非常に参考になった。
- ・甲南大学のプレゼンにもあったように、PBLの活用が大学の施設や時間制構成に影響を与えると発言は非常に勉強になった。

【その他】

- ・甲南大学のPBLの取組み方（全体授業との関係など）に関心を持った。
- ・大学の学びの実態が分かり非常に参考になった。
- ・プロジェクト実施上の課題に共感した。対処法等たいへん参考になった。

●第3部 パネルディスカッション「学生と共に考える学習環境」は参考になりましたか？

パネルディスカッション「学生と共に考える学習環境」は参考になりましたか？	人数
a) 大変参考になった	53
b) 参考になった	19
c) 参考にならなかった	1
d) どちらとも言えない	0
e) その他	0
f) 無回答	15



【教員】

- ・学生たちの素晴らしい姿勢、発言、これがPBLの成果だと確信できた。
- ・プレゼンの時よりもさらに学生の成長が伺えた。
- ・プロジェクトの中からみた活動の様子がよく分かりました。
- ・学生の不満も含めた本音を聞いたのが良かった。
- ・発表に比べ、学生が生き生きと発言していたのが印象的で好感が持てた。違う大学の学生同士のパネルディスカッションは良い企画だと思う。
- ・問題意識の高い学生たちの自発的なトークは、語られる内容もさることながら、その態度にも参考になる点が多かった。

【職員】

- ・学生たちの「本音」といえる言葉が引き出されていて素晴らしいかった。
- ・自分と同じような考えを持つ方の意見も参考になったし、違う視点を持っている人の意見にも刺激を受けた。
- ・学生視点から、各大学の取組みについての問題点が聞けたのは貴重であった。
- ・様々な論点をすくいあげていた。
- ・用意されたプレゼンでは分からない生の声を聞く事ができた。
- ・自分の考えを自分の言葉できちんと話していたことが印象的だった。
- ・活動のことや、それにより得られたこと等をしっかりと口調で話される学生さんの姿から、PBLの成果が表れているのを感じた。「単位化する・しない」「必修化する・しない」といった、導入にあたり課題となる点についても参考になる意見が聞けた。

【学生】

- ・学生目線で議論が活発、論点整理が明確。
- ・本音のない、非常に素直な意見が聞けた。
- ・これからのPBL教育について深く考える事が出来た。
- ・プレゼンの中にあつた話題について深く聞くことができた。(特にプロジェクトの魅力、問題点を学生がどのように考えているのか、プロジェクトを知らない(又は理解のない)学生にどう伝えるか)

【企業関係者】

- ・担当者に対する思いや関わり方についての意見はたいへん参考になった。
- ・PBLを受講する学生の能力の高さ、成長を感じました。とても有意義な取組みだと思います。
- ・第2部で聞けなかった学生さんの生き生きとした生の声が開けました。

■その他、ご意見やご感想（自由記述）

【教員】

- ・プロジェクト活動に参加していない学生に聴かせたい内容だ。教員の立場としてはさらに、研究的な視点、運営、企画に対する視点のパネルディスカッションがあるとありがたいと思う。学生の視点から、教員（担当者）への対応のあり方などは大変参考になった。
- ・学生によるパネルディスカッションがとても有効であった。教員によるディスカッションよりもさらに深く、本質的・本音の議論ができていたように思う。
- ・PBLの可能性が大学教育の中で広がりゆくことと同時に、その効果の評価について一層見つめていきたいと思った。

【職員】

- ・PBLを経た学生の意見を聞いてみると、PBLの成果を感じる事ができた。一方で学生さんの甘えも取れる要求が大きく、せつなく世の中との接点を持ったのに残念でした。逆に言うと、世の中との接点を持たなければ、大学として自信を持って卒業生を送り出せないと思った。
- ・このようなフォーラムはとても意義深いと思う。ただし、特に企業との連携において、企業にとってどのようなメリットがあるか、また、企業を含めてどう教育マネジメントをしていくのが課題だと思う。
- ・学生の発表と共に、プロジェクトを担当した企業の方からの発表、意見、大学のサポート体制を聞く事ができればさらに良かった。

【学生】

- ・今回は学校関係者の大人の方が多かったが、ぜひ学生にも聞いてほしい、たいへん良い意味のあるフォーラムだった。
- ・最後のパネルディスカッションはとてもよかった。学生同士の意見は、学生である私も未慮できる部分もあり、学べる事が多くあった。
- ・甲南大学の方がおっしゃった、各大学の活動内容の共有はとても面白そうなので実施してほしい。

【企業関係者】

- ・PBLがいかに学生の自信・育成につながっているのかがよく分かった。

【その他】

- ・今回の報告会での意見や他大学の活動も参考にしながら、改善進化させる事が重要だと考えます。

..... シンポジウム (2011年度)

文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム
 「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育
 ～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～」シンポジウム

第3弾 学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦！

—誰が何をいかに評価するのか？—

2012年2月18日(土) 13:00～16:40
 同志社大学 今出川キャンパス【明德館1番教室】

次 第

■挨拶

- 13:00 土田 道夫 同志社大学副学長 教育支援機構長 法学部教授
 13:10 山田 和人 同志社大学PBL推進支援センター長 文学部教授

13:20 ■基調講演

「評価とは何かの基本に戻ってPBLの評価を考える」

溝上 慎一 京都大学高等教育研究開発推進センター准教授

1970年福岡県生まれ。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学高等教育教授システム開発センター・助手を経て、2003年より京都大学高等教育研究開発推進センター准教授。京都大学博士(教育学)。専攻は青年心理学、自己形成論、大学生の学びと成長。著書に『現代青年期の心理学－適応から自己形成の時代へ－』(2010有斐閣選書)、『大学生の学び・入門－大学での勉強は役に立つ！－』(2006有斐閣アルマ)など。

■発表

- 14:00 発表1 2011年度プロジェクト科目「心ぬくもる『絵本』に出会う
 ～絵本ソムリエ・プロジェクト～」

【プロジェクト概要】

「絵本は心のごちそう」をテーマに、まだ出会っていない感情に出会える「絵本」を通じた、教養の場(イベント)のプロデュースを目的に活動しました。

川崎 裕未 同志社大学社会学部社会福祉学科3年 サブリーダー
 金丸 誠克 同志社大学経済学部経済学科3年

- 14:15 発表2 2011年度プロジェクト科目「京都の織物文化活性化計画！
 ～織物の伝統技術について考えよう～」

【プロジェクト概要】

京都の伝統織物である「錦」をつくる西陣の職人さんを訪ね、見学取材を重ねる中で錦織物の深い魅力に触れる一方、「後継者問題」「伝統技術継承の危機」など錦織物が抱える厳しい現実を前にし、「まず一人でも多くの人に知ってもらうことが『活性化』に向けての第一歩ではないか」の原点に戻って活動しました。

田中 菜月 同志社大学文学部英文学科3年 サブリーダー
 西川久美子 同志社大学社会学部教育文化学科3年
 平城奈津子 同志社大学政策学部政策学科2年

14:30 休憩 (15分)

14:45 ■報告

「東京電機大学情報環境学部におけるPBL型授業の評価について」

土肥 紳一 東京電機大学情報環境学部准教授

東京電機大学工学研究科修士、東京電機大学工学部第一部電子計算機センターを経て、2007年より東京電機大学情報環境学部情報環境学科准教授。「[工学]のおもしろさを学ぶ」(共著・東京電機大学編、2010東京電機大学出版)など。2002年度より情報環境学部におけるPBL型授業の開設・運営に携わる。

15:00 「専修大学ネットワーク情報学部におけるPBL型授業の評価について」

飯田 周作 専修大学ネットワーク情報学部教授

北陸先端科学技術大学院大学博士後期課程修了。博士(情報科学)。研究分野は情報学基礎およびソフトウェア工学。形式手法の応用に興味を持つ。専修大学ネットワーク情報学部3年次必修「プロジェクト科目」プロジェクト実施委員会委員長。

15:15 ■パネルディスカッション

「誰が何をいかに評価するのか？」

溝上 慎一 京都大学高等教育研究開発推進センター准教授

土肥 紳一 東京電機大学情報環境学部准教授

飯田 周作 専修大学ネットワーク情報学部教授

川崎 裕未 同志社大学社会学部社会福祉学科3年

西川久美子 同志社大学社会学部教育文化学科3年

山田 和人 同志社大学文学部教授・PBL推進支援センター長

文学部教授(国文学科)。専門は日本近世文学。江戸時代前後の文学や芸能、国内外の人形芝居の調査・研究。日本近世文学会委員、日本文学協会委員、芸能史研究会評議委員。同志社大学プロジェクト科目検討部会長、2009年より同志社大学PBL推進支援センター長。

16:40 終了

<司会>

牧 知香良 同志社大学 政策学部政策学科3年

2011年度プロジェクト科目『花のキャンパスライフ』から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで』学生リーダー

17:30 ■懇親会

～ 19:00 会場：同志社大学 寒梅館6階 大会議室 ※事前申込制

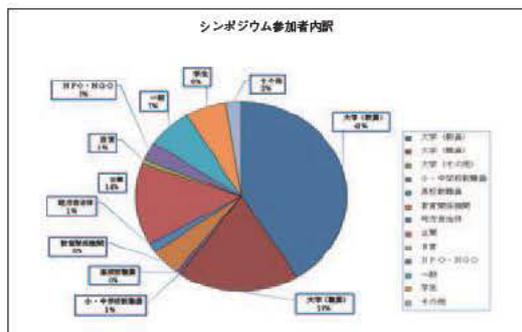
文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラムシンポジウム
 「第3弾 学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦！
 —誰が何をいかに評価するのか?—」

—アンケート結果について 抜粋—

●シンポジウム参加者内訳

所属	人数
大学（教員）	53
大学（教員）	24
大学（その他）	0
小・中学校教職員	1
高校教職員	0
教育関係機関	6
地方自治体	2
企業	18
自営	1
NPO・NGO	4
一般	9
学生	6
その他	3
合計	129

シンポジウム参加者内訳

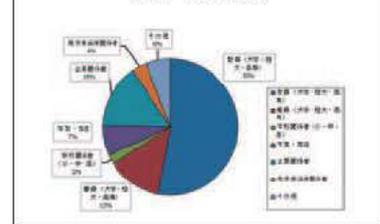


■アンケート結果について

●アンケート回答者の内訳 ※参加者中、アンケートにご回答いただいたのは約65%でした。

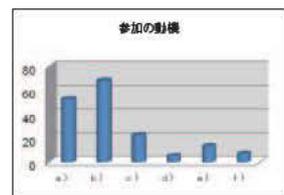
所属	人数
教員（大学・短大・高専）	45
職員（大学・短大・高専）	11
学校関係者（小・中・高）	2
学生・生徒	6
企業関係者	13
地方自治体関係者	3
その他	5
合計	85

アンケート回答者の内訳



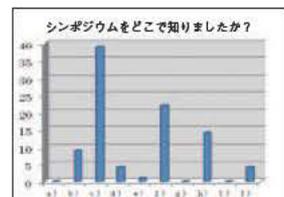
●参加の動機（複数回答可）

参加の動機	人数
a) テーマに興味があった	53
b) PBLに興味があった	69
c) 人材育成に興味があった	23
d) 関係者から勧められた	6
e) 大学生の活動に興味があった	14
f) その他	8



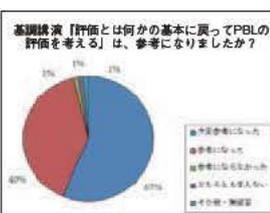
●シンポジウムをどこで知りましたか？（複数回答可）

シンポジウムをどこで知りましたか？	人数
a) 新聞広告	0
b) 関係社大学のホームページ	9
c) 案内パンフレット	39
d) 学内のポスター	4
e) 学外のポスター	1
f) メールングリスト	22
g) 文部科学省ホームページ	0
h) 関係者に勧められて	14
i) 地下鉄今川駅構内の展示	0
j) その他	4



●基調講演「評価とは何かの基本的な視点でPBLの評価を考える」は、参考になりましたか？

基調講演「評価とは何かの基本的な視点でPBLの評価を考える」は、参考になりましたか？	人数
a) 大変参考になった	48
b) 参考になった	34
c) 参考にならなかった	1
d) どちらとも重くない	1
e) その他・無回答	1



【教員】

- ・PBLは複数の教員が進めるため評価を逃げがちであるが、やはりそれでも評価の枠組みに取り組むことの大切さを認識することができた。
- ・ルーブリックの導入についてよく理解できた。
- ・評価の1つのヒントを得たような気がする。
- ・複数の大学の評価の取組みを知ることができ、自校の取組みを客観的にながめる事ができた。
- ・評価の重要性そのものと、その評価のやり方について具体的に聞くことができて非常に参考になった。
- ・PBL推進のベースとなる目標設定、評価基準の検討・準備、教育としてあるべき姿について認識を深めることができた。
- ・評価項目を明確化することの重要性を認識した。
- ・評価は教育界以外では30～40年前から様々な手法があるので、それらを取り入れることも大切では、と考える。

【職員】

- ・どうすれば学生の成長を可視化できるのか、日々悩んでいる。コンセプトマップという具体的なツールが知れたので、さっそく実践していく。
- ・評価基準や観点の例をわかりやすくご提示くださった。
- ・授業設計にとても役立つ話だった。
- ・カリキュラムにおけるPBLの位置づけに関する話は勉強になった。ただ、実現は難しいとも思った。

【学校関係者】

- ・PBLの評価について大変わかりやすく説明していただいた。
- ・実践例を中心にわかりやすく解説。特に現場の状況を踏まえて、最近の大学の動きもよくわかった。

【学生】

- ・現在の教育・評価について概要を知ることができた。また、ルーブリックは自分を評価することにも使えらると思った。
- ・型をはめてやるのか、完全に自由にするのか、その間をどうとるのか、サポートして何がするのかと

いう観点があることに気付けた。

- ・類似した方法が企業の社員評価にもあるが、感情が入りやすいのが現実であると思った（社会人経験から）。

【企業関係者】

- ・「評価」という基本的だが最も重要なテーマが注視されていない点が浮き彫りになった。
- ・「打たれ強くなった」とは個人としての成長にはなるが、授業として考えた場合、必ずしも評価の対象にならない事もあるという話がとても刺激的だった。
- ・評価における難しさの構造理解に繋がった。
- ・見える化の手法、コンセプトマップは是非プロジェクト科目で実践したいと思った。
- ・「評価」をめぐる具体的なお話をうかがえたので勉強になった。

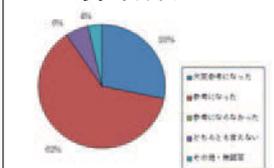
【企業関係者・その他】

- ・評価は永遠の課題で、大変面白かった。
- ・評価という観点から、ストレートにお話が開けてわかりやすかった。
- ・自分から目標を設定して、方向性を決めて行動していくことが大切。

●発表 2011年度プロジェクト科目受講生による報告は、参考になりましたか？

2011年度プロジェクト科目受講生による報告は、参考になりましたか？	人数
a) 大変参考になった	24
b) 参考になった	53
c) 参考にならなかった	0
d) どちらとも言えない	5
e) その他・無回答	3

2011年度プロジェクト科目受講生による報告は、参考になりましたか？



【教員】

- ・具体的な取組み内容や自己評価等よくわかった。
- ・教員による説明があると、さらに理解できたと思う。
- ・プロジェクト型授業（プログラム）の重要性がよくわかる具体例、成果を見せてもらった。
- ・プロジェクトの1年間の活動プロセスを知ることができた。
- ・文系学生のプレゼンスキルが高い。
- ・常にそこに私には見えなかった世界がある。これは彼らが古い共有概念を持たない新しい人々だからだと思う。それこそがこの社会を活性化してゆく装置だ。
- ・プロジェクトを1年間で終了するのではなく、次期のグループに引き継いで指導的な立場から参加するようにデザインできるとよいと思う。
- ・発表については、活動状況や想いなどが伝わる良いものだったと思う。ただし、失敗やチーム内の葛藤についてなど、もっと生々しいことも聞きたかった。
- ・見やすい、わかりやすいプレゼンだった。プロジェクトリテラシーと絡めて最後をまとめと、さらに良かった。

【職員】

- ・鐘のプロジェクトは、社会的文化的意味のある内容と感じる。きちんと振り返り、次につなげるべきところまで考え抜いているところが素晴らしい。今期で終わらず、継続事業として進めてもらいたいところから感じた。応援している。

【学校関係者】

- ・どちらのプロジェクトも学生がわかりやすく年間の活動の概要を報告しており、プレゼンのまとめ等も含め非常に良かった。
- ・問題解決に対する議論や突っ込みが少し不足しているように感じた。大学ではもう少し問題の本質に迫り、クリエイティブな解決策（アイデア）や現代的な問題点を掘り起こしてほしかった。「答えはない」から出発すべき。

【学生】

- ・学外の人の協力を得られることの大切さ、苦労について、失敗談なども、もっと聞きたかった。
- ・秋学期成果報告会よりプレゼンテーションが洗練されていた。学生にとっても非常に貴重な機会であったと思う。

【企業関係者】

- ・プロジェクト内容の大きさに驚いた。
- ・鐘プロジェクトの報告で、反省としてさらに高いレベルを考えていることが素晴らしいと思った。
- ・かなりレベルの高い取組みだった。社会人の私でも新鮮な気付きを多く得られた。

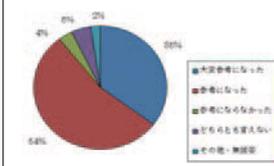
【その他】

- ・鐘織物の方々の現状は見えてきたが、本人の意見や織物文化を伝える、そこに住む住民の実際的手段を踏み込んで知りたい。

●報告「東京電機大学情報環境学部におけるPBL型授業の評価について」及び「専修大学ネットワーク情報学部におけるPBL型授業の評価について」は、参考になりましたか？

報告「東京電機大学、専修大学の「PBL型授業の評価について」は、参考になりましたか？」	人数
a) 大変参考になった	30
b) 参考になった	46
c) 参考にならなかった	3
d) どちらとも言えない	4
e) その他・無回答	2

報告「東京電機大学、専修大学の「PBL型授業の評価について」は、参考になりましたか？」



【教員】

- ・様々な型があって、課題があることが参考になった。
- ・私の勤務大学にはほぼ全くない形なので、非常に興味深かった。私の専門（日本語教育）においては従来から取り組んでいることなので異分野のPBLを知る良い機会になった。
- ・どの大学も共通の悩み（課題）を捉えながらも実践していることがよく理解できた。
- ・両大学（学部）ともPBLを重視し、しかもこれを地道に実施・実践しておられることに、大変刺激を受け参考になったし、且つ、そのことに敬意を表します。
- ・評価の仕方、従来型の授業形態に捉われない授業体制など参考になった。

【職員】

- ・それぞれの大学の取組みや創意工夫、苦労をうかがうことができた。
- ・プロジェクト科目だけでなく、他科目との連携を意識されたプログラム作りの話が刺激的だった。

【学校関係者】

- ・大学ごとにプロジェクト型授業を模索していることが良くわかった。
- ・大学全体に取組みが見えて、スゴイと思った。

【学生】

- ・自分の知っているPBL評価およびプロジェクト科目の実施方法を知ることができた。
- ・専修大学の、学生・教員の双方が企画書を出せることがユニーク。
- ・学外のPBLも評価基準に関して悩んでいることを知った。また、他大学はプロジェクトの位置づけを必修に近い形で科目化しているということがわかった。

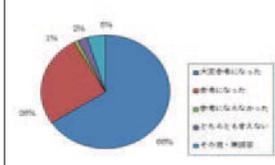
【企業関係者】

- ・時間を評価軸としてとらえる考え方が非常に面白いと思った。
- ・専修大学の、学生と教員が相互にテーマを出し合うシステムに興味を持った。
- ・必修化すべき（全ての学生にPBLの学びを体験してほしい）と願う立場としては、専修大学の評価の内容をもっと細かく聞きたかった（モチベーションの低い学生の対策など）。

●ディスカッション「誰が何をいかに評価するのか？」は、参考になりましたか？

ディスカッション「誰が何をいかに評価するのか？」は、参考になりましたか？」	人数
a) 大変参考になった	56
b) 参考になった	22
c) 参考にならなかった	1
d) どちらとも言えない	2
e) その他・無回答	4

ディスカッション「誰が何をいかに評価するのか？」は、参考になりましたか？」



【教員】

- ・学生の発言が本当に良い視点になった。こんなにたくさんの人の前で自分の意見を言うのは大変だったと思うがシンポジウムに必要なメンバーだった。
- ・評価の難しさを再認識できた。
- ・この場自体が学生にとっては大きな学習機会になっていることが明確だ。

【職員】

- ・評価基準作りとその実践や難しさ、専門性と学びの修得をどう評価するのか、考えていくことの必要性を考慮することができた。
- ・「評価とは次のステップに進む足場作り」という言葉にはハッとさせられた。単位の認定というだけでなく、次に進む何かを提供しないとイケないのだと思った。
- ・学生と腹を割って話すことが大切ということを実践したい。何を評価して欲しいのか、確認できれば指標の良いヒントになるように思った。

【学校関係者】

- ・誰が何をいかに評価するのか？プロジェクト科目を設定する意義、学生が的確に鋭く見抜いていることに感心した。大学教育に留まらず、日本教育の在り方に対する根本的な問いかけだと思う。
- ・学生自身が回答を求めすぎているのでは、小中高の教育の受身体質問題が表面化しているのは残念。自己探求や自律が問題ではないかと思うので、もっと解答がない難しいことなどを考え、悩むことが学生にとって必要ではないか。このようなPBLチーム学習は教えずにいいことも大切ではないか。

【学生】

- ・「学生も評価する力が必要である」ということに、なるほどと思った。
- ・評価する側とされる側の議論が交わされて面白かったし、とても参考になった。
- ・やはり良い結果には必ず良いプロセスがついてくると思う。その中で時間×人数と結果の対比が評価になればいいと思っている。例えば、3人で100人集めるイベントと10人で100人集めるイベントのプロセスの差も見えてくると思う。

【企業関係者】

- ・教員側と学生側の意識のずれを理解できた。溝上先生の的確なコメントに賛同する。
- ・「学生は評価されるだけでなく、評価する主体でもある」という言葉が印象に残った。
- ・学生のコメントが現実的な内容として考えられた。評価者も一緒に走りながらでないと評価できないという点、同じくらい学生と本気で向かい合わないと表面的には何も見えない、という理解だが、企業側としてもその点は考えさせられた。

【その他】

- ・何のための評価か、基本的な問いを一緒に内省できた。学生の体験的発言が重要な意味を持っていた。

■その他、ご意見やご感想 (自由記述)

【教員】

- ・今後もPBLの方法論に関するシンポジウム等を実施してほしい。
- ・同志社大学、東京電機大学、専修大学の各担当者の取組みやプログラム、あるいは特にプロジェクトを体験した学生の声をインターネットに掲載し、他大学の関係者にPBLの必要性や重要性を示唆して欲しいと思う。
- ・PBL科目だけを特別扱いするのではなく、従来のゼミ活動、サークル、ボランティア、アルバイト等学生生活全般において、もっと学生が主体的に「問い」を持つことを尊重するような関わりを進めることが重要だと思う。
- ・本学でもPBLに取組みたいと考えているが、環境、学内の意識等で非常に難しいのが実情。しかし、参考に聞かせていただいて出来る事から取組んでいければと思う。
- ・改めて「評価」を中心にカリキュラム全体を眺めていく取組みを続けていきたいと感じた。
- ・プロジェクトの共通項として「スケジュール管理」や計画の重要性があったと思うが、それを教育目標としたときにどう評価するのか、どう教育に取組むのかを聞きたいと思った。
- ・評価の問題を取り上げていただいたことは大変良かったし、また、学生に発表の機会が与えられている点もよい。

【職員】

- ・「評価=次のステップへの足場」と考えられるようになったことが、学生の「打たれ強さ」に繋がったのだと思う。
- ・パネルディスカッションで学生が言っていた「評価は次のステップに行くための足場づくり」という言葉が印象的だった。認識の内容そのものではなく「評価とは何か？」という問いを立て、それに自分で答えを出したこと、また、そういう答えを出せるようになったことが成果なのかな、と思う。
- ・今日発表した学生の皆さんには5年後にもう1度フィードバックをしてみたい。
- ・非常に刺激的なシンポジウムだった。ありがとうございました。
- ・いろいろ難しいところもあったと思うが、学生の報告を呼応するかたちで担当の先生のお話も聞いてみたい。

【学生】

- ・学生は、担当者の思いを「善意」に解して、良い意味で「放任」されているのだと理解している点には驚いた。
- ・現代の学生たちは一般的に「過保護」な時代に慣れているのではないか。その意味で自ら考え、自ら力をつけることに気付かせるということで、この教育は必要であると思う。本物の評価は社会に出てから受けることであると思う。

【企業関係者】

- ・学びの質をいかに確保するか、を採るにはプロジェクト型でできることが多くあると思ったので、是非様々な面でチャレンジしたいと思う。
- ・一般的に「頑張り」という達成感で成功してしまうプロジェクト科目について、目標とそれに対する達成度を測定しないと大学の授業として行なう意味がない、という溝上先生の意見にとっても刺激を受けた。
- ・またこのような機会があれば、ぜひ参加させて欲しい。